606-436
1200501532582
6
436

東京帝國大學圖書之印

勢多

とゝさて

沸

金井氏ゆづり

昭和七年
東京帝國大學圖書之印

裝幀意匠
題箋　安田靱彦
裝幀　中村岳陵氏

606-436

自序

花から鳥へ、鳥から獸へ、これは必然的に進み來つた私の研究道程でありました、花卉翎毛と並び稱せられてゐる、花と鳥だけは、これまで、どうにか纒めあげましたので、當然、獸類に手をつけねばならぬことゝなり、折を見てはその文獻を涉獵したり、東西の藝術から、これに關するものを探り索めて、私かに材料の蓄積に心を碎いたのですが、扨てやつて見ると、或るものは有り餘るほど豊富であり、或るものは思の外に貧弱だつたりして、豫定した程度までに進行するには中々の困難でした、殊に定つた職務がある身の、僅かの時間を割いてやるので猶更です、それでも漸く此の一卷が纒まつたわけです。

私、自身としては、まだまだ、理想通りには行かぬので、内心少からず焦慮してゐますが、昭和六年の春、その一部である獅子の研究を『美術新論』誌上に發表しました處、非常に先輩の諸賢から激勵を受けましたので、子供のやうに力

づけられ、俄かに馬力をかけたやうな次第であります。

題して『動物と藝術』といひますが、實は哺乳類丈けで、これに附錄の意味で龍を加へました、龍は空想の動物で、これを哺乳類の中へ加へるのは妙なものですが、虎との關係もあり、東洋の動物畫としては離すことの出來ぬものなので加へたわけです、體裁記述總てこれまで通りですが、本書に於ては、餘りに專門的な科學的記述を避けました、全體としての調和上止むを得ぬ爲めです、引用した古い文獻など、それから物語や傳說の出所は大概漏れなく記しましたが唯、科學的說明に要する辭典や圖鑑や、さうした方面の出所は略させて戴きました、なほ此書上梓に對し安田靱彥は題簽を揮毫せられ中村岳陵氏は裝幀の勞を取られ、少からず光彩を添へ得たことを感謝いたします。

昭和辛未の秋

金井紫雲

動物と藝術

目次

狗（いぬ）……二
人と犬と—野生から家畜となるまで—隼人の犬吠—垂仁紀の足往—河內の犬塚—犬の報恩物語—播州犬寺緣起—述異記の犬—畑時能の犬獅子—枕草子に現はれた『翁丸』—和歌に見えたる犬—俳句に見えた犬—狗子佛性—狗は叩—毛益の犬—李廸の犬—應擧の藤花狗子—破來頓繪卷の犬—犬追物—高野草創の犬—犬の最近の名作

狆（ちん）……一七
狆の藝術—愛らしい動物—狆に關する二つの說—玄宗皇帝の狆—『ちん』の語源—六位を賜つた狆—狆の輸入

猫（ねこ）……三〇

愛玩動物としての猫—エジプトの猫—印度では三千年前から—日本への渡來—猫の名は『こま』—猫の種類—長太郎と彦次郎—猫の姿やその習性—猫の目の變化—顏洗ひと天氣—猫の壽命—源氏物語の猫—猫の歌—俳句の猫—ボードレールの猫の詩—猫の怪異—猫嫌ひの淸廉—珍妙な猫の五德—華山の傑作『睡猫驚雀圖』—海北友松の猫—近代作家の猫の繪—南泉斬猫—麝香猫の作

馬（うま）……三六

馬の原始的時代—家畜となる—希臘藝術と馬—印度藝術の馬—『昭陵の六駿』—武氏祠石刻畫の馬—繪畫の馬—李龍眠が『五馬圖』—馬の名手趙子昂父子と任月山—朗世寧と馬—日本に於ける馬の藝術と歷史—馬の渡來—武家と馬と—馬の名稱—白馬節會—正月の春駒—神社の繪馬—馬と傳說—金岡の繪の馬—美術に見えた馬—『馬醫繪詞』—宗達扇面散屛風—馬頭觀世音—八駿圖—伯樂一顧

牛（うし）……五二

藝術に緣の深い動物—原始繪畫と牛—野生から家畜へ—エジプト藝術の牛—牛を崇拜する習慣—關寺緣起の牛—御堂關白と勤行の牛—詩歌の牛—『十牛圖』—佛說の『五牛』—黑牡丹—名作駿牛繪詞殘缺—宗達の牛—支那の繪畫と牛

羊（ひつじ）……六二

羊が家畜となるまで—牧羊の起源—東洋に於ける牧羊—黃初平の話—黃初平の名畫—蘇武と羊—名畫の蘇武—葛由仙人—『羔羊之使』—神祭の羊肉—日本に渡來した始め—ペルリの携へて來た羊—羊の現はれた戲曲『富岡戀山開』—羊の文學—歐洲の牧羊起源—パンの神—『羊を負ふ若者の像』—神話『金毛の羊』—牡牛星座の白羊星—イソップ物語の羊—羊の夥しい種類—正倉院の蠟纈屛風の羊—狙仙の作—ミレーの羊の繪

兎（うさぎ）……七九

兎の分布と習性—兎の種類—奄美の黑兎—古事記の因幡の兎—月と兎—兎と龜との寓話—和歌の兎—俳句の兎—その語源や稱呼—德川家の兎の吸物—兎の名作は鳥獸戲畫繪卷—天香玉兎—兎の名畫—近代での名作

象（ざう）……八八
陸棲哺乳動物の大なるもの—象の壽命—因陀羅と普賢の像—普賢の名畫—江口の君とその作—印度に於る傳說—二十四孝の大舜の象—日本に渡來した物語—山王祭の象—歌舞伎十八番の『象引』—崋山の象の寫生—一蝶の『群肯圖』—ルコンドリールの象の歌—若冲の象の屏風—繪畫と彫刻の象

駱駝（らくだ）……九九
沙漠の舟—特長は肉瘤—その原種—駱駝の古い記錄—奈良朝時代に舶來—俑の駱駝—文政時代に駱駝復來る—『甲子夜話』の手記—駱駝と藝術—駝蹄の羹

獅子（しゝ）……一〇六
百獸王獅子—形態と習性と—獅子の母性愛—埃及のスフヰンクス—アッシリヤ藝術と獅子—ネロと獅子—馬可の獅子像—ドラクロアの獅子—佛敎と獅子—文殊と獅子—名畫の文殊—稚兒文殊—謠曲『石橋』—獅子舞と歌曲の獅子—詩歌の獅子—獅子と傳說—寫生風の獅子と唐獅子—支那に獅子の渡來したはじめ—純寫生風の獅子畫—唐獅子と牡丹の關係—玉取獅子の由來—狛犬は獅子—獅子の名畫—ライオンの名畫

虎（とら）……一三五
龍に配して描かる—虎の名畫と畫題—探幽の『水呑の虎』—岸駒の虎—熊斐の逸事—豐干禪師のこと—四睡圖—孫子邈と虎—二十四孝の楊香—『甲子夜話』の虎の見聞記—巴提使の勇—朝鮮虎願寺の傳說—四獸四神の一たる白虎—萬葉集中の一首—『夫木鈔』の虎の歌—近松の國姓爺合戰の虎—ウイリアム・ブレークの虎の詩—虎はアジア特產の動物—虎の習性

豹（へう）……一四〇
毛皮の美—猫科の猛獸—豹死留皮の出所—豹の性質—ドラクロアの作—古名奈賀豆可美のこと—豹尾神—漢時代方塼の豹—探幽群虎襖繪中の豹—黑豹の作

猿（さる）……一四四
人に近い動物—猿の種類—日本の猿—歷史に猿の見えた始め—『萬葉集』の猿の歌

—『朗詠集』の猿の名作—芭蕉の猿簑の句—古代埃及の聖獸—西遊記の孫悟空—猿の報恩物語—猿の歌—猿の怪異—朝三暮四の話—猿の裁判—猿猴捉月の寓意出所—猿と馬の因緣—猿廻し—唐申の三猿—繪畫と猿の名手—牧溪の猿—猿の名畫—狙仙の猿—近頃での名作

鹿（しか）……一五八

原始時代の繪畫に鹿—動物學上の鹿とその角—牡一頭に多數の牝—鹿の毛皮—神社佛閣に放養す—春日曼荼羅の鹿—春日の角切の神事—嚴島と金華山の鹿—南極壽星と鹿—白鹿出現—鹿と榴花洞—文學上の鹿—『詩經』の鹿—紅葉と鹿—鹿の啼く音—夢野の鹿の傳說—張果老と鹿—鹿食八草—鹿の畫題—柏樹仙鹿—群鹿の作—近年の鹿の名作

熊（くま）……一七一

棲家を追はるゝ熊—羆のこと—赭熊の生活—『東雅』の熊の名稱考—熊の習性と活動—穴捕り—珍味熊掌—熊は茄子を忌む—アイヌ人の熊祭り—熊を詠じた歌—熊架栗棚—探幽の白熊—文晁の雪中熊—古代希臘彫刻の熊

猪（ゐのしし）……一八〇

猪の藝術—分布形態その習性—猪の異名雅名—雄略天皇と猪—崇峻天皇の御悲憤—宇佐の神猪—富士卷狩の大猪—『萬葉集』の猪の歌—摩利支天と猪—猪頭和尙—玄猪のこと—應擧の逸事—猪の繪—隆古の卷狩屏風

狐（きつね）……一九一

蠱惑的な狐—『鹽尻』の狐の說—金毛九尾狐の怪—刑部姫—白藏主の話—稻荷と狐—狐人名を名乘る—狐の戲曲—葛の葉—千本櫻の狐忠信—立圃の機智—瑞獸白狐—萬葉集の歌—和歌の狐—狐の繪畫—現代作家の狐の繪

狸（たぬき）……二〇一

飄逸な動物—狸の形態—狸の生活—奇妙な武器—狸とむじな—『たぬき』の語源—大日本史の貉—狸の變化—狸の報恩物語—狸の腹鼓—狸寢入—狸の文學と繪畫—近代畫の狸

狼（おほかみ）……二一三
狼の分布と現在—その習性や棲息狀態—『おほかみ』の字義—狼の糞が烽煙—江南の豺江北の狼—狼の祭—送り狼—『弓張月』の山雄と野加世—白隱禪師と狼—ヴィニーの『狼の死』—俳句の狼—狼の繪—元信の作—ローマ發祥の聖獸

鼠（ねずみ）……二三〇
去來の鼠の賦—鼠の種類—熊鼠—七郎鼠—エジプト鼠—廿日鼠—こま鼠—鼠の生活—史上の鼠—鼠の異行—和歌の月の鼠と日の鼠—『竹取物語』の火鼠—李斯の鼠—鼠の異變怪異—賴豪阿闍梨の怪—仁木彈正と金閣寺の雪姫—詩歌に現はれた鼠—鼠の嫁入—藤村の『鼠をあはれむ』—鼠の名手白井直賢—鼠の名畫

栗鼠（りす）……二三七
栗鼠の名家用田—宗休の作—栗鼠に配する果樹—現代畫家の作—栗鼠の名稱—栗鼠の習性—愛すべき動物—葡萄栗鼠の歌

鼬（いたち）……二四三
蠱惑的な動物—鼬の種類—鼬の生態—鼬の活動ぶり—鼬の火柱—水中の活躍—瓢簞を嫌ふ—『いたち』の語義—鼬を描いた畫家—最近の作に現はれたもの—鼬と文學—近松の『大職冠』に現はれた鼬

獺（かはをそ）……二五〇
探幽の獺の作—獺の姿と敏捷な習性—移行と繁殖—毛色の變化—獺祭魚—支那の獺飼—『幽冥錄』の傳說

蝙蝠（かはほり）……二五六
蝙蝠の浮世繪情趣—飛行する哺乳動物—蝙蝠の種類—『かはほり』の語義—變つた蝙蝠—夏の活動冬の蟄居—馬鹿を見た陳子眞—夜明砂はその糞—蝙蝠と山椒—畫題と名畫—文學上の蝙蝠—加賀鳶と玄冶店—寓話二つ—扇は蝙蝠から案出

鼯鼠（むささび）……二六六
飛行する動物—萬葉集の歌—物悲しく聞える鳴き聲—日光に多い動物—棲息所と食餌—夥しい異名—火烟を食ふといふ說—荀子の鼫鼠五技—『ももんが』—繪畫に

は少い
麒麟（きりん）……二七一
東洋畫の麒麟は空想の動物—王者仁到れば出づ—支那の麒麟出現—麒麟と文學—繪畫に現はれた麒麟—海北友松琵琶の撥に麒麟を描く—麒麟を畫いた作—麒麟の名に呼ばれるジラフ—ジラフの習性
犀（さい）……二七六
珍らしい犀の繪—犀の歌一首—怪奇な姿—一本角二本角—通天は純白の角—藝術より藥用に
獏（ばく）……二七九
初夢の寶船と獏—獏の形と習性—臆病な動物—マレイ獏—實在の獏と傳說の獏—夢を喰ふ—金葉集の歌—英一蝶の獏の繪
鯨（くぢら）……二八五
若冲の鯨屏風—最大の哺乳動物—捕鯨と藝術—萬葉集の勇魚とり—潮吹く音—鐘の鯨音—鯨の種類—山海名物圖會の鯨とり—鯨と詩歌
◇
龍（りゆう）……二九一
空想の靈的動物—本草綱目の龍の型—龍の九子—龍の種類と特長—『八犬傳』の龍の說—四靈の一—黃帝騎龍—馬師皇と龍—龍女成佛—五爪の龍—龍の原形は何か—登龍門—畫龍の種類—古代の龍—陳所翁と牧溪—龍の畫の名作傑作—雅邦の苦心—龍の還元と靈華の『離騷』—古徑の淸姫の龍

動物と藝術口繪目次

四色版

獅子圖屏風（一部）　狩野永德筆

玻璃版

1 狗子圖　毛益筆
2 藤花狗子　圓山應擧筆
3 睡猫驚雀　渡邊華山筆
4 五馬圖（部分畫）　李龍眠筆
5 駿牛圖殘缺　筆者不詳
6 牧童騎牛圖　李迪筆
7 月下玉兎圖　狩野山雪筆
8 象の圖　伊藤若冲筆
9 傳銅雀台石彫獅子　大倉集古館藏
10 虎圖　牧谿筆
11 豹圖　岸竹堂筆
12 猿圖　傳毛松筆
13 群猿屏風（一部）　雪舟筆
14 鹿圖　尾形光琳筆
15 雪中熊　森一鳳筆
16 猪の圖　森徹山筆
17 白狐圖　尾形光琳筆
18 櫻下狐圖　松村景文筆
19 月下狸　森徹山筆
20 狼圖　狩野元信筆
21 群鼠食瓜　錢舜擧筆
22 栗鼠圖（部分畫）　用田筆
23 鯛圖　森狙仙筆
24 麒麟圖　狩野探幽筆
25 鯨圖　伊藤若冲筆
26 龍圖　陳所翁筆

獅子圖屏風（一部）

雪舟水墨畫

獅子圖屏風（一部）　狩野永德筆

一　狗子圖　毛益筆

藤花象と倚春風衒百威耀意
在工題老休言長併性戲描三
昧然雲中　竹山居士題

二　藤花狗子　圓山應擧筆

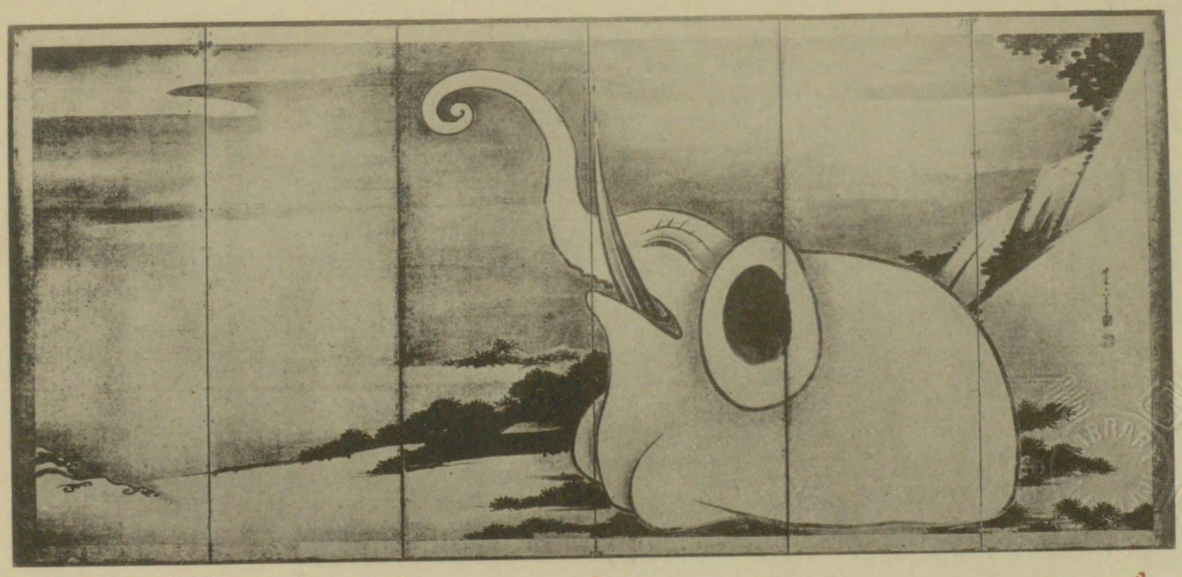
睡猫驚雀　渡邊華山筆

筆眠龍李　（畫分部）圖説　五

缺殘圖牛駿　評不者筆

筆 廸 李　牛 騎 童 牧　六

月下玉兎　狩野山雪筆



伊藤若冲筆　　象　　八

石彫獅子　　傳銅雀臺　　九

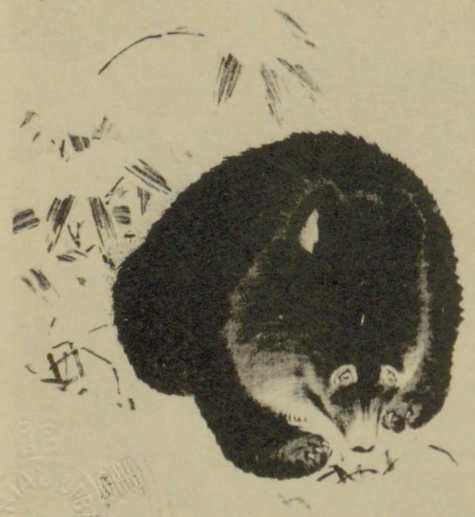
牧谿筆　　虎圖　　一〇

一一　豹圖　岸竹堂筆

筆松毛傳　　猿　　二一

雪舟筆　（一部）　猿群屏風　一三

圖一　雉琳光形尾

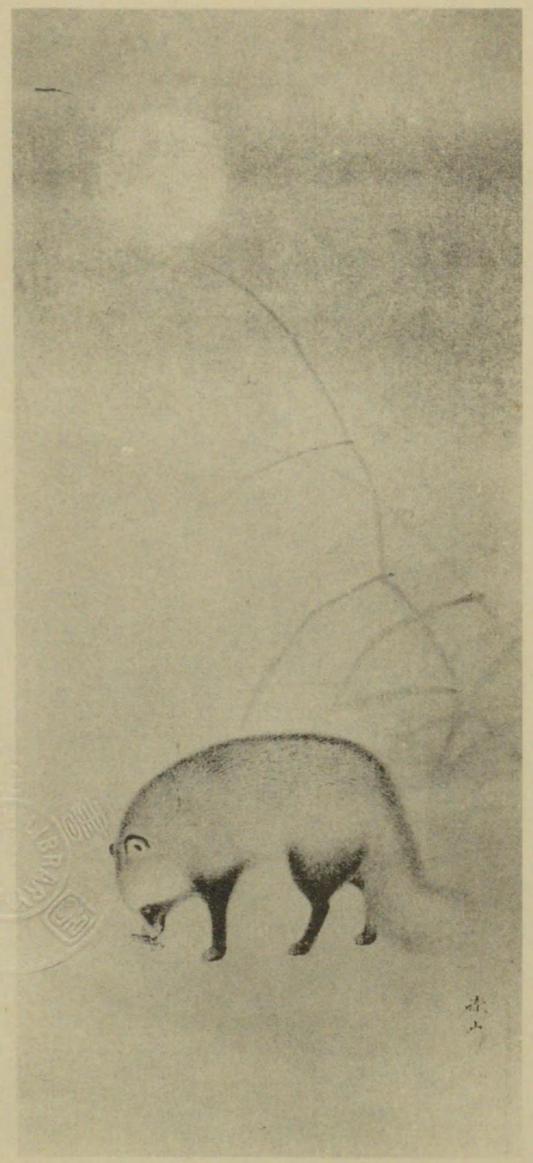


雪中熊　　森一鳳筆

筆山徹森　　猪　　六一

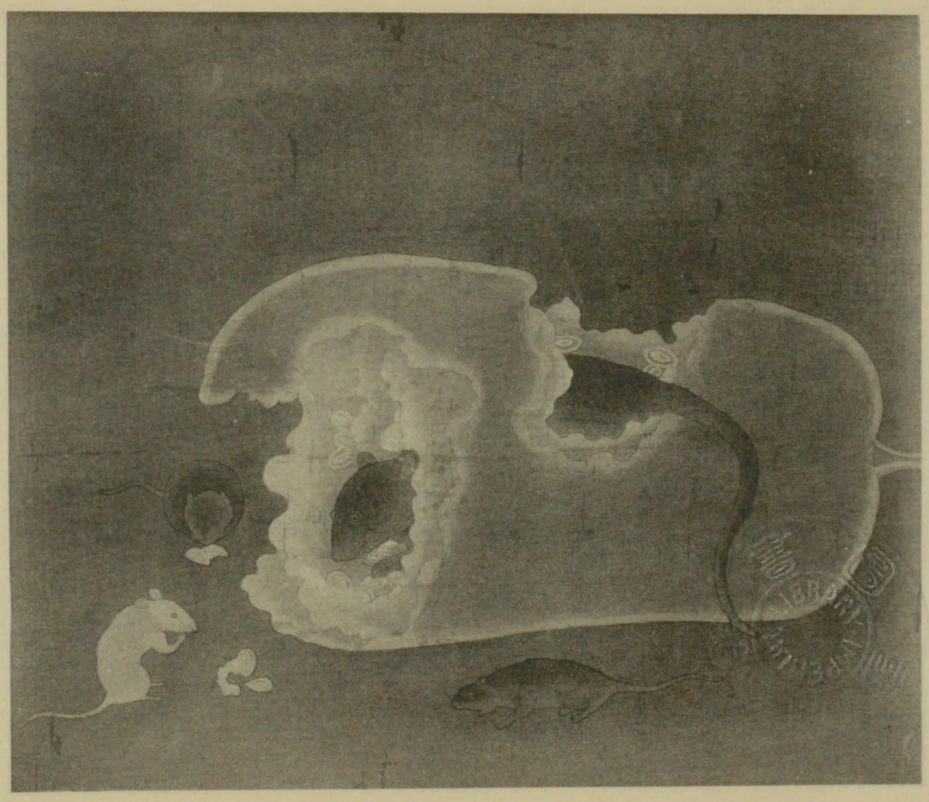
白狐圖　尾形光琳筆

松村景文筆　　櫻下狐圖　　一八

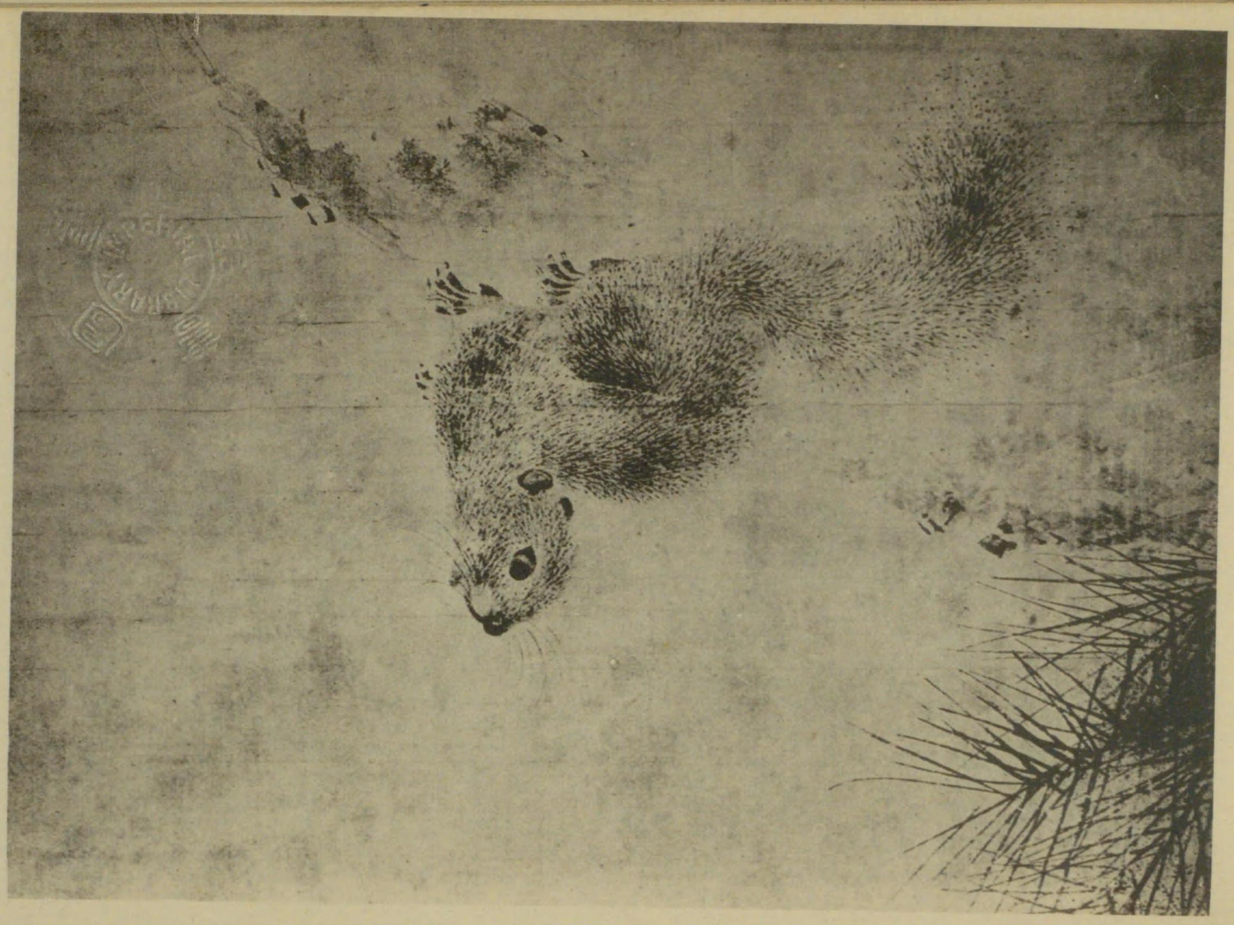


森徹山筆　　狸　下　月　　九一

狩野元信筆　圖　狼　〇二



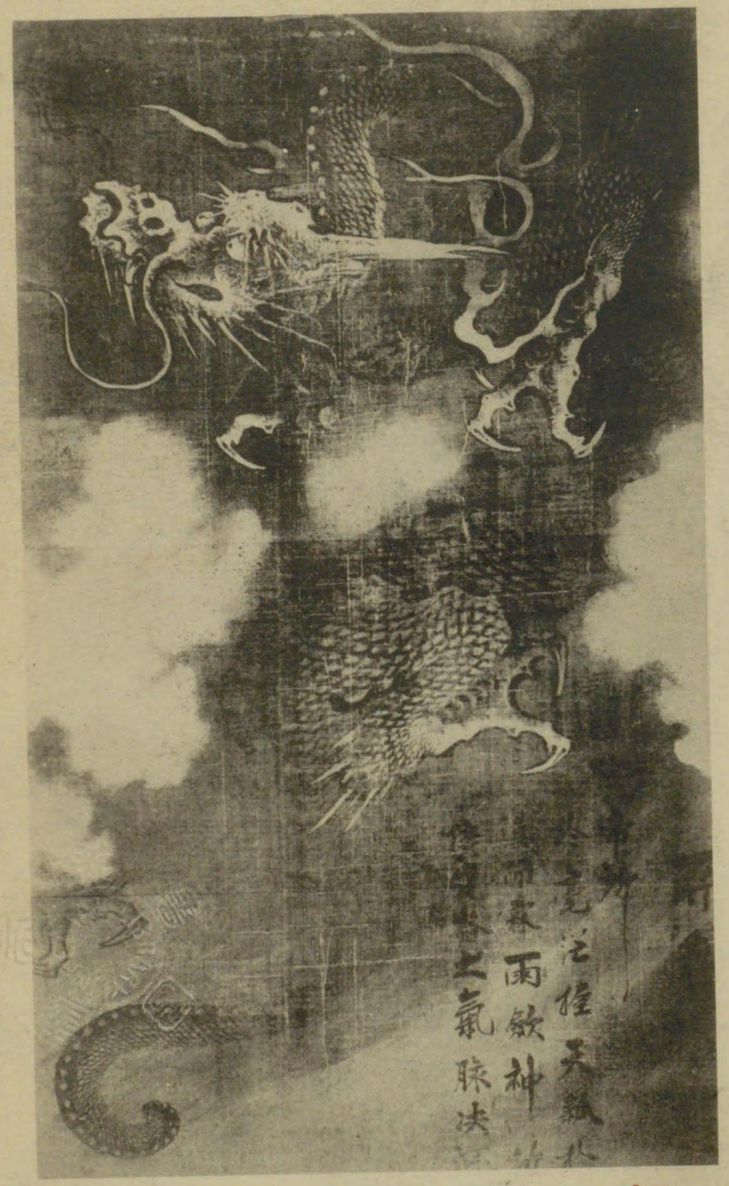
筆學舜錢　　瓜食鼠群　　一二



筆仙狙森　　圖　　鼬　　三二

麒麟圖　狩野探幽筆

鯨　仲滕若冲筆



龍圖　陳所翁筆

動物と藝術

金井紫雲著

狗（いぬ）

人と犬と　凡そ人類に馴れ親しみ、その生活の上に、趣味の上に深き關係を有する動物として、犬位密接なものは少いであらう、今日犬の飼育といふことは世界的に旺になつて、その品種の改良や、名犬の養成に、專門家はそれ〴〵日も夜も足らぬ有樣である、だから、名品種の出づる毎に、愛犬家の間の流行や嗜好も變つて來て、それ〴〵の時代を劃して來たが、犬の特長に從つて獵犬、番犬、鬪犬とその養成の巧みになつて來たことは驚くべきものがある、從つて犬に關する著述の如きも日に多きを加へて行くが、これが藝術的方面に及ぼしてゐるものなどは、殆んど見當らぬといふてもよい位である。

野生から家畜となるまで　さて犬が野獸の群を脱し、家畜として人に親しむやうになつたのは、何時ごろの事であらう、歐洲に於ては既に石器時代に於て、人の伴侶となつてゐたことが、發掘物に依つて明かになつてゐる、今日でも野生犬として遺つてゐる印度のコルスン、馬來半島附近に產するアヂヤツク、亞細亞大陸の中央部、黑龍江地方の山犬などは、やゝ現今の飼犬に近いものではないかといはれてゐるが、元より學者の間にもいろ〳〵論のあることで、今俄かにそれが眞か否かは定め難い。

人が野生の犬を飼ひ慣らして、その生活の伴侶とした、その當時のことをフアブルは

日々の食物は第一に早い足と鋭い嗅覺で得なければならない、極端な缺乏の狀態にあつては所有物中の一番大切なものであつた、犬の働きに依つて先づ石器類を使ひ種々の鳥獸を獲た、次に牧畜の時代が來た、犬の助力の無かつた時は、時々食物の窮乏を告げたり、時には有り餘つて貯藏に困難を感じたりしたが、牧畜のおかげで常に食物に事を缺かぬやうになつた、で人々は時間の餘裕が出來て自分の生活狀態を改善する方法を工夫した。牛や馬や羊を飼ひ馴らし、最後に吾々の幸福の大きい源である農業が始まつた、かうして刺靑をした獵師の野蠻な風習は漸次失はれて、敎養ある種族となつて吾々の時代に至つた、最初にアジア、次に歐羅巴に亙つて同じ進化が行はれた、何處でも犬が人間の獲得した最初の、そして最も價値あるものであつた。

とその『家畜の歷史』の中に記してゐる。

◇

隼人の犬吠　日本に於て犬のことのものに見えたのは何時の頃からか詳かでないが、『舊事記』や、『日本紀』には上代に隼人が宮闕の門を守護するに、犬吠というて、犬の吠えるが如き叫びをなしたことが見え

火酢芹命の苗裔、諸の隼人等、天皇の宮墻之傍を離れず、吠狗に代りて事まつるものなり

と記してあるから、犬が門を守るといふことの如何に古くから知られてゐたかが解る。

垂仁紀の足往　又『日本書紀』の『垂仁紀』には、丹波の國桑田郡に甕襲（みかそ）といふものあり、その飼犬は名を足（あ）

往と呼ばれ、ある日一頭の貉を殺した處、その腹から八尺瓊の勾玉が出たと、これを馬琴は『八犬傳』の八房の生ひ立ちの條に引いてゐる。

かうした事から、また自然、犬に關する傳說なども豐富に現はれて來る。

河内の犬塚　同じ『日本紀』には、有名な河内の犬塚の傳說が載せられてある。

用明天皇の御宇、蘇我の馬子、物部守屋を攻めて河内の國澁川の第に殺害した、守屋の臣に捕鳥部の萬といふものがあつて、戰亂を逃れ、茅渟縣有眞香邑の山中に匿れた、馬子の命を受けた數百の人これを追うて包圍したので萬は遂に百計盡き、自からその首を刎ねて斃れた、河内の國司之が首を梟した處、日頃萬が愛してゐた白犬、萬が屍を廻りて吠え悲しみ、遂に萬が首を啣はへて古塚に收め、これを守りつゝ遂に饑ゑて死す、朝廷これを憐み、萬が墓を作り、これに並べて犬を葬つた、世に之を河内の犬塚といふ。

これも奈良朝の頃の事で、同じく犬がよく主の恩を知つた實例がある。

河内國餌香川原に於て、斬に處せらるゝもの數百、胴頭四肢散亂して、何れを誰とも見極めがつかない、その中に、櫻井の田部連膽淳といふものの屍、その飼犬がよくこれを守り、身を寄せ頭を伏して離れず、漸くにして屍體を收められた、犬はそのあとを、悄然として從ひ歩き出した。

犬の報恩物語　犬が主の危難を救つた物語などは、古來少からず傳へられてゐる、その中で、支那の『搜神記』にある物語など、一掬の涙を禁ぜざらしむるものがある。

吳の孫權の時に、李信純といふものがあつた、一頭の犬を飼ひ、これに黑龍と名づけて寵愛してゐた、一日犬を伴つて家を出で、大醉して草原の中に臥してしまつた、遇々太守の鄭瑕が獵に出て此の草原を過ぎ、草が深いので必らず獲物があらうと臣下をして草原に火をかけさせた、信純はなほ熟睡して火の近づくのを知らない、この時、黑龍は悲しさうな聲を立て袂を啣へこれを引き、いろ〳〵に起さうとしたが中々起きない、火は漸く迫つて來た、すると黑龍は、その近くに流るゝ溪川に行き、身を跳らして水を浴び、信純の臥てゐる周圍を幾十回となく廻り、火を消してゐた、信純漸く眼を覺した時は、犬は疲れ切つて斃れてしまつた、信純初めて火のその身に近づき來つてゐたのを知り黑龍、の忠節に感じ、その死屍の上に慟哭した、太守その聲を聞いて信純に仔細を尋ね、犬の忠に感じ、棺槨を整へ衣衾を添へ、厚くこれを葬つた、世にいふ義犬墓で、その碑は十丈餘の立派なものである。

播州犬寺の緣起　我が國にあつては、播州犬寺の傳說が有名である。

播州に蘇我入鹿の從者で牧夫といふものがあつた、その妻、何時か夫の眼を忍んで召使の某と密通したが、某は主人を殺してその家を奪はんと企て、ある時、牧夫に語つて曰く、この山中に鹿猪のよく集る處がある、未だ何人もこれを知らず、共に往てこれを獵しようではないかと、牧夫は深い謀計のあるとは知らず、愛犬二頭を伴ひ山中に入つた、すると某は一段高い處に上り、弓に矢を番へて將に牧夫を射殺

さうとしてゐる、牧夫はじめて奸計を知り、腰から行糧を出して愛犬に分ち與へ、我は今、こゝに死す、汝等は我が屍を啣へて、こゝを去れと、犬は耳を垂れて聞いてゐたが、一頭は忽ち身を跳らして召使某に近づきその弓弦を嚙み切り一頭は咽喉に嚙みついて仆してしまつた、牧夫はそこで、二犬を伴ひ歸り、不貞の妻を逐つて、我が子の如く犬を愛し世を送る中、犬の壽は短かく、相踵いで死んでしまつた、牧夫大に歎き、その財寶を盡して二犬の爲めに一寺を建立してその冥福を祈つた。—元享釋書—これが犬寺で、書寫山の奥にあるといふことである。

犬が主に危害を加へんとするものの咽に嚙みつき、その身は斬られて頭を刎ねられてゐたといふ物語は、參州の犬頭社の緣起にもあり、馬琴はこれを『弓張月』の中に取つてゐる。

この外、『今昔物語』には、三河の郡司の犬が、蠶を食べて鼻から糸を吐いた不思議な物語を載せてゐるし、犬頭社と同じ筋道の陸奥の國の狗山の傳說を載せ、『古今著聞集』には、犬がその愛を受けた人の爲め、その命日忌日に精進をしたといふ物語を二つまで載せてゐる。

◇

述異記の犬　犬がその性怜悧で、よく人の命を聞く事は普ねく知られてゐることであるが、支那の『述異記』には、黃耳といふ犬の物語が載せてある、曰く

陸機吳に有り、後、洛に仕ふ、戲に犬に語つて曰く、家絕えて音無し、汝能く馳せ往くや否や、犬尾を

搖し聲を作し之に應ふに似たり、機、書を爲し盛るに竹筩を以てし頭に繫ぐ、犬、驛路に出で走つて吳に向ひ、饑る時は則ち草を食み、水を經れば輙ち渡者に依つて船に上り機が家に到る、書を取り看畢れば又人に向て聲を作し求むる所あるが如し、其家書を作て筩に納れしかば、仍ち馳て洛に還る、後犬死す、之を葬つて黃耳塚と呼ぶ。

畑時能の犬獅子　我が朝にあつては、南北朝の頃、北國の勇士畑六郎左衞門時能その愛犬を犬獅子と呼んで愛撫してゐた、此の犬、稀代の名犬で、よく主人の命を聞き、敵の城中に忍び入り、守備の兵の寢むり、夜廻の止む時は直ちに馳せ歸りてこれを告ぐ、時能の臣、此の犬を先頭に立てて城中に斬込み、奮戰したので、落ちぬといふ城はなかつたと、『太平記』に記されてゐる。

◇

枕草子に現はれた『翁丸』　文學に現はれたものでは、先づ清少納言の『枕草子』に見えた、翁丸の物語があはれである、同じ獸に生れながら、猫の方は奢をきはめ寵を恣にし、犬はさゝやかなる科の爲めに洗され虐げられる、その文章も妙を極めてゐるので、少しく長いが、犬のよく描かれたものとして、逸することの出來ぬものであるから、こゝに引く。

うへに侍ふ御猫は、かうふり給はりて、命婦のおもととて、いとをかしければ、寵かせ給ふが、端に出でたるを、乳母の馬の命婦、あなまさなや、入り給へとよぶに、きかで、日のさしあたりたるにうち眠

りて居たるを、威すとて、翁丸いづら、命婦のおもとくへといふに、まことかとて、癪物走りかゝりたれば、おびえ惑ひて、御簾の内に入りぬ、朝餉の間にうへはおはします、御覽じていみじう驚かせ給ふ、猫は御懷に入れさせ給ひて、男ども召せば、藏人忠隆參りたるに、この翁丸打ち調じて、犬島につかはせ、只今と仰せらるれば、集りて狩りさわぐ、馬の命婦もさいなみて、乳母かへてん、いとうしろめたしと仰せらるれば、かしこまりて、御前にも出でず、犬は狩り出でゝ瀧口などして追ひつかはしつゝあはれ、いみじくゆるぎ歩きつるものを、三月三日に頭の辨、柳のかづらをせさせ、桃の花かざしにさゝせ、櫻腰にさゝせなどして、ありかせ給ひしをり、かゝる目見んとは思ひかけけんやと、あはれがる。御膳のをりは、必むかひさふらふに、寂寥しくこそあれなどいひて、三四日になりぬ、ひるつかた、犬のいみじく泣く聲のすれば、なにぞの犬の、かく久しくなくにかあらんと聞くに、萬の犬ども走り騷ぎとふらひに行く。御厠人なるもの走り來て、あないみじ、犬を藏人二人して打ちたまふ、死ぬべし、流させ給ひけるが歸りまゐりたるとて、調じ給ふといふ。心うのことや、翁丸なり、忠隆實房なん打つといへば、制しに遣るほどに、辛うじてなき止みぬ、死にければ、門の外にひき棄てつといへば、あはれがりなどする。夕つかたいみじげに腫れ、あさましげなる犬のわびしげなるが、わなゝきありけば、あはれ丸か、かゝる犬やはこのごろは見ゆる、などいふに、翁丸と呼べど、耳にも聞き入れず、それぞといひ、あらずといひ、口々申せば、右近ぞ見知りたる、呼べとて、下なるを、まづとみのことゝ

て召せば、參りたり。これは翁丸かと見せ給ふに、似て侍れども、これはゆゝしげにこそ侍るめれ、又翁丸と呼べば、悦びてまうで來るものを、呼べど寄り來ず、あらぬなんめり、それは打ち殺して棄て侍りぬとこそ申しつれ、さるものどもの二人して打たんには、生きなんやと申せば、心うがらせ給ふ、暗うなりて、物くはせたれど食はねば、あらぬものにいひなして止みぬる、つとめて御梳櫛に參り御手水まゐりて、御鏡もたせて御覽ずれば、侍ふに、犬の柱のもとについ居たるを、あはれ昨日、翁丸をいみじう打ちしかな、死にけんこそ悲しけれ、何の身にかこのたびはなりぬらん、いかにわびしき心地しけんとうちいふほどに、この寢たる犬ふるひわななきて、涙をたゞ落しにおとす、いとあさまし、さはこれ翁丸にこそありけれ、昨夜は隱れ忍びてあるなりけりと、あはれにてをかしきことかぎりなし、御鏡をもうちおきて、さは翁丸といふに、ひれ伏していみじくなく、御前にもうち笑はせ給ふ、人々參り集りて、右近内侍召して、かくなど仰せらるれば、笑ひのゝしるを、うへにも聞し召して、渡らせおはしまして、あさましう犬なども、かゝる心あるものなりけりと笑はせ給ふ、うへの女房たちなども聞きに參り集りて、呼ぶにも今ぞ立ちうごく、猶顔など腫れたんめり、物調ぜさせばやといへば、終にいひあらはしつるなど笑はせ給ふに、忠隆聞きて、台盤所のかたより、まことにや侍らん、かれ見侍らんといひたれば、あなゆゝし、さる者なしといはすれば、さりとも終に見つくるをりも侍らん、さのみも得かくさせ給はじといふなり、さて御畏勘事許されて、もとのやうになりにき、猶あはれがられて、ふるひな

き出でたりし程こそ、世にしらずをかしくあはれなりしか、人々にもいはれてなきなどす。虐げられ、さいなまれて、なほ元のところへ戻つて來る翁丸の姿が目に見えるやうに書いてある。これらが散文に現はれたものゝ中では優れた作といへよう。

和歌に見えたる犬　歌などを見ると、『萬葉集』には見えず、『夫木集』には、六首を集めてゐる、曰く

山里はひとの通へるあともなしやどもる犬の聲ばかりして　定家卿
さとひたる犬のこゑにてしられけり竹よりおくの人の家居は　同
思ひくまの人はなか〳〵なきものをあはれに犬の主をしりぬる　慈鎭和尙
ひとすぢにいとひすつべき家の犬なにのよことの人とかむらん　爲家卿
さよ更けていそくきぬたのあたりまでうたてもさらぬ里の犬かな　藤原爲顯
主しらぬをかへの里をきととへばこたへぬさきに犬そとかむる　後京極攝政

新しい作家の歌に、

つやゝかに南京豆の乾されたる庭のむしろに小犬ねむれり　茅野雅子

といふ一首があつた、情景がよく出てゐる。

俳句に見えた犬　俳句の方では流石に人の生活に近い動物丈けに、いろ〳〵の方面に現はれて來る。

花見にも立たせぬ里の犬の聲　去來

犬の聲しばし里ありむら薄　曉台
むく犬のしづかに歩む落葉哉　超波
きぬぎぬに犬を拂ふや袖の雪　其角
犬に逃げ犬を追ふ夜の凉み哉　嵐雪
山吹に犬のあくびの日永かな　沾凉
花ありて犬の育たぬ里もなし　常矩
朝顏や垣にしづまる犬のこゑ　白雄
かきつばた何物おもふ犬の舌　巴人

支那の詩文に現はれた句の記憶に殘るものを擧げて見ると

一犬吠人來、松窓破秋夢　謝榛
柴門聞犬吠、風雪夜歸人　劉長卿
驪虞麟趾同靈囿、抱子花蔭臥石苔　虞集
却被捲簾人放出、宜男花下吠秋晴　貢性之
子を抱いて花蔭石苔に臥したり、宜男花下秋晴に吠えたり、亦一幅の好畫題ではないか。

◇

狗子佛性　畫題といへば、犬に關するものゝ中、有名なのが、『狗子佛性』である、趙子和尚は池州南泉禪師の法嗣で、曹州赦鄉の人、初め本州扈通院に從ひ、後、南禪に參した、唐の乾寧四年十一月二日寂した、百二十歳といはれてゐる、和尚が狗子に關する公案は、無門關四十八則の第一則となつてゐる、曰く

趙子和尚因僧問、狗子還有佛性也無、州曰無。

これまた、好個の畫題で、『南禪斬猫』と共に古來双幅として描かるゝ處、日本美術院に於て、曾て富田溪仙氏これを描き、好評を博したことがある。

それから『一笑圖』といふのがある、南畫家のよく畫くところで、竹の下に犬を配す、即ち笑の字の繪畫化で、崋山の作などにこれを見る。蘇東坡の洒落から來たものといふ。

◇

狗は叩　犬は、古く狗の文字を以て現はしてゐる、『本草綱目』の說に從へば、狗は叩で

吠聲有節如レ叩レ物、犬字象二卷尾懸蹄之形一

と、普通犬には二た通りの聲がある、一つは人に馴れ睦み、或は媚びて吠える聲、一つは夜半などに怪しきものに出會つたりする時に吠える時で、この時には聲を長く引いて高く吠ゆ、これは野生當時の名殘が未だ殘つてゐるわけである、それから犬の字の象徵である、尾を卷くの形も、人に親しみ喜ぶ時の形であつて、犬が一身の危險に遭遇した時、又は何か不安の伴つた時は決して尾を卷かず、これを後肢の間に挾んで警戒

する、文字に自からこれが現はれてゐるから面白い。

又、『いぬ』といふ語義に就いては、『い』は家のこと、『ぬ』は助詞であらうと、新井白石の『東雅』には說いてゐるものゝ、餘り的確な解說とも思はれない。犬と狗の區別については、狗とは小さいものを言ひ、犬とは大なる種類を稱するものと說かれてゐるが、その典據も多分牽强付會らしい處がある。

◇

毛益の犬　繪畫に現はれた犬を見やう、古來、東洋に於て、犬の名手として聞えてゐるものに、毛益がある、崑山の人で、南宋孝宗の朝、乾道年中に畫院の待詔となつた、その狗子や猫は最も得意とする處で、毛描きなどには一流の技巧を創めてゐる、『君臺觀左右帳記』にも、花鳥獸彩として上の部に入れてゐる、その作の中で、我が國に傳はつてゐるものでは、井上侯爵家舊藏の『狗子』を第一に擧げねばならぬ、この作は僅か、六寸に七寸ほどの小品であるが、狗子の生態躍動し、眞に絕品と稱すべきものである、福岡子爵家舊藏に、傳毛益の『萱草狗子』の横物がある、これも漸く八寸四方位の小品であるが、五頭の狗子と岩石、これに萱草を描いてゐる、その畫風のよく現はれてゐるもの、それから酒井伯爵家舊藏毛益の狗は麝香猫と對幅で、極めて有名な作である。此の狗の特徵と見るべきは、前二作の何れも愛らしい狗兒であるが、此はやゝ野生に近い狼の如き慓悍なる姿の狗を描いてゐることで、背景に桂花と鳳仙花を描いてゐるなども、此の作家の一つの特徵である。

李廸の犬　李廸もよく犬を描く、この人は毛益よりは少しく前、同じ宋時代であるが徽宗帝の宣和年中に畫院に入つて成忠郎となつた人、花鳥は得意であるが、山水にも傑作を遺してゐる、その狗子を描けるものに細川侯爵家の所藏のものや、松浦伯爵家の左右に美人を配した三幅對などがある。

この外中山氏舊藏に邊景昭の『白狗圖』があり、先年開かれた唐宋元明名畫展には朗世寧の『竹陰西靈圖』、明の宣德帝筆の『双狗』などが出品され、昭和六年東京に開かれた朝鮮名畫展に李王博物館から出品された『鬪犬圖』は、檀關筆で、今いふブルドツク型の猛犬で極めて珍らしく、朝鮮總督府博物館出品の李巖筆『狗子圖』も珍品であつた。

◇

應擧の藤花狗子　我が朝に於ては、犬をよくする人決して少くない、その中で應擧は、その作も多く、また寫生をよくしてゐたので、その姿態を描くに妙を極めてゐた、森嚴とか、幽雅とかいふ味ひには乏しいにしても、如何にも和氣滿々たる畫風を作つた、その代表作といふべきは、有名なる『藤花狗子』（片岡直溫氏舊藏）である、落欵に安永丙申盂秋寫とある、藤花咲き亂るゝ下に、五個の狗が相戲れてゐる和やかな畫面で、中井竹山の賛がある曰く

藤花裊々倚春風、狗子成群意匠工、趙老休言無佛性、戲遊三昧紫雲中。

と、此の畫にふさはしい平易な作である。

應擧にはこの傑作の外に、或は竹の下に狗子を描いて、畫題の『一笑圖』をそのまゝに見せたのがあり、或は黃蜀葵の下に、或は木瓜の花に狗子を種々の姿に畫いてゐる、人物に配したのは、『美人狗兒圖』（栢原氏藏）など應擧としては珍らしい、この應擧の狗子の畫風は今に永く傳はつてゐる。

この外、狗子を畫いた名作としては、宗達の國寶扇面散屏風の中に、空を仰いだ面白い形の作があり、宗丹は華曼草に配して犬を描き、蘆雪は野菊に犬を添へて描いてゐる。松平子爵舊藏には、また二直庵筆の狗兒圖があり、槲の下に群犬を畫いてゐるが、これは洋犬風の種類である、孝敎には應擧そのまゝを見るやうな『雪中狗子』があり、松花堂や、相阿彌にも面白い作がある。

破來頓繪卷の犬　繪卷には、處々に現はれて來る、その中でも德川義親侯爵藏の『破來頓繪卷』は、その第一卷が、犬のことで始まつて居り、出家が涙に暮れて名殘を惜しむ侍者や童女をも振り放して

あらをこがましや、おのれらを夢のうちのあだと知らぬ程こそあれうたはさりぬべき家の犬かや破來頓、

破來頓

と記してゐる、この犬、大和犬のよい形に描かれてゐる。

犬追物　犬に關係の深いものとしては、武術の上に犬追物がある、騎馬で犬を追ひながらこれを射る一つの競技で、鎌倉時代から行はれた、『東鑑』に

承久四年二月六日於南庭有犬追物云々

と記されてゐるなど、その記錄の古いものであらう、その後、應仁亂あたりから中絶されたのを、元和年中島津忠久が再興したとある、馬場は弓杖七十杖四方、これに白犬百五十頭を放ち、場内に張り渡した繩を越える時射るのである、御物に有名な『犬追物屏風』があるし、當時の風俗を知る上に絶好のものとせられてゐる。

近くは狩野芳崖翁が、島津家の依囑に依つて描いた作がある、之は當時天覽に供した犬追物の實寫で、演技中の人物など悉く似顔であるといふので有名であるが、『犬』といふ方面から見る時には、射られる的代りなので、餘り有難いものではない。

高野草創の犬　それから、犬が繪の上で重要のものとなつてゐるのは、『高野草創』の犬である、弘法大師が高野山を開基する時、丹生明神の使が犬となつて姿を現じ、大師を導くので、構圖が面白い處から古來、よく畫かれる、現代の作家では、安田靫彦氏にその作があり、岩田正巳氏は十回の帝展にこれを描いて、特選を贏ち得てゐる。

犬の最近の名作　狗子を畫いた近い傑作としては、中村岳陵氏が第十六回院展出品の『白狗』が擧げられやう、帝展にも、近來犬を畫いた作品がよく現はれる。彫刻で、藤井浩祐氏は、自から數頭の犬を飼ひ、この方の研究は堂に入つてゐるので從つて製作の上によく現はれて來る、洋畫では三上知治氏、また犬を愛し、これをよく畫く、三上氏の出品としいへば、直ちに犬を聯想する位に有名なものである。

外國の例を擧げると、紀元前五六世紀の頃、既に青銅の立派な獵犬の製作があつて希臘美術の精粹を誇つてゐるものがある、繪畫に描かれたものなど悉く擧げたならば、殆んど際限はない位であらう。

狆（ちん）

狆の藝術　狆はいふまでもなく、犬の一種であるから、その中に記すべきであるが、藝術上では一寸普通の犬とは趣きを異にする處があるので、特に、この一項を分けて見た。

その普通の犬と異る點は、犬といへば直ぐに獵犬や番犬が目に浮ぶのであるが、狆のみは、丁度猫と同じやうに座敷に飼はれる、從つて婦女などに愛せられ、それが一種の浮世繪風の情趣を描き出して來る、春章にも、狆を愛する美人の立姿の作もあれば、北齋が宗理時代にも、猫を懷に、狆を足もとに揶揄つてゐる作がある、抱一は横物として、これを畫いてゐる作が一二あるし、幽谷には『花籠戯狗』と題した美しい作がある、現代の作家では池上秀畝氏に藥玉に狆を配した作のあるのを記憶してゐる。

◇

愛らしい動物　狆の形狀を見ると、體は普通の犬に比して遙かに小さく、頭は圓く兩眼の間から、鼻の邊までの距離が極めて短かいので、こゝに特色のある顔付が現出するわけである、そして鈴を張つたやうな眼

の美しさ、耳は小さいがふさ〳〵した毛が肩の邊まで垂れてゐるのも美しい。

狆に關する二つの說　毛色は白が多く、これに黑の斑の交つてゐるのもあり、褐色のものもある。扨て狆は、日本獨特のものであるといふ說もあるが、矢張外國から渡來したといふ說の方が事實に近いやうである、西曆一九〇〇年、エヂプト古代の墳墓發掘中、狆型の犬の頭骸骨が發見されたが、これらが狆の種類の祖先ではないかといふ說を爲すものがあり、又、支那には土着の狆型の犬があり、二千年以前の藝術にこれを發見するものありといひ、此の支那固有の狆と密接の關係のあるものとして、西藏狆が擧げられてゐる。この西藏狆は西藏及北部印度に分布してゐるものであるといふ。

玄宗皇帝の狆　又、支那に於ける狆の說として、『日本百科大辭典』等には、支那狆は唐の玄宗皇帝の時には猲子と記され、宋の時代に於ては蜀の羅紅犬、羅江狗、桃花犬と記されてゐると述べ更に本邦の狆は、古代に中國九州の人々が、朝鮮支那と交通し、或は彼の國人が我が國に移住して狆を齎らしたものといひ、明かにこれを記すものとして、聖武天皇の天平四年夏五月新羅より蜀狗一頭獻上されたことが記され『日本逸史』には淳和天皇の天長元年夏四月、渤海國より支那狆二疋獻上されたことを記す、それから足利時代に至つては、歐洲の船屢々來港して狆の輸入されたものがあり、これが日本人獨特の飼ひ慣らし方に依つて、現在のやうな日本の狆が生れ來つたものとしてある。

◇

『ちん』の語源　狆といふ文字を『ちん』といふ語源に就いては、『嬉遊笑覽』には、安積澹泊が、寒川儀太郎某に與へた書簡中の一句

さつまより出候犬の一種ちんと申候正字御尋にござ候、すべてかやうのこと心に留不申一切覺不申候

とあるを錄し、『北齊書』を引き

通鑑に有之候東魏秦靜帝高澄に逼られ、朕は狗脚朕と申され候は近代の落しばなしに能合申候儀と日ごろ戲言に申出候迄にござ候とあり、これもとよりチンの名義にはあらずをかしきことなればこゝに錄す、さてチンの名義例の押あてながら犬に似て小きもの故、ちいといひしが、チンとなりしにや、近時チンも位を給はりしと云へる物がたりあり。

といひ、『言海』には

狆、チン、外國語ならむ、字は中の唐音に因て作れる和字か、或は小の轉かともいふ

と記してゐる、この邊が眞に近いのではあるまいか。

◇

六位を賜つた狆　その文字は一般には狆の字を書いてゐるが拂菻狗、猻子、馬鐙狗などの文字も見える。『嬉遊笑覽』にある、狆が位を貰つた話といふのは、『耳袋』に載するところのもので、天明九年ある大名が、上洛のみぎり、一頭の狆を召つれてゐた、この狆は、平常大名の寵愛する處、狆も愛に馴れて毫も傍を離れ

ず、上洛の際も附き隨つて離れないので、遂に召連れた次第を言上すると、そのこと天聽に達し、畜類ながら、主人のあとを慕ふ心あはれであるとて、六位を賜つた、これを聞いて何者か

くらひつく犬とはかねて知りながらみなよの人のうやまわんわん

と落首を書いたので、一時世の評判となつたといふ。

狆輸出　日本人は狆を飼ふことが上手なので、明治の初年、それが盛に輸出された、いま淺草にある『ちん屋』といふ牛肉屋など、この狆輸出を業とした家で、今もその名丈けが殘つてゐるのだといふ。

猫（ねこ）

碧眼烏圓食有魚　仰看胡蝶坐階除。

これは劉基が詩の句、これを誦してゐると眼のあたりに飛んで來る蝶の姿に、きつと身構へてゐる猫の姿が繪のやうに浮んで來る、花下に眠る猫、蝶に戯るゝ猫、小鳥を狙ふ猫、これ悉く花鳥畫の好畫材である。

愛翫動物としての猫　猫は犬と共に家畜―殊に愛翫動物として、非常に親しみを有つてゐる、そのため猫に關する文獻や資料を集めたなら、それこそ汗牛充棟もたゞならぬ有樣となるであらう。

かうして犬と比べたり、家畜としての生活を考へると、直ぐにその原始時代のことが偲ばれて來る、學者の研究した處に依ると、猫は隨分古く野生狀態から、家畜にまで飼ひ馴らされてゐるが、それでも犬に比べると餘程新しいといはれてゐる、フアブルに依るとエヂプトの南、アビシニアの森の中で、時々人馴れたグラヴドキヤットと言ふ一種の猫が發見されるが、これが非常に今、人の家に畜はれてゐる猫に似てゐる、そしてこれが、今日の猫の祖先と見られてゐるのである。

かうして、猫が野性から家畜となつた經路を見ると、確かに西洋より東洋の方が早い、それだけ東洋人の方が、動物を飼ひ慣らす術に勝れてゐるわけであらう。

◇

エジプトの猫　今から凡そ四千年前、エジプトでは非常に此の猫の尊崇された時代がある、古代埃及の人は、すべて動物を崇拜し、牛でも猫でも、犬でも獅子でも、時には狒々のやうな動物まで神聖なものとして崇拜したものであるが、猫も王族と同じやうな待遇を受け、若し猫が死ぬと、丁度貴族の木乃伊を作るやうに、猫を木乃伊とする、そしてその死屍には香料を塗り、美しいリンネルの紐を飾りとし、匂のよい木で作つた棺に入れた、この棺には種々の模樣を描き、必らず碑文を記し、堅い岩石を掘つた墓穴に安置されてゐたのである、その四千年前の猫の骨格を調べて見ると、今日の猫と少しも變りはないといふことである。

◇

印度では三千年前から　印度地方では、三千年前既に猫が飼はれてゐたといふことである、その主なる目

的の一つは、印度も殊に東印度地方にあつては、毒蛇が非常に多く、人の生活がこの爲め脅かさるゝことが少くないので、猫を飼つてこれを驅除すること、丁度鼠を捕へしむるが如くであるといふ。

日本への猫の渡來　印度から支那に傳へられ、それが朝鮮を經て日本に渡來したといふことになる、日本に渡來したのは、人皇六十六代一條天皇の御宇高麗から數多の佛典や佛像佛具を貢ぎとして献上した時、一番の猫が、これと一緒に渡來した、いふまでもなく、鼠の爲めに嚙み損ぜられるのを防ぐ爲めで、いはゞ佛典佛具等の守護の役目を負うて來たのである。

猫の名は『こま』　この猫、長保元年九月十九日に仔を産んだ、天皇、左右兩大臣にその養育を命じ給ひ、兩大臣は更に馬の命婦をして、これを養はしめた、そして、その名を『こま』と名命けた、高麗の意味である。このことを『小右記』には

長保元年九月十九日、内裡御猫産子、女院左大臣有二産養事一、有衝重椀飯納納筥之衣等、猫乳母馬命婦、時人咲之奇怪事也。

とあり、また、『枕草子』には

うへにさぶらふ御んねこは、かうぶり給はりて命婦のおとゞとて、いとをかしかりければ、かしづかせ給ふが、はしに出でたるを、めのとむまの命婦、あなこまやいり給へとよぶ

この『こま』を翁丸といふ犬が追つて、勘氣を蒙り、島流しになる、それは清少納言の麗筆により詳しく描き

出されてゐる、犬の條を參照せられたい。

◇

猫の種類　猫には多くの種類があり、色で別けてゐる人もあれば、毛の長短で別ける方法もある、産地に依つて區別してゐるのもある、毛色からいへば、黑猫、虎猫、斑猫、三毛猫、白猫で、この中で、虎猫と三毛猫が多い、毛の長短による時は、波斯猫、アンゴラ猫は長毛に屬し、日本の猫は、白色のものでも、虎猫でも斑猫でも皆短毛種である。

同じ長毛種でも、この波斯猫の中には、露西亞長毛種があり、更に佛蘭西長毛種も含まれる、人に依るとアンゴラ猫も波斯中のものといふ、何れも毛が長く房々とし、尾も長く、非常に愛らしい、波斯猫の中にも、白色があり黑色があり、黄金色のものもある、この黄金色のものは、波斯猫の中でも最も美しいもので絲色の眼と共によい調和を保つてゐる、アンゴラは、波斯に比べて頭の圓味がなく、耳の裏まで長い毛が生えてゐる。

短毛種の方では、現に日本種の平太郎と呼ばれてゐる種類など、やゝ代表的のものであるが、朝鮮種、支那種、暹羅種、印度種いろいろあり、歐洲に於ても英國種といへば直ちに短毛種を指していふことになつてゐる、此の短毛と長毛との優劣は、長毛の方は非常に美しいが、唯それ丈けで、羽毛の美しい鳥を眺めるやうなものであるが、短毛の方は、愛翫用のみならず、鼠を捕へるといふ技は此の種に限られてゐるので、若

し人の生活を基準としてその優劣を論ずる時は、短毛種の方が遙かに貴いものといはねばならない。

その短毛種の中でも　暹羅猫は最も人に馴れ易く、毛色も特色があり、頭に二三ヶ所黑色部のある處など非常に愛嬌を添へてゐる。

長太郎と彦次郎　日本の猫には、所謂胴丸といふ平太郎と、胴長といふ彦太郎とがある、平太郎といふ方は尾が短かく僅かに三寸位しかない、それに反して彦次郎の方は七寸五分ほどある、毛色は純白といふものは少く、純黑も亦割合に少く、斑か、虎毛か、三毛が多いのである。

眼の色は黃金色を普通とし、白猫に限つて碧眼である、時に一頭で、黃金色の眼と碧眼と兩方のものがある、世に金眼銀眼というて非常に珍重してゐる。

◇

猫の姿やその習性　猫の形態やその習性には、いろ〳〵の特長がある、第一に顏が極めて圓く愛らしく、顎は短かく逞しく、咬筋が非常に發達してゐる、犬のやうに臭覺は餘り鋭くはないが、耳は大きく自由に動いて、物を聞く力が極めて鋭い、それから口の傍には針のやうな髭が生えてゐる、この髭は猫に取つては重要な武器の一つで、その尖端は極く敏感であるから、夜その獲物たる鼠を捕へる時など、その尖端で床や閾を觸れて鼠の所在など直ちに覺つてしまふ、舌には針のやうな突起が無數にあつて山葵卸しのやうになつてゐる、猫は此の舌を以て、骨に着いた肉など剩す處なく舐り取つてしまふ、背は俗に猫背といふやうに圓くなり、一種の彈力をつ持てゐる、時にその四肢を眞直に伸し、背を高く伸して面白い形をすることがある。

足の鉤爪も重要なる武器である、前肢は五指、後肢は四指で、爪は平常は匿してゐるが時々これを現はして木の幹などで磨いてゐる、矢張夜に及んで獲物を捕へる時の準備である、爪を匿す時は、指先にある一種の鞘の中に入つてゐるのである。

蹠には、胼胝のやうになつてゐる皮膚の突起がある、これで極めて靜かに歩くので、猫の歩く時には決して音響がない、これは自然に鼠などに近づくことの出來るやうに、神の賦與したものである。

それから猫の齒が、かうして肉食獸類の中でも極めて整々されてゐること、その牙の鋭利なることは何人も知る處であらう。

猫の目の變化　次に猫の特長の一つで眼である、元來猫は夜間に鼠等を捕へる習性から、闇い中でもこれを見ることの出來るやう、非常に視力が強くなつてゐる、だから、晝間の日光の光線の強い時は、その瞳光を少さくする必要がある、これはよく昔から知られてゐる事柄である、併し、眞に黑白を辨ずることの出來ぬ夜中に、果して普通の如く眼力を利かすことが出來るかどうかは疑問である、少くとも他の動物よりは眼力が強いには違ひない。

これに就いては昔からいろ〳〵にいはれてゐる、古書に曰く

猫　晴辨十二時、子爲時光、故猫食鼠。

と、それから『鹽尻』には、

猫目知時　卯、辰戌、寅申、子、酉、丑未、巳亥、午、猫晴黑如圖

と記して黑圓を描き、『右瑯琊代醉に出、亦酉陽雜俎』曰、猫目晴暮は圓にて午には緊斂して線のごとし、鼻端常に冷也、只夏至一日暖也其毛蚤虱を不容』とあり、『三養雜記』には

子半線、卯酉圓、寅申巳亥銀杏、辰戌丑未側如錢

とあり、古歌には又、

六つ圓く、五七卯に四つ八つは柿のたねなり九つは針

顏洗ひと天氣　時とすると猫は、その足を丁寧に舐めて、耳や鼻を幾度となく洗ふことがある、西洋ではこれを雪降りか、嵐の前兆だというてゐる、東洋では

俗言猫洗面過耳則客至。

と『酉陽雜俎』の說が行はれてゐる。

猫は、春秋に交尾し年二回仔を產む、凡そ五匹內外を生み、受胎から分娩まで八週間、そしてその仔は一年にして成熟する、交尾期に牡が牝を追ふ熱烈さは非常なもので、これが猫の戀として、俳句の季題に入つてゐる。

猫の戀やむ時岡のおぼろ月　芭蕉

柊ふむ夜半もあるべし猫の戀　蓼太

足跡を妻戀ふ猫や雪の中　其角

猫の戀接木折らして別れけり　也有

兩方に髭のありけり猫の戀　來山

この飄逸なる『猫の戀』を描いたものに、荒井寬方氏の作がある。

猫の壽命　なほ猫の壽命は、長命の方で十八年といふ、併し中には、それ以上のものもある、そして餘り長命のものには不思議に怪異な物語の傳つてゐるのがある。

◇

猫は、家畜の中でも比較的新しく渡來してゐるので、あまり古い文學などには現はれてゐない。流石に『萬葉集』にも猫の顏は見當らないわけである。

『源氏物語』の猫　猫の現はれて來るのは、藤原時代からである、その中でも、『源氏物語』には、『若菜』の上の右御門督が三宮を懸想し奉る段に

御几帳どもしどけなくひきやりつる、人はちかくよつきてぞ見ゆる、からねこのいとちいさく、をかしげなるを、すこしおほきなるねこ、おひつゞきて、にはかにみすのつまよりはしりいづるに、人々おびえさわぎて、よくよくと見しろきさまよふけはひども、きぬのおとなひみみかしかましき心ちす、ねこ

はまたよく人にもなつかぬにや、つないとながくつきたりけるを、物にひきかけまつはれにけるを、にげんとひこしろふはどに、みすのそばいとあらはにひきあげられたるを、とみにひきなほす人もなし

とあり、又、その下に

うちの御猫のあまたひきつれたりける、はらからどもの所々にあかれて、此宮にもまゐれるが、いとをかしげにて、ありくを見るに、まづ思ひ出でらるれば、六條ノ院のひめ宮の御かたに侍るねこぞ、いと見えぬやうなるかほして、をかしう侍りしが、はつかになん見給ひし、とけいし給へば、ねこわざとらうたくせさせ給ふ御心にて、くはしくとはせ給ふ、からねこのこゝのにたがへるさましてなん侍りし。

と記されてゐるなど、如何にも觀察が細かい。

猫の歌　短歌には、『夫木抄』に三首收めてゐるなど珍らしい位である。

よそにだによとともしらぬ野ら猫のなくねは誰に契りをきけむ　寂蓮法師

まくず原したはひありく野ら猫のなつけかたきは妹がこゝろか　源仲正

しきしまの大和にはあらぬ唐猫の君がためにぞもとめ出でたる　花山院御製

新しい方で石川啄木によい歌がある

猫飼はゞその猫がまた爭ひの種となるらむかなしきわが家

と、一寸歌には纏めにくい境地を歌つてゐる、與謝野寛氏には

野ら猫の尾を吊るし持ちまふたつに斬れこそ心しづまりにけれ

といふのがある、『南禪斬猫』の故事が思ひ出される。

俳句の猫　俳句には、前に擧げたやうな猫の戀の外に

猫の子が巾着なぶる涼み哉　去來

猫の目のまだ午時過ぬ春日哉　鬼貫

葉がくれの盗人猫や葡萄棚　太祇

猫の子にかくれて居るや蝸牛　才丸

猫の子やいづく筏の水馴掉　言水

など、それ〴〵に情趣がある。詩句を拾つて見ると

花陰閑臥小於蒐、堂上氈毯錦繡舖　柳貫

古人養客乏車魚、今汝何功客不如　飯有

溪鱗眠有毬、忍教鼠齧案頭書　劉克莊

ボートレールの猫の詩　西洋では猫を好む人は甚だ多い、武人であつたナポレオン一世は、猫が大嫌ひで、その寢臺の下の猫にも驚いたといふが、詩人のボートレールは、有名な猫好きで、その作中にも『猫の詩』がある。

猫

三〇

—鈴木信太郎氏譯—

來れわが麗はしき猫、わが戀の炎ゆる心に、
　汝が趾の爪をかくして、
金銀と瑪瑙の混れる、まぐはしき眼の中に
　わが體、投け入れしめよ。

しなやかの圓き背と、頭とをゆくら〳〵に
　わが指の搔撫づるとき。
あるは又、稻妻はらむ肉體を、我手の觸れて
　よろこびに醉ひ痴れるとき。

吾妹子を、心の中にわれは見る、その眼相は
　汝のごと、めぐき動物
奥深く冷やかにして、投槍と切り劈きて。

　頭より足のさきまで
鋭ぎ氣、奇し、危き身の香、栗皮色の
　その肉の四方にたゆたふ。

それからボーには『黑猫』がある、ボーはその日の生活に困る位、貧のどん底にあつてもなほその妻と共に、一匹の虎猫を愛してゐた、ユーゴーも、ゾラも、それからピエルロチも猫好きとして有名であり、アナトール・フランスは姿が猫に似てゐるとて有名であつた。

◇

猫の怪異　猫には昔からいろ〳〵と異變や怪談が傳へられてゐる、『和漢三才圖會』にも

凡十有餘年老牡猫有二妖爲災者一、相傳純黃赤毛者多作妖、惟於暗室以手逆撫二背毛一則放光、或舐油者、是當爲怪表也

というてゐる。

『古今著聞集』の第二十卷に載せられてある

保延のころ、宰相中將なりける人の乳母、猫をかひけり、その猫たかさ一尺、力の強くて綱をきりければ、つなぐこともなくて放ちかひけり、十歳にあまりける時、夜に入りて見ければ、せなかに光あり、

かの乳母常にこの猫にむかひて、『汝しなむ時、我に見ゆべからず』と敎へけるはいかなるゆゑにか、おぼつかなき事なり、十七になりける年、ゆくかたをしらずうせにけりとぞ。

といふ話の如きも猫の怪異の一つであらう、これを更に誇大にして、一の騷動としたのが世に傳へられてゐる、猫騷動で、有馬の猫騷動と、鍋島の猫騷動が代表的のものとなり、『嵯峨奥妖猫奇談』といふのが鍋島の方で、『有松染相撲浴衣』といふのが有馬の方である、何れも猫がその愛せらてゐた主人の死からその敵方の祟をすることになつてゐる、近ごろは餘り大歌舞伎でも上場されないが、昔は猫のケレンなどで中々に受けたものである。

猫の怪異ではないが、猫に關するユーモアに富んだ物語の中には、『今昔物語』の中に、『猫恐の大夫』といふのがある。

猫嫌ひの清廉　大藏の亟となつて山城大和伊賀三國に多くの莊園を有する藤原の清廉、平常猫が非常に嫌ひで猫さへ見れば顏の色をかへてしまふので、人呼んで『猫恐の大夫』と呼んだ、此の男性來の横着者で、多くの莊園を有ちながら、一向年貢を納めない、大和の守である藤原の輔公が何とかして怠つてゐる年調を納めさせやうと、自分の邸に呼び寄せ、いろ〳〵に說くが、言を左右にして聞かぬので、一間の中を立て切り、大きな猫を五頭ほどつれて來てその室に放つと、清廉生きた心地もなく遂に輔公のいふ通りに年貢を納めるといふ證書を書く、その模樣が面白く描かれてゐる。

珍妙な猫の五德　面白い話といへば、『揮塵新譚』といふ書に出てゐる『猫の五德』といふのも振つてゐる、萬壽寺に彬師といふものがあつて、よく諧謔人を笑はせてゐた、客が來て對座してゐると猫が來てその傍に蹲る、彬師その客に語つて此の猫に五德があるといふ、客がこれを聞くと、曰く、鼠を見てこれを捕へぬのは仁である、鼠がその食を奪つても之を讓るは義である、客が來て宴席を設ければ直ぐに出て來るのは禮である、物をよく始末しても盜んでこれを食ふは智である、冬になると籠に入る、これ信であると、客はこれを聞いて絕倒した。

◇

美術の方面の猫を見ると、唯、猫そのもの丈けを描かれる場合と、これに植物や他の動物—鳥蟲などを點出される場合とがある、植物では、萱草、桃、枇杷、竹、黃蜀葵、牡丹、芍藥などがある。

崋山の傑作睡猫驚雀圖　猫を畫いた傑作としては、先づ菊池惺堂氏所藏、崋山の『睡猫驚雀』を第一に擧げねばならぬ、これは崋山の代表的傑作の一つで、猫も雀も眞に迫るものがあり、大震災の時、惺堂氏は此の幅と同じ崋山の『千公高門』と外一點を携へたまゝ身を以て火中を脫出したので、幸に烏有に歸するを免れたのである。京都妙心寺の杉戸に、牡丹に猫がある、筆者は不明であるが、昔から聞えてゐる、椿山には、親猫が仔猫に授乳して居る面白い構圖のものがある、故波多野古溪氏の舊藏で、椿山自ら

皮毛斑駁爪牙堅、食有鮮鱗臥有毯、海客徒能知黑暗、舟人自愛畜烏圓、磨箏製帶非同品、捕鼠啣蟬是獨

權、却笑老貍誇王面、意遭鼎鑊得盤旋。

といふ瞿存齋の詩を題してゐる。

海北友松の猫圖　井上辰九郎博士の所藏に海北友松の猫がある、これは中々に變つた手法で、猫の作としては珍らしく、雪村には竹に小禽と猫を配したものがあり、宗丹には、枇杷と猫の面白い作がある、徹山の作には桃花に猫を配して平和な畫面を作つたものがあり、宗達には眠り猫のよいのがある、德川伯爵家の宗栗の『芍藥睡猫』も、睡猫の作では、逸することが出來ない。佐竹侯爵舊藏默庵の猫も傑作である。

近代作家の猫の畫　近代の作及び現代の人では、菱田春草の『黑き猫』は文展に於て聲名を博した作、雅邦にも『竹に猫』のよい作がある(東京博物館藏)、猫に萱草を添へた作は、小林古徑氏や荒木十畝氏にある、十畝氏はなほ、紫苑に小猫を配した『黃昏』が、帝展初期の傑作として名高い、結城素明氏には、虎猫を描いた變つた作があり、栖鳳氏は足を伸し身を逆にして之を舐つてゐる變つた構圖のものがある。

支那では許廸、錢舜擧、沈南蘋等に猫の作が屢々見られ、西洋では、古くクレタ島のハーギアトリアダの壁畫の野猫がよく例に引かれ、スタンランのやうな猫を最も得意とする作家もゐる。彫刻では、左甚五郎の作といふ日光陽明門の『眠り猫』が、作の佳否は兎に角非常に有名である。

南泉斬猫　猫に關する畫題の一に、『南泉斬猫』がある、南泉禪師は晉顧といふ、唐代の禪僧である、その『南泉猫を斬る』といふのは、『狗子佛性』と共に有名な禪家の公案で、『碧巖集』にも『無門關』にも『從容錄』にも共に之が載せられてゐる、その內容は、南泉一日東西の堂に、猫を間にして相爭ふものあるを見、直ちに一つ入てその猫を捉へ、片手に刀を持つて問ふ、『大衆道を得れば卽ち救はる、道を得ざれば卽ち斬却す』と、一人も答へるものはない、猫は遂に斬られてしまつた、所へ趙州和尙がやつて來た、南泉猫のことを以て趙州に問ふ、趙州履を脫ぎ、これを頭上に安んじて出づ、前に趙州和尙あらば、猫は斬られずに救はれたものをと、之を描いたもの、近頃には富田溪仙氏の作がある。

◇

麝香猫の作　支那の古畫には、よく麝香猫が畫いてある、その代表的のものとしては、紀州德川侯爵家舊藏の徽宗皇帝の作がある、橫物で數疋の麝香猫を畫いてゐる、徽宗皇帝の作といふもの亦水戸家にもあつた。

益田孝氏所藏、毛益の麝香猫は、遠州藏帳にも載せられてゐる傑作で、斯道に有名なものである、麝香猫が、かく多く繪に畫かれたのはこの猫、麝香の如き香氣を放ち、靈猫として尊崇されてゐたからであらう。

『本草綱目』に曰く、

靈猫生南海山谷、狀如貍、自爲牝牡、其陰如麝、切亦相似、異物志云、靈猫一體、若雜麝香中、窣能分用之亦如麝香。

と、印度方面の熱帶產の肉食猫であるから、南海山谷に生ずとあるのも當つて居るし、此貍の如しといふの

も、やゝ眞に近い、その寫生的技巧で眞に迫つてゐるのは、徽宗皇帝の筆である。普通の猫とは全く違つた味のもので、何處にか一種森嚴な態を備へてゐるものである。

馬（うま）

馬の原始的時代　馬が野生から家畜になつたのは、恐らく古石器時代で、人間が征服した最後のものであらうといはれてゐる、その原種に就いては、アラビヤ馬の先祖であるジヴアリック種と、タルパンと稱へられる蒙古の野生馬とであるといはれ今日まで生殘つてゐる、その永い間の歴史や、種類の分類等は、馬學として浩瀚なる一冊を爲すべきほどのものがあり、これを記すのはまた本書の役目ではない。

家畜となる　併し、馬が古石器時代に初めて家畜とせられたといふことを證據立てたのは、佛蘭西のソリユートル洞窟あたりで發見された、轡をつけた馬の首の彫刻であつた、果然、藝術と第一歩の關係が結ばれて來る、この時代の人々は、如何なる目的で馬を飼つたか、初めは肉を食とし、乳を飲料とする爲めであつた、それがやがて、重荷を負はせる駄馬とせられ、車が發明されてこれを曳き、農業が開けて耕作に用ゐられるやうになつた、併し古代の埃及人やギリシヤ人、アツシリヤ人は、何れも戰爭に馬を使用したやうである、それは今もソデイネ、アブに殘る『ラムセス三世狩獵』の壁浮彫や、バビロン城イシュタル門の壁面馬の浮彫、アツシリヤ藝術の代表的のものとして大英博物館に藏せられてゐるアツシュルナジルパ王に關する浮彫などが將にこれを證してゐる、然もこれらの古代藝術がよく馬の眞を摑み、正確なるデツサンに依つて、個々躍動してゐる價値は驚くべきものがある。

希臘藝術と馬　殊に驚くべきは、希臘藝術に現はれたる馬の寫生的手腕と、その表現の巧みさである、アムフオーラなどに畫かれた馬の如き、如何にも立派なものである、竹内栖鳳氏の所藏のアムフオーラは、その圖の優れてゐるので有名であるが、實際素晴しい線の藝術である、アクロポリス發掘の彫刻にも優れた馬がある、これらの名作が、總て西暦紀元前千年乃至五六百年の昔に生れたのであるから、全く驚嘆に値する。

印度藝術と馬　印度に於ても、カルカツタ博物館に所藏されてゐるロリヤーンタンガー地方の彫刻に、釋迦出城の如き名作があつて、その名馬犍陟の姿勢など誠に面白く表現されてゐる、これは犍陀羅佛教藝術の中でも代表的のものとせられてゐる、また印度藝術に極く近い爪哇のボロブドール寺院には有名な釋迦本生の彫刻があるが、その中には寶車に御して城門を出で、三苦を見る圖の如き、愛らしい馬が特色のある技巧を以て表現されてゐる。

◇

『昭陵の六駿』　支那藝術に於ける馬を見ると、餘りに範圍が廣いので、到底その外廓だに記すこと困難で

あるが、彫刻にも繪畫にも流石に優れたものが殘されてある、その中で、最も有名であり、馬に關する藝術の上に於て第一位に置かるべきは、今の陝西省醴宗縣にある『昭陵の六駿』であらう、關野博士が解說に據ると

唐の太宗、不世出の英資を以て建國の大業を完うするや、生前壽陵を九嵕山頂に營み、諸王公主及諸功臣の墓を山上山下に列し明良際會の範を萬世に遺した外、幾多の戰場に艱苦を共にせし愛馬六頭の像を石に刻し之を昭陵寢殿前の東西廡壁間に列し、自から贊を作り歐陽詢をして之を書かしめた、之が俗にいふ所の昭陵の六駿である。

と、その第一が太宗の愛馬で洛陽を平げた時騎乘した颯露紫といふ、太宗苦戰し、馬亦危かつた時其臣師行恭が己が馬を進めて太宗を助けた、そこで太宗がその功を彰はす爲めに、師行恭が馬の胸に立つ箭を拔かうとしてゐる所である、その六駿といふのは、青騅、什代赤、特勒驃、颯露紫、拳毛駒、白蹄烏である、陝西といふから、隨分奥地で、關野博士は困難と戰ひながらこれを撮影して歸朝されたのであるが近頃外國に持ち去られたものがあり、一は米國費府博物館に、一は獨逸に、そして殘るものは三駿であるといふ。唐の太宗の貞觀十年十一月勅に依つて刻したといふのであるから、我が舒明天皇の御宇である。

これより前に遡つて前漢時代には、西域との交通が漸く繁く、所謂大宛の馬などが輸入されたので　動物はいろ〳〵の形式で藝術に表現されてゐる、その頃西域地方を遊牧してゐたスキチヤ民族などの藝術には殊

にその特長がよく認められる。

武氏祠石刻畫の馬　漢時代の藝術は、所謂享堂藝術で、享堂とは、石材で一間四方位、高さが二間から二間半位、その周圍に極く細かい彫刻を施したもので、その代表的のものといはれる、武氏祠の石刻畫は、馬の姿勢が極めて優れてゐるので、古來、馬の藝術といへば直ぐにこれが現はれて來る。山東省嘉祥縣の所在である。

繪畫の馬　繪畫に馬が現はれたのは、此の武氏祠の石闕が竣工してから二百年の後で、史道碩に依り『八駿圖』が畫かれたとある、併し此の『八駿圖』といふものは、張彥遠の『歷代名畫記』にその名が傳へられてゐるだけで、作品は全く傳はつて居ない、だが、筆者の史道碩にはなほ、『三馬圖』などがあつたといふ。

それから、馬の名手としては顧愷之、陸探微、董伯仁、展子虔が擧げられてゐる、併しこれらの諸家の馬の名作といふものも、今では殆んど見られなくなつてゐるが唯、董伯仁に『文章上廐名馬圖』があり、展子虔に『長安車馬人物畫』の作があるといふ、隨にはなほ胡瓌馬を能くしたと傳へられ、唐に入つては韓幹大に馬を畫くに妙を得、玄宗皇帝をして感嘆之を久しうせしめたといふ。

李龍眠が『五馬圖』　宋からは、先づ李公麟、卽ち李龍眠を第一に擧げねばならない、李龍眠は『君臺觀左右帳記』に據ると、『羅漢人形墨繪』と記されてゐるが、その『五馬圖』こそは實に馬の畫中の傑作で、優雅にして然も勇勁なる筆を以てよく馬の眞を捉へてゐる、その第三圖には乾隆帝の御題がある、馬は于闐から驥

院に上つたのを、一々李が寫したもの、その技神に入つてよく馬の眞髓を寫した、其の第一は元祐元年四月進到の錦膊驄、八歳四尺六寸、第二は于闐國から進到の鳳頭驄、八歳五尺八寸、第三は同二年十二月、左天駟盛揀中奏、馬好頭赤、九歳四尺六寸、乾隆帝の七言の詩のあるのは此の圖であり、甲辰新正之月御題と題がある、第四は同三年閏月溫溪心の進めたる昭夜白、第五は、以上の四馬に比べると、著しく馬の姿も異なり、筆もグッと弱くなつてゐる、或は支那の馬であらうといはれてゐる。

第三の乾隆帝の賛は

龍眠手寫五馬圖、一一驥院之英駿、來自于闐或董氈、事擬天馬登歌韻、卽今哈薩及布魯、歳市爲常無論萬、愛烏罕更遠於波、馬高七尺有八寸、五馬之高不足稱、于思牽來敬以進、育之天閑聊備員、未如上駟調習順、然今老矣逾古希、那以昔年馨控迅、展圖自愧且自憐、石火光陰速誠信。

で、公麟以て榮と爲すべきである、これを見れば誠にその技、佛畫で吳道子と比肩し、馬を畫て韓幹に優るといはれたのも當然である。

馬の名手趙子昂父子任月山　元になつてからは、趙子昂、その子趙仲穆何れも馬が巧みであつた、任月山亦よく馬を畫いた子昂は松雪道人とも號した、我國に傳はるもの、佐竹侯爵家舊藏に『馬人物』がある、馬が倒れて腹を上にした皮肉な姿態を畫き、これに皐亭、畸庵、太白居士等八人の賛がある、馬を見てゐる二人物も品位ありて中々の名作である、太白居士の賛は左の通り、

疋馬牽來老入神、霜蹄蹴踏蔽飛塵
倏然直欲乘天去、先向龍門幾轉身。

松方公爵舊藏には横物の『駿馬圖』がある、中々の大作で、貴人駿馬に御し、從者何れも騎馬で從ひ、一人は流に馬を洗つてゐる、探幽の寫も添へてあり極めて努力の作である。昭和三年上野に開かれた、唐宋元明名畫展に朱益藩氏が出品した『王濟觀馬圖』も此の馬がよく描けてゐた。同展には蔡實菴氏出品の、仲穆の筆『百馬圖卷』もあつた、いろ〳〵の毛色の馬のさま〴〵な形を寫したる密畫である。

任月山も馬をよく畫いた、本邦に傳ふもの岡崎正也氏の『名馬圖卷』の長卷がある、その筆の精緻なる、人物や馬の謹嚴なる姿態、一見して襟を正さしむるものがある、唐宋元明展には、羅振玉氏出品の『五馬圖卷』が出陳されたが、これは岡崎氏所藏とは同一傾向の極めて美しい細密畫であつた。

朗世寧と馬　更に新しく清の時代になる、こゝに特殊の地位を保つてゐる朗世寧の『百馬圖卷』の如き作品がある、克明精緻なる技法を以て百馬の態を寫してゐる、その代表作は、前清朝內府御襲藏の『百駿圖』で、背景には歐洲の畫風を取入れた獨特の筆法を見せ、これに牧馬と人物を配してゐる、筆の精緻周到はあるが、純粹の東洋畫に見るやうな幽雅な風はない、朗世寧の作品はなほ、『唐宋元明名畫展』の時にも金開藩氏出品の『春郊閲駿馬』卷があつた。

朗世寧は伊太利の人でヨセフカスチリオネが舊名であつた、清の初め支那に來り遂に歸化してしまつた、

馬は彼の最も得意とする處、曾て乾隆帝に一名馬を献ずるものあり、帝これに如意駿の名を與へ、これを朗世寧に描かしめ、その畫の成るや直ちに筆を取つて、御題を加へられたといふ、世寧が帝の寵を蒙つたことがわかる、乾隆三十三年、七十一歳を以て歿した、清内府に藏する『百駿圖』は、彼が三十歳の時の作である。

◇

日本に於ける馬の藝術と歴史　日本に於ては、『日本書紀』の神代紀に、素盞嗚命が、天の斑駒を放ちて田の中に伏せしめ、又、天照大神が神衣を織り給ふ齊服殿に、甍を穿ち天の斑駒を剝にして投げ入れ給ふなどゝあるので、馬は太古より日本に存在してゐたといふ説を爲す學者がある、それはまた曾て尾張の熱田の貝塚から、馬の骨が出たり、鹿兒島出水の貝塚から馬の齒が出たりしたので石器時代既に馬が家畜として、飼はれてゐたといふのである、なほ美作國英田郡平福村から發掘した、三千年前の陶棺には正面に人馬の浮彫があり、人は女で背景には山があり前景には野花咲き、これに馬が現はしてある、極めて長閑な景象を見せてゐる、これも馬の存在を語る一つの例になつてゐたのである。

馬の渡來　併し石器時代既に馬が存在してゐたにせよ、それは矢張海一重隔てゝゐた朝鮮あたりから伴ひ來つたるものであらうといふ説が、今では重きをなしてゐる、なほ明かに馬が輸入されたことの記錄としては、『大日本史』の

應神天皇十五年甲辰秋八月六日丁卯百濟王阿花、阿直伎をして良馬二頭を貢せしむ

の所載である、その後、馬は日本に於てだん〳〵その數を增して行つたが、それには二つの系統があると見られ、一を九州系、一を南部系とせられてゐる。

天武四年の四月には、馬を食することを禁ずるの令が出てゐる、それまでは馬を屠殺することも行はれてゐたと見える、更に十三年二月には軍馬を使用する詔があり、元正天皇の養老二年三月には詔により、馬を畜ふの制が定められ、親王大臣二十疋、諸王諸臣三位以上十二疋、四位六疋、五位四疋、六位以下庶人に至る三疋以上を過るを得ずとあり、聖武天皇の御宇には馬の屠殺が禁ぜられ、桓武天皇の延曆十五年十月には貢馬の年齒が定められ、嵯峨天皇の弘仁元年五月には猥りに牧馬に乘ることが禁ぜられた、日本に於ける馬政史の始めである。

武家と馬と　かうして馬は人の生活の上に、非常に重要なものとなり、武家にあつては、軍事の場合にこれを用ゐる爲め、馬術といふものが盛に行はれるし、民間にあつては、交通を助け、貨物を運び、耕作に使役するなど、いろ〳〵の方面に活動することになつたので、自然そこに品種のよいのが尊重されることになり、初めて種族の改良といふことが生れ、その毛色や形に對しても、だん〳〵深く研究されて來たのである。

馬の名稱　その名稱に就いても、古書の載するところ種々あるが、毛色は大體左の三十六種に區別されて

ある。

赤　毛　全身赤色なるもの
赤黒おほひ　赤毛に黒のおほひ髪あるもの
黒　毛　全身黒色なるもの
栗　毛　全身紫色を帶ぶ
白栗　毛　紫色の少しく白味を帶ぶ
黒栗　毛　紫色にて少しく黒色
赤栗　毛　紫色に赤の混じたるもの
駮（ふち）　毛　純白ならず斑點あり
青　駮（ふち）　青色に斑點あり
黒　駮　黒色に斑點あり
褐　駮　褐色に斑點あり
青　黒　青と黒と混るもの
糟　毛　灰色に白きさし毛
鹿　毛　赤色に黒の鬣あるもの

黒鹿　毛　鹿毛の少しく黒きもの
白鹿　毛　鹿毛に少しく白毛あり
腹白鹿　毛　鹿毛にて腹白きもの
葦　毛　青色と白色混りたるもの
連錢葦　毛　青黒色にて魚鱗の如き斑あるもの
黒葦　毛　淺黒色にて白毛の斑を雜ふ
尾花葦　毛　葦毛のさし毛なるもの
河原　毛　薄淺黄色卽ち水色
黒河原　毛　河原毛の少しく黒きもの
雲雀　毛　赭色に白色の混じたるもの
赤雲雀　毛　雲雀毛の赤を帶ぶるもの
口黒鹿毛雲雀　黄色にして啄の黒色
笏（さく）額（まき）雲雀　毛　雲雀色にて額に笏の如き毛あり
月　毛　全身白色なるもの
月額（一名額白）　額の白色なるもの

斑　月　毛　月毛にて斑點なるもの
尾　白　毛　尾のみ白し
足　駁（ふち）　足に駁あるもの
皆　毛　膝以下白色
鼠　毛　鼠色の毛を有するもの
二　毛　一說に鼠毛なり、鼠毛は猿毛に似たれば、鼠毛をも又二毛ともいふ、又一說に駁毛は二毛の毛なれば名づくといふ。

今日では、先づ單毛と複毛と分ち、鹿毛、栗毛、青毛、月毛、黑毛、赤毛が單毛に屬し葦毛、糟毛、鼠毛、鹿毛、雲雀毛が複毛である。

馬の各部には、それ〴〵六つかしい名稱があるが、專門の書に讓るとし、その丈は四尺を定尺とし、其上一寸餘を一寸（き）、二寸餘を二寸（き）といふ、以下之（これ）に準じ四寸より七寸までを、ヨキ、イツキ、ムキ、ナヽキと呼び、九寸に餘るを長（たけ）に剩（あま）るといひ、四尺に足らぬを駒とし、三尺九寸を『かへり一寸』といひ、これを計るには馬の肩の通りに尺を立て横木をあてゝ計るのである。

◇

白馬の節會　年中行事としては、今は廢れたが、昔は白馬の節會があつた、正月七日天皇、馬寮の白馬を

引くを覽給ふ儀式である、馬は陽の獸で青は春の色である、そこで正月七日に青馬を見れば年中の邪氣を拂ふといふのである、白馬と書いて『あをうま』と訓ませるのは、正月匆々白といふ字を忌んでのことであらう、此の儀式の何時ごろより行はれたかは詳かでないが、天平二年正月にはこのこと行はれた由見えるから、聖武天皇の御宇には既に行はれてゐたわけである、清々しい皇居の前に馬寮頭が白馬を曳く處は好個の畫題なので、古來土佐派の畫人のよく畫く處、彫刻家山崎朝雲氏も畏き邊りの命を拜して、これを作り、宮中に納めたことがある。

六月と十二月の大祓には、朱雀門前に馬六頭を立てゝ諸々の罪と穢を祓ひ淨めた、また五月五日には、宮中の武德殿前に於て、左右近衞の武士などが騎射競馬が行はれ、武家方には、流鏑馬、犬追物、笠懸などゝいふ馬術の精鋭を競ふさま〴〵の武術が行はれたのである。

正月の春駒　民間では正月に春駒が躍り込む、これも今はないが、優美な春駒の形はよく繪畫には遺されてゐる。かうしたことから馬に因む玩具など諸國に作られ、その工夫の面白い三春駒などは今日もそのまゝ傳へられて、子供よりは好事の人々を喜ばせてゐる。

神社の繪馬　神社には、神馬が居る、願の屆いた御禮には、繪馬を献げる、これも生ける馬に代へる意味で、面白い民族藝術の一つである。

祭事にも競べ馬が興を添へるものがある、加茂の競べ馬はそのよい例で、勇壯なるが中にも優美な處があ

つて、亦好個の畫題であり、土佐派の人々よくこれを描く、故高橋廣湖の出世作もこれであつた。

◇

馬と傳說　かくして馬に關する話題は、だん〳〵に擴大されてゆく、『古今著聞集』の如き、その項目の中に、特に馬藝の一項を置き、馬術に關する種々の物語を採錄してゐるが、その中の平太經家の條には心ひかるゝものがある。

武藏國住人つゞきの平太經家は、高名の馬乘馬飼なりけり、平家の郎等なりければ、鎌倉右大將めしとりて景時に預けられにけり、その時陸奥より大にして猛き惡馬を、奉りたりけるを、いかにも乘るものなかりけり、聞えある馬乘どもに面白にのせられけれども、一人もたまるものなかりけり、幕下思ひわづらはれて『さるにても、この馬に乘るものなくて止まぬ事、口惜しきことなり、いかゞすべき』と景時にいひあはせたまひければ、『東八箇國に、今は心にくき者候はず但囚人經家ぞ候ふ』と申しければ、『さらば召せ』とて則ち召し出されぬ、白き水干に葛の袴なぞ着けたりける、幕下『かゝる惡馬あり、仕りてむや』とのぞまはせければ、經家かしこまりて『馬は必ず人に乘らるべき器にて候へば、いかにたけきも人に隨はぬことや候べき』と申しければ、『さらば仕うまつれ』とて、即ち馬を引き出されぬ、誠に大にたかくして、あたりを拂ひてはね廻りけり、經家水干の袖くゝりて、袴のそばたかくはさみて烏帽子かけして庭におり立ちたるけしき、先づゆゝしくぞ見えける、かねて存知したりけるにや、轡をはげて、さし繩とらせたりけるを、少しもことゝもせずはねはしりけるを、さし繩にすがりて、たぐりよりて乘てけり、やがてまはりあがりて出でけるを、少しはしらせて、うち止めてのど〳〵と歩ませて、幕下の前にむけてたてたりけり、見るもの目を驚かさずといふことなし、よくのらせて『今はさやうにてこそあらめ』とのたまはせける時、おりぬ、大に感じ給ひて勘當ゆるされて、厩の別當になされにけり、彼の經家が馬飼ひけるは、夜半ばかりにおきて何かあるらむ白き物を一かはらけばかり、手づから持ち來りて必ず飼ひけり、すべて夜々ばかり物をくはせて、夜明くればはだけ髮をゆはせて、馬の前には草一把も置かず、さは〳〵とはかせてぞありける、幕下、富士川あひざはの狩に出でられける時は、經家は馬七八疋に鞍置きて、手繩むすびて人もつけず、うち放して侍りければ、經家が馬の尻に隨ひて行きけり、さて狩場にて、馬のつかれたる折には、召に隨ひてぞ參らせける、かやうに傳へたるものなし、經家いふかひなく人海して死にければ、知るものなしくちをしきことなり。

金岡の馬の繪　同じ書に、例の有名な巨勢金岡筆の馬の物語がある、序に引く

仁和寺御室といふは、寬平法皇の御在所なり、その御所に金岡筆をふるひて、繪畫ける中に、殊にすぐれたる馬形なむ侍るなる、その馬夜な〳〵にはなれて、近邊の田をくらひけり、なにものゝすると知れるものなくて過ぎ侍りける程に、件の馬の足に土つきてぬれ〳〵とあること度々に及びける時、人々あやしみて、この馬のしわざにやとて、壁に畫きたる馬の目をほりくじりてけり、それよりまなこなくな

りて、田を食ふこととゞまりにけり。

清水寺に元信の描ける繪馬の馬も、拔け出でゝ人を驚かしたといふ傳說があつて一對を爲してゐる、面白い物語である。

◇

美術に見えた馬　美術に現はれた馬の中で、日本で古いものといふと、正倉院御物の琵琶の捍撥に描かれた『胡人騎獵圖』など先づ第一に指を屈すべきものであらう、騎獵圖であるから、馬が主體となつてゐるわけではないが、描かれた馬はよく活躍してゐる、繪卷の中には、馬の描かれてゐるもの枚擧に遑もない、歌人として名高い爲家の筆と傳へられる、『隨身庭騎圖卷』は一本德川伯爵家に、一本廣田百豐氏が所藏してゐるが、白描で、よく馬の姿態を表してゐる、これは素晴しいものである。

馬醫繪詞　土佐長隆筆と傳へられる『馬醫繪詞』は鎌倉期の作物で、然も馬を主題としたものとして逸すべからざるものである、これは牛に於ける駿牛繪詞のやうに、當時馬を大切にする處から、特に馬の醫書として描かれたもので馬の外に藥草の描かれてゐるなども注目すべきであらう、軍馬の活躍を描いたものでは、住吉慶恩の筆と傳へられる『平治物語繪卷』が流石に繪卷中の王と稱せらるゝほどあつて人馬がよく描かれてゐる、御物『蒙古襲來繪詞』も、いろ〳〵の形に馬が描かれ、唯に藝術の上のみでなく、當時の風俗を知る上にも貴重なる資料である、この外、光長筆『年中行事繪卷』は原本は安永年間內裏炎上に依り烏有に歸し今は住吉家模のものが傳へられてゐるのであるが、馬は巧みに描かれてゐる、なほ元酒井家にあつた光長筆といふ『吉備大臣入唐繪詞』、神戸眞光寺の『一遍上人繪傳』の如きも擧げられる。

宗達の扇面散屏風の馬　繪卷の外では、宗達の御物平治物語扇面觀屏風中の馬、傳岩佐勝以といふ醍醐三寶院の『調馬圖』、京都加茂神社の國寶元信筆繪馬、益田壽男所藏、山雪の『群馬圖』、佐竹侯所藏の山樂の『群馬屏風』、紀州家所藏元信『群馬圖』、松浦家所藏、探幽の『櫻馬』何れも傑作である。

南畫では崋山に『瘦馬』の作がある、その境遇を喞つ一種の皮肉であらう、竹溪には傑れた『柳陰野馬』（小倉常吉氏藏）の名作があり蕪村にも『厩圖』の優雅な作がある。現代の作家のものにも傑れたのはあるが、餘りに近いので、こゝには省略する。

◇

馬頭觀世音　畫題として撰ばるゝものに馬頭觀世音がある、一に獅子無畏觀世音ともいふ、頭に馬頭を戴く、その慈悲利益の深大なるゝ馬の唯、水草を念じて四方に馳驅し更に餘意なきが如き意を現はし、一方これを以て畜生道の能化道とし獅子無畏觀世音と稱へるのである、佛畫として、これまで多く描かれてゐる。

八駿圖　『八駿圖』、これは周の穆王の畜つてゐた八頭の駿馬のことで、『拾遺記』に

穆王八駿、一名絕、二名翻羽、三名奔宵、四名起影、五名踰輝、六名超光、七名騰霧、八名挾翼。

穆王はこれに騎し瑤池に遊んだといふ、近頃、小室翠雲氏之を描いて日本南畫院に出品した。

伯樂一顧　畫題にまた『伯樂一顧』がある、伯樂は支那秦の代の人で、よく馬を鑑識した、『戰國策』に曰く

蘇氏曰、客有謂伯樂曰、臣有駿馬欲賣、比三旦、立于市、人莫與言、願子一顧之清猷一朝乙賣、伯樂乃旋視之去而顧之、一旦而馬價十倍。

これを描いたものでは、曾我蕭白の作、九鬼男の所藏が聞えてゐる。

甲斐の黑駒は、一名烏駒に作る、聖德太子の騎乘する處、故吉川靈華氏、荒井寬方氏や田村彩天氏にその作がある。

牛（うし）

藝術に緣の深い動物　あらゆる哺乳動物の中で、藝術に最も深い因緣を有するものは牛である、それは人類の祖先がまだ穴居生活をしてゐた、アグダレニアン期（馴鹿時代）に於て、既にその洞窟の中に、一種の裝飾として壁畫を製作し、その畫題の中に於て、最も多數を占めてゐるのが牛であつたからで、いま此の先史時代の遺物として、果た又、西洋に於ける繪畫のはじめであると稱せられる、西班牙のアルタミラ洞窟の壁畫の牛は、今を距ること、實に一萬五千年前のものと推測されてゐる。

原始繪畫と牛　このアルタミラ洞窟壁畫の牛は、西洋美術史の起源を語る重要なる資料として、千八百八十年これが始めて發見せられてからといふものは、非常なる驚異の眼を瞬らせたものである。

それは唯に時代が古いばかりではない、そのデッサンが素晴しく正確であり、黑、赤、黃土などの顏料を用ゐて描いた手法が非常に優れ、よくその動物の躍動を寫してゐる、その牛の姿態は蹲踞る牛、佇める牛、吼える牛等いろ〳〵ある。

この時代の前後の遺品として、美術界で有名なのは、佛蘭西アルスーラ洞窟壁畫の牛、レ・ゼエジイ附近から發掘されたといふ薄肉彫の牛、舊石器時代にはなほ馴鹿や大鹿の角に種々の彫刻や文樣を彫刻した元帥杖があつて、これにも原始的手法で、巧妙なる牛が表現されてゐる、それから更に降つて、エヂプトあたり古い藝術を探して見ると、牛は更に屢〻現はれて來るし、クレタ島から發掘したといふ親牛が仔牛に授乳してゐる木片の繪畫、これらは一面に於て如何に人と牛とが密接なる關係にあつたかを語る好個の資料で、如何なる種類の人が如何なる藝術的技巧を以てしたか、大なる謎となつて殘されてゐる。

◇

野生から家畜へ　牛を野生動物から家畜にまで飼ひ馴らした大なる功績は、亞細亞人の手に歸さねばならない、今日こそ牛はあのやうな、從順な溫和な動物となつてゐるが、野生の時代は相應に獰猛な動物であつたらしく、あの鋭い唯一の武器である二本の角の偉力には、隨分大なる犧牲が拂はれたことであらう、併しかゝる大なる危險を冒しても、結局、牛を飼馴らして家畜としたことは、人類の勝利である、この爲めにど

の位、人類の幸福を增進したか知れない、牛は力が强く、如何なる勞役にも耐へられる、乳は滋養多くして飲料中隨一のものであつた、かうして牛に對しては人類が感謝すべき多くのものを持つてゐた。

エジプト藝術の牛　その感謝の現はれの一とも見られるのが、古代エジプト人の牛に對する崇拜である。エジプト人は、總て動物を崇拜した、猫も、羊も、犬も、そして狒々の如きものまでも、併しその中でも、牛は最高の位置を占め、殊に白牛となると神とせられ、花崗石や大理石で出來た立派な神殿に、多大の國費を以て養はれ、多くの祭官はこの前に香爐を捧げて跪いた、これがアピスの牛である、そして此の牛が死ぬと全國が喪に服し、數千人の工人達はその技巧を競うて牛の爲めに棺を作り、棺には多くの繪畫や彫刻を以て裝飾し、これを神牛の山の中腹に葬つたのである、今日エヂプトの藝術に牛の多いのはそれから來てゐる。

牛を崇拜する習慣　牛を崇拜するといふ風習は、エジプトばかりでなく、印度の宗教にも胚胎し、それが更に支那や日本にまで傳はつて來てゐる、今日でも印度には、宗教上の儀式に牛糞を用ゐることが多い、『事林廣記』といふ書の記事が、『和訓栞』に引かれてゐるが、これに依ると

西天南華羅國事、西天佛教尊牛屋壁皆塗牛糞以此爲潔、各家置壇、以牛糞塗壇然後置花水爇香供佛。

なほ、『耶舍法師傳』には、

西國大俗以牛能耕地、生出二萬物一故以牛糞爲淨、梵王帝釋及牛並立二神廟一以祠之佛隨俗情、故同爲淨。

とある、いまも日本で稱へてゐる、牛頭天王や、牛王神社などは、かうしたことから起つてゐるのであらう、『月令廣義』には

牛有卒王之祀而越俗有二謬圖一再伯牛之像一以祭者上。

とあるし、牛を神聖化して崇拜するといふ根據の如何に深いかゞわかる。

◇

佛教と牛との關係は、本邦にもいろ〳〵と傳說や口碑に遺つてゐる。

關寺緣起の牛　その一つが近江の國の關寺である、この寺の緣起は、『榮華物語』の望月の卷や、『今昔物語』にも載せられてゐる。その梗概を記すと次の通りである。

その昔、左衞門太夫平朝臣義淸といふ人があつた、越中守であつた時、その國から黑牛一頭を手に入れた、義淸の父中方、日ごろ此の牛に騎つて居たが、故あつて此の牛を淸水の僧に贈つた、淸水の僧は更にこれを大津の周防掾正則に與へた。

こゝに關寺の聖人、豫てから本尊彌勒を安置しようと御堂を造營してゐたが、中々に捗取らず、年久しく過ぎてしまつた、正則この有樣を見て、これは雜役の車に牛のない爲めであらうと、聖人にその牛を寄進した、聖人は大に喜び、その牛を車にかけ、材木を曳かせ、漸くその勞役も終つた、するとその後三井寺の僧都の夢に、黑い牛が現はれて、我は迦葉佛である、關寺の佛法を助けん爲めにこの年ごろ牛となつて役に

服してゐたと見て目覺めた、そこで大に驚き關寺に詣でると、黑牛は三度び御堂をめぐつてみ佛の前に伏した、僧都これを見て、誠に希有の事であると歡び貴ぶこと限なく、人々もこれを不思議に思つてゐた。

この事やがて世に弘く聞えて入道前關白道長をはじめ、公卿殿上人の參詣引きも切らずいろ〳〵と捧げものあり、五六日を過ぎると牛は何となく惱ましさうな有樣なので、急ぎその影像を畫かせようとすると、その夜の聖人の夢に、迦葉佛が將に涅槃に入らうとする處を見た、そこで智者は當に結緣せよといふので、諸人相踵で詣で、歌人は數多歌を詠じて寄進した、その中に和泉式部の作

きゝしより牛に心をかけながらまたこそこえねあふ坂の關

があつた、やがて影像も成り、萬壽二年六月二日、いざこれに眼を入れようとした時、牛はまた御堂を三度めぐりし、牛屋に入つて死んでしまつた、人々みな歎き悲しみ、懇ろに葬りて塔を建て七日七日に供養を營んだ、これが關寺の牛塔である。

御堂關白と勤行の牛　御堂關白道長に就いては、『古今著聞集』にも一つの物語を載せてゐる、曰く

御堂殿、儀同三司の御車に乘り具し給ひて御ありきありけるに、辻をかひまはりける所に、牛殊に能く引きたりければ、御堂殿感ぜさせ給ひて、『この牛はいづくより出で來りけるぞ』と尋ね申されければ、儀同三司『これは祇園へ人の誦經にまゐらせたりけるを、人のたびたる』と答へ申されければ、御堂おどろかせ給ひて御車を召しよせてぞ、べちにてかへらせ給ひける、神物を恐れさせ給ひけるゆゑなり。

とある。

牛車の牛　京都では、公卿や高貴の人々が、常に牛車に乘つて都大路を往き來ひしてゐたので、自然、牛に就いては鑑識も高くなり、武家が馬をやかましくいふやうに、いろ〳〵と牛の品定めなどしたのである。

『枕草子』に

牛は額いと小さく白みたるが、腹のした足のしも、尾のすそ白き、馬の紫の斑づきたる芦毛、いみじう黑きか、足肩のわたりなど白き處、うす紅梅の毛にて髮毛などいとしろき、實にゆふかみともいひつべき。

などゝあるのも、その一つの例であるし、繪卷にも、特に『駿牛繪詞』などゝいふものが鎌倉時代に現はれたりした、これは、牛車の沿革、牛を使ふ注意、飼ひ方、名を得た駿牛の姿などを描いたもので有名であるが、これに就いては、後に記すことにする。

それから、牛が古くから日本に居たか、外國から渡來したか、これにも區々たる說があるが、『神代紀』には、保食神が世を去ると、その神の頂に牛馬化爲るといふことがあり、『神武紀』にも牛が出て來るが、明かに輸入された記錄のあるのは、欽明天皇の朝で、百濟から貢に獻上されたのである。

◇

詩歌の牛　詩歌に現はれた牛を見る、『萬葉集』には牛の歌は一首も見えない、牛が人の口の端に上るのは、

農作の上よりは、都あたりを車曳き歩む姿であつたらう、それ故か、牛の現はれるのは藤原時代からが多い。

冬の來て食むものもなきうしの子のやせ行く里のころのさびしき　慈鎭和尚

霜がれの野かひの牛のけしきまでたつはものうき冬の山里　寂蓮法師

あまた見ゆる遠方野邊の牛の子のおや〳〵知りてつれそ別るゝ　爲兼卿

稻葉わけひとの田のあぜひく牛のよきみちもなき時代なりけり　光俊朝臣

新しい作家のものには、その視野の廣いのが目立つ。

長き壁ながくたゞれし夕やけに一列黑き牛もだしゆく　與謝野寛

大なる山の力のせまるらむ山にみほれてひくゝ鳴く牛　茅野雅子

牛小舍に木の葉みだれて牛鳴きてミレが繪に似る夕景色かな　金子薫園

牛の子はまだあとつけぬ片岡の草の色こそ春めきにけれ　大和田建樹

俳句に於ける牛は別に季題もないのであるが、七夕の牽牛星に因んだものは矢張多い。

星の牛和歌の六くさそ飼にけり

これは常矩の句であるが、同じく

はなし難し星は七夕牛の繩

とも吟じてゐる。

うし祭る靈の數にもあら莚　宗因

これもその一つである、この外

牛の背にあられ走るや年の市　也有

梅が香に引かれて來ませ牛天神　勾當

牛賣つて伯父と道切る時雨哉　去來

などゝいふのがある。

詩文の句では

渴飲潁川水、餓喘吳門月　劉文

角斷苔花碧蹄穿、土鏽腥廼賢姚董魏紫動遊觀、何似田家黑牡丹　王惲

曾是江南秋雨過、閑看稚子引烏犍　程鉅夫

已鎖金甲事春農、無復全齋大戰功、惟有牧兒相伴在、一山桃樹半溪風　程敏政

などゝあるのが、著者の記錄に殘つてゐる。

◇

十牛圖　牛に『十牛圖』あり、『五牛』あり、『十牛圖』は畫題となつて、古來よく畫かれてゐる、これは禪家で見性の順序を牛に喩へて畫いたものである、曰く

尋牛、見跡、見牛、得牛、牧牛、騎牛歸家、忘牛存人、人牛俱忘、返本還源、入鄽垂手で、廓庵禪師始めて作るといひ、清居禪師の作ともいふ、牧野子爵家には宋の李嵩の筆がある、これは初めは一つに纏つてゐたのであるが、今日では所々に分藏されてしまつて居り、京都の相國寺には傳周文といふ傑作があり、山城の聖德院には興以の『十牛圖』がある。中山松陽庵氏にも李嵩の十牛圖があり、これには妙音禪師の贊があるが或は牧野家のものと同系ではあるまいか。

佛說の『五牛』　『五牛』は、矢張佛說から出たので、五牛とはその色を稱したもので、全身白、首黑、全身黑、首白、そして再び全身白となる、即ち、全身白は淸淨の意、首黑は少しく惡、全身黑は惡、首白は少しく善、そして最後の全身白は本然の善に回るの相である。

黑牡丹　牛の異名に『黑牡丹』といふのがある、唐の劉訓、牛に御して京洛に牡丹花を賞した、それから、劉の牛を『黑牡丹』と稱した、結城素明氏に、『箇是劉家黑牡丹』(文展八回)の作がある。

名作駿牛繪卷殘缺　繪畫の方面では、古來名作として世に謳はるゝもの決して少くない、その中で直ぐに思ひ浮ぶのが『駿牛繪卷』の殘缺である、これは鎌倉時代の作で、駿牛の寫生圖卷で、『群書類從』にも紹介されてゐる名畫卷であつた、明治二年七月、當時の鑑識家板橋貫雄の許へ伊藤某が持込んだので、板橋は交友の間を說き廻つて金を集めこれを買取り、その代り繪卷はばら〳〵に切られてしまつた、殘缺としてあるのはその爲めで、一は博物館に、一は福岡子爵家に、一は高橋捨六氏に殘つてゐるが、その他は全く所在不明となつてしまつた、純なる寫生畫であるが、牛の姿態をよく寫して流石に昔から有名なものとして傳へられて來たほどの事はある。

繪卷には、此の卷のやうに、牛を主題として畫いてゐるものは少いが、公卿や殿上人に關する事柄が多いので、牛車や牛は自然多く描かれ、一々枚擧に遑ない程である。

宗達の牛　宗達も牛をよくした、醍醐三寶院の國寶扇面散屏風の中に描かれた、荷車を曳て河を渡る圖や、荷を負ふてゐる牛の二圖の如き、放膽なる如き筆致の中に、如何にも悠々たる牛の生態を寫して躍如たるものがある、この外雪舟、應擧、蘆雪、元信、探幽、常信など或は『柳陰牧童』として牛を描き、或は『桃下放牧』として牛を描いたり、よい作が數々ある、神戸の川崎男舊藏に、宗丹の『放牛山水』があり、天龍寺の南江和尙、建仁寺の心田、江南兩和尙の贊のある名幅があるが、これなどは素晴しいものである。

近世の人では、雅邦、芳崖、桂谷、觀山などの人々がよく描いた、文展十二回に出た平福百穗氏の『牛』は、最近に於ける『牛』の作中で主なるものである。

◇

支那の繪畫と牛　支那の繪畫には、牛の描かれる場合が殊に多い、『君臺觀左右帳記』を見ても、その得意とするものゝ中に、牛が擧げられてゐる作家に、李唐、閻次平、胡直夫、張芳汝、戴嵩、戴嶧、張芳寂、如齋、老融、猪者等がある、李廸も山水の中によく牛を描いてゐる、閻次平と傳へらるゝものに秋元子爵家舊

藏の『樹下放牛圖』がある、鬱蒼たる樹下に親仔の牛が憩ひ、一頭は離れて草を食み、牧童は湖を前にした樹の根際に休んでゐる極めて整つた作である、張芳汝に就いてはその傳多く知れて居ないが、筆は雅諄にして氣韻がある、團琢磨男家に双幅の牧牛圖があるが、川崎男舊藏の『野牛』の大幅が優れてゐる、李迪には益田孝男祕藏の『雪中歸牧』がある、蓋し牛を描けるもの〻中で、逸することの出來ぬ品、馬遠の子馬麟も亦牛をよくする、紀州家舊藏によい作がある、但し支那畫に現はれた牛は、普通の牛よりは、水牛の方が多いやうである。

羊（ひつじ）

動物が藝術に現はれて來る場合、凡そ二つの種類がある、一つは人類の生活に直接交渉を持つ場合、たとへば、家畜家禽などの如く日常生活に深い關係を有するもの、この中には、その生活を保護せしむる要件のもとに養ふ犬の如きものもあれば、愛玩娯樂の爲めに飼ふ猫の如きものもあり、牛や馬や、象や駱駝の如く勞役に服さしめるものがあり、羊の如く衣食の料とする爲めに飼ふものもある。

第二は、その形や色の特長ある處から藝術に取扱はるゝもので、獸類をはじめ、鳥類にせよ、魚類、蟲類にせよ、その例少くない、この外に例外として、ある理想に依つて作りあげられたるものがある、鳳凰とか、龍とか麒麟など〻いふ種類のものである、尤も麒麟の如きは、ジラフと呼ばれて、阿弗利加邊に棲息する實在のものもあるが、それが藝術的に龍頭獅身、四肢の間から火焔を放つてゐるやうな形に作りあげられて、東洋の古畫などに現はれ、それが近代までいろ〳〵の文樣などにまで現はれて來てゐる、夢を喰ふといふ獏なども、繪に現はれたものは全く人の想像や、理想に依つて作られたる動物の一つである。

◇

羊が家畜となるまで　羊は家畜として、その飼養起源の古いこと、恐らく犬の次ぎであるとせられ、遠く有史以前のことであらうといはれてゐる、併し元來野生の動物であつたことは疑ひなく、その原生地に就いても、學者の間にいろ〳〵と說はあるもの〻、亞細亞の西南部といふことにはや〻一致してゐるやうである、唯、如何なる時代に於て羊が全く野生から離れてしまつたか、これには確たる學說もないやうである。

その家畜化の起源が、如何に古いかといふ證據としては、羊がその性怯惰で、臆病で、野獸によく見る爭鬪性などの全く缺けてしまつてゐることが擧げられる、實際羊の性質は柔和といふよりは寧ろ臆病で、彼等は多く群生してはゐるもの〻、自から進んでその生命を保護するといふやうなことが出來ない、道を歩んでゐても、峻しい坂路に出あつたり、川の流れなどに逢へば、これを越える勇氣はなく、唯徒らに其の場所に停つて、牧夫の差圖を待つてゐるのである、一朝牧場に狼その他の猛獸が來襲しても、唯逃げる外、何等の抵抗力をも有つてゐないのである。

牧羊の起源　羊を牧養するといふことの、物に見えたのは『舊約全書』などが古いものであらう、これに依れば、人類の祖先といはれてゐるアダムとイヴが、エデンの樂園を逐はれてのち、カインと、アベルの二子を設けた、そして二人はそれ〴〵の業（なりはひ）にいそしんだ、即ちカインは土を耕し、アベルは羊を飼うたのである、

『創世記』の第四章に曰く

アダム其妻エバを知る、彼孕みてカインを生みて言けるは、我エホバによりて一個の人を得たりと、彼また其弟アベルを生めり、アベルは羊を飼ふ者、カインは土を耕す者なりき、日を經て後、カイン土より出づる果を持ち來りてエホバに供物をなせり、アベルもまた其羊の初生と其肥たるものを携へ來れり。

この一節をはじめとして、『新舊約全書』には牧羊のことが物繁く現はれて來る、神の子といふキリストは、自から『よき羊飼ひ』といひ、多くの人々を羊にたとへてゐる、今日でも基督教の布教を職とする人に、『牧師』の名稱すら殘つてゐる。

◇

東洋に於ける牧羊　東洋に於ても、羊飼ふといふことは餘程古くから行はれたらしい、それは主として、中央亞細亞から、支那の西北部に行はれたことで、それが漸次中部にも傳はつて來たのであらう、これを證據立てゝゐるのは、『列仙傳』の黃初平の物語や、蘇武が朔北の苦節の傳說などである、先づ黃初平の物語から記して見よう。

黃初平の話　黃初平は、晉の丹溪の人である、十五の歲まで羊を牧することを業としてゐた、ある日、會々道に一人の道士に出遭つたが、そのまゝ導かれて金華山の石窟にあること四十年に及んだ、初平の兄に初起といふものがあつた、弟の行方を尋ねて所々をさまようたが、中々探せず、ある時、不思議な道士にめぐり會つた、この道士に尋ねたなら弟の所在も判るだらうと聞いて見た、すると道士は

『金華山の石窟の中に、羊を牧してゐる童子が居る、大方その男であらう』

と答ふるのであつた、初起は大に喜んで早速金華山に至り、石窟の中を探すと果して初平がゐた、然も昔ながらの童顏である、幷で初起は初平に向ひ

『お前は一體羊を牧してゐると聞いたが羊は何處に居るのか？』

と訊ねた、初平は

『羊は山東にゐる！』

と簡單に答へる、そこで相伴つて山東に出かけたが、そこには唯石がごろ〳〵轉がつてゐるばかりで、羊らしいものは見えなかつた、初起はまた

『羊は何處に居るのか？』

と訊ねた、すると初平は傍らの石に向ひ何やら言葉をかけ、手にした鞭でこれを打つと、石は忽ちむく

〳〵と起きあがつて、皆羊となつてしまつた、そして幾百千頭とも知れない羊の群れで、山東の野が埋つてしまつた。

初起もこれに感じ、發心して初平に仙術を學び、後、初起は魯斑、初平は赤松子と名を改めて立派な仙人となつた。

黄初平の物語りは以上の通りである、『石を叱して羊と成す』といふ題材が、如何にも面白いが、同時にこれが運を開くといふやうな意味にも取られて、昔から繪などに盛に畫かれたらしいのである。

黄初平の名畫　黄初平を描いた作品としては、雪舟の作が聞えてゐる、河瀨秀治氏舊藏の如きその一例で、筆が如何にも仙骨を帶びてゐる、京都の妙心寺にある元信の三幅對、中黄初平、左右蘆の作も有名である、應擧にも數點あり、唯初平が石を打つてゐる圖丈けのもあれば、兄の初起を伴つてゐる二幅對の大作もある、渡邊崋山もよくこれを描き、渡邊始興の作にも傑れたものが東京の帝室博物館に藏されてゐる、狩野派の人々も亦よくこれを描き、明治の人では橋本雅邦が好んでこれを繪にした。

昭和六年は未の年であつたので、黄初平の作も、彼方此方に現はれた、島田墨仙氏は、童形に描き、小林古徑氏は壯年の姿に畫いてゐた、何れにも理由はあるか、傳說の本文に從へば、童形の方に面白味がある、小川芋錢氏も初平を描いて、昭和五年秋の東京會に出品したが、これは全然構圖の變つた興味の深い作品であつた。

◇

蘇武と羊　蘇武の物語は、よく人口に膾炙してゐる。その梗概を記して見よう。

蘇武は杜陵の人である、命を受けて支那の西北匈奴に使した、匈奴では、此の遠來の客を迎へて、何か野心を藏するのではないかと大に怖れ、直ちに蘇武を窖の中に幽閉して食物を與へず、窃かに餓死せしめようとした、蘇武は雪と獸毛等を口にして餓を凌いだ、更に餓死する模樣も見えない。

匈奴の人々は、これを見て蘇武は人でなく神であらうと畏れるやうになり、更に北海の荒蕪の地に流してしまつた、蘇武はこの朔北の荒野に徒されて、命ぜられるまゝに羊を牧して日を送り、苦節を守ること、實に十九年の久しきに及んだ。

丁度その頃、漢から李陵、衞律などゝいふ使者が、匈奴に使節として來たが、匈奴の誘惑に陷つて忽ち降參してしまひ、果ては蘇武にまで降を勸めた、然も蘇武は頑として聞き入れず、一向にその勸告を聞かぬので、匈奴の人々は更に蘇武を苦しめた。

始元六年、漢では蘇武の行方が更にわからぬので、非常にこれを憂ひ、又々使者を匈奴に遣はして蘇武の返還を交渉したが、匈奴では却つて後難を慮り、蘇武は既に死せりと返事をしたので、使節はすごすごとして漢の國に引返した。

それから間も無いことである、漢の天子が、林中で狩をし、一羽の雁を射落した。

見るとその脚に書いたものが結びつけられてある、解いて讀んで見ると、思ひがけなくもそれは蘇武の筆蹟で、『蘇武はなほ大澤の中にあり云々』と記してあつた。天子大に驚き、且つ喜び、忽ち屈竟の使者を選んで更に匈奴に遣はし、嚴重なる交渉を試みたので、匈奴でも形勢の非を悟り、遂に蘇武を引渡した。

蘇武、はじめ體力强壯で、力も人に優れてゐたが、漢に歸つた時は、鬢髮悉く白かつた。宣帝が位に上つて、厚く蘇武の苦節を賞し、高官に封じてこれを慰めた。

名畫の蘇武　この物語はこれまで好個の畫題として、古來幾多の藝術家に依つて、その作に取扱はれた、殊に華山には名作があり、雅邦にもその作がある、昭和五年の帝展では、日本畫部で木島櫻谷氏が『望鄉』と題し、西洋畫部では中村不折氏が、『蘇武牧羝』と題し、言ひ合せたやうにこれを畫いてゐた。

◇

葛由仙人　いま一つ、『列仙傳』中に、葛由のことがある、葛由は周の成王の時の人で、木彫が巧みであり、殊に羊を彫ることに秀でゝゐた、然もその羊は葛の意の如くに動くので、ある日これに乘つて蜀の國へ出かけた、蜀の王侯や貴人がこれを見て、仙人だ仙人だと驚き、これを逐うたが、木羊の脚が早くて誰一人として追ひつくものはない、それから葛由は峨嵋山の西南方で、最も高く、最も深い綏山といふところへ匿れてしまつた、たま〳〵葛由を慕つて、山へ入つたものもあつたが、誰一人として再び出て來るものがなかつた、それは皆仙人となつてしまつたからである。

この葛由も、昔からよく畫に描かれるが、現代の人では、小杉放庵氏にその作がある。

◇

『羔羊之皮』　かうして支那では、上代から、中央亞細亞邊の影響を受けて、羊を飼ふことが行はれてゐた、『禮記』には、既に『食麥與羊』の文字があつて、既に羊の肉が食用に供されたことが記してあり、『詩經』の『羔羊之皮』といふ語も羊の皮を服としたことを記すものである、なほ、古い語に『吉朔之餼羊』といふのがある、これは、月の朔日に羊を屠つて、神に供へることをいふので、日本にはないが、支那では古くから行はれてゐたものと見える、或は中央亞細亞あたりから傳へられた習慣かも知れない。

羊を多く飼つてゐる人は、富んだ人で、その牧羊の多い少いで、財産の多寡が知られるのも、矢張り支那古代からのことであつた、また、羊の肉は美味のものとせられてゐたので、『羹』『美』などゝいふ字は皆『羊』が基礎になつて居るし、『義』、『羨』、『善』等も羊から起り、群生を好む羊から『群』といふ字も生れて來た。『羔』といふの字は、羊の親の下に、仔羊が並んだ形でもあるのも面白い。

神祭の羊肉　その羊の肉を神祭に供することにい就て、天野信景の『鹽尻』に記して曰く。

異邦の神祭には、三犧(羊豕なり)五鼎(牛羊豕魚鹿)の儲あり、是平常の饌食丹穴の雛(禽饌也出七命)をもつてする故のみ、我國の神膳は、獸肉を甚穢とす、是等常獸鱗を食はざるを以てなり。

と、同じ東洋でも風習の違ふところが面白い。

◇

日本に渡來した始め　日本には羊が何時ごろ渡來したか、『大日本史』の記す所によると

推古天皇七年秋九月癸亥の朔、百濟駱駝、驢、羊、白雉を獻ず

とあるが、これが一番古いのであらう、その後になつて、嵯峨天皇の御宇、新羅人の李長行なるもの白羊四頭、山羊一頭、歷羊二頭を獻上したこと史に見え、承平五年には、大唐吳州の人、蔣承勳といふもの、羊數頭を獻じまた承保四年には、宋の國人が、羊三頭を獻上したとある、これらは、今日のやうに毛皮を利用するといふほどでなく、唯珍らしいので宮中で飼はれてゐたらしいが、かく屢々外國から羊が渡來したので、後には多少國々に依つて牧羊といふことも行はれたらしい、醍醐天皇の延喜五年には、諸國からの朝貢の品の中に、『武藏の羊皮』の文字も見えてゐる、これは今日の緬羊の類か、それとも山羊などであつたか、詳にする由もないが、兎に角、多少なりとも牧羊のことは行はれてゐたらしい。

なほ近代になつて、寶曆十三年、江戸の田村元雄が、緬羊を輸入して和羅紗を製したといふこともあり、文化年中には、幕府が支那から緬羊を求めて、江戸巢鴨の藥園の中に飼育し、その數三百頭に達したといふし、安政年間には羊四十頭を函館に送つて飼養せしめたが、何れも季候が適せず成功を見ることが出來なかつたといふ。

ペルリの携へて來た羊　なは傳ふる處に依ると、嘉永六年六月、米國の水師提督ペルリが來朝に際し、通商貿易の交渉長びくを察し、その船中に羊を携へ來り、これを琉球又は小笠原島に飼育して、食糧の資に充てやうとしたが、これまた氣候の適せぬ爲めに中止してしまつたといふ。

羊の現はれる戲曲　『富岡戀山開』　こんな風で羊は屢々外國から渡來したがこれを實用的に飼育することは、容易に出來なかつた、僅かに見世物などにしてゐたと見え、それを扱つた戲曲に、並木五瓶の『富岡戀山開』がある、これは芝神明に羊の見世物が出て賑つてゐる中、土地の蔦の者、產毛の金太郎が、その羊を借りて來て、敵同士の金貸から貸金の催促されてゐる隙に、對手の持つた證文を羊に食はせてしまふといふのが山になつて居り、場所は江戸であるが、上方狂言として多く關西で上場され、三册本の繪本にもそれがあり、昭和六年の春開かれた浮世繪綜合展に陳列された、なほ戲曲には、近松の『國姓爺後日合戰』に、甘輝が大切の密書を羊に食はれてしまつたので、その羊を殺すといふ場面がある。

羊の文字　さて亦羊の文字は、『本草綱目』に依ると

羊字象二頭肉足尾之形一といふ、上の二點は角であり、中央の一劃長く下に垂れたのは尾の義か。

その羊に因む文子に就いては、『和漢三才圖會』に左の如く記してゐる。

陸佃云、羊善群行故群字以レ羊、羊以瘦爲レ病故羸字以羊、羊貴レ大故羊大爲レ美、羊有肉而不レ用類レ仁、執レ之不レ鳴、殺レ之不レ嗥、類レ死レ義、飲二其母一必跪、類レ知レ禮也、本草所レ載類甚多。

これを見ると、羊は誠に禮義の正しい動物といふことになる。

◇

歐洲の牧羊起源　歐洲に於ける牧羊のはじめは、何時ごろの事か詳かでないが、瑞西に於て、湖上生活時代の遺物が發掘された時、羊の遺骨が發見されたので、恐らく有史以前のことであらうといはれてゐる、であるから、羊の原種の如きも、果して何處に居たものか解らない。

第十三世紀の昔、彼のマルコポーロが中央亞細亞に於て發見した巨大な羊が、今日のアルガリー種であらうといはれ、此の羊はアルタイ山に群集生活を爲し、朝夕出でゝ木の葉や苔類を食し、日中は入つて休息しその際は必らず一頭が見張りをしてゐるといふ。

かうして原種は中央亞細亞に棲息してゐたのが、漸次東西に分布して行き、斯く人類の生活と密接なる關係を有するに至つた。

パンの神　それから降つて、バビロン時代、アッシリヤ時代に至ると、浮彫やその他いろ〳〵の藝術にも現はれて來る、ギリシヤ神話に出て來るパンの神は、體は人間であるが、脚は山羊であり、そして羊を飼ふ神としてある、これも牧羊の古きを語る一つの例である。

かく、肉は美味にして生活上缺くべからざるものであり、その毛は織つて布とし、皮はもろ〳〵の細工に用ゐるといふほど、有用の動物である羊は、自然人からも貴重なものとして取扱はれ、神への祭壇には、い

つも羊が供へられた。

『羊を負ふ者の像』　今、アクロポリス博物館に藏せられる『羊を負ふ者の像』や、ガルラブラシデ墓堂や、羅馬フリスタスの墓墳に遺る『よき羊飼』の如きは、かうした人の生活と羊との關係を物語る絶好のものであり、ガン市のサンポウオン寺に藏する、ヴアンアイクの『聖羊禮讃』の圖の如きも、羊が人の生活に與ふる恩惠から、聖なるものとして扱つた一つの例であらう。

◇

一方に於ては、『舊約全書』等に屢々現はれて來る關係から、さま〳〵の寓話が出來てゐるし、神話も生れてゐる、神話の中で有名なのは『金毛の羊』の物語である。

神話『金毛の羊』　希臘の北に一つの國をなしてゐたテッサリヤに、アサマスといふ王があつた、その妃ネフイールとの間に一男一女があつて、樂しく平和に暮らしてゐたが、王は晩年になつて、年老いた妃を嫌ひ離別し、アイノといふ女を入れて妃とした、處がたま〳〵テッサリヤ地方に大饑饉があつたので、アイノはこれを前妃ネフイールが此の世にある爲め、神々が怒り給うての業と王に告げ、一刻も早くネフイールを亡きものにするやうにと唆かした。

王はアイノの容色に溺れてゐたので、直ちにその言を信じ、ネフイールとその二子を殺さうとした、ネフイールは驚き悲しみ、マーキュリーの神に願つて金毛の羊を授けられ、その背に二子を乘せて危難を

遁れた、金毛の羊は天を騙けつて東方アジアと歐洲との國境まで進んだが、その海峽を越える時、過つて王女は海に落ちた、此の王女は名をヘレと呼んでゐたので、此の海峽をヘレスポンドと呼ぶやうになつた、ヘレスポンド海峽は、今のダーダネルス海峽だとの事である。

金毛の羊はそれから王子フリックスをのせて、黑海の東岸マルチスの國に到り、その王イエテスの手に王子を委ねた、王子はそこで金毛の羊を屠つてジユピター神を祀り、その毛皮をマルチスの王に獻じ、王はこれを神聖なる寶とし、代々その國に傳へ、樫の木にかけ、毒龍をして守護せしめた。

その後、テッサリヤの方では、幾代か後の王子ジエーソンが、昔物語に聞く金毛の羊の毛皮を奪はうと、勇士を引具し、アルゴスといふ大船で大海を渡り、遙々マルチスの國に到り毒龍を退治し、金毛の毛皮を奪つて凱旋した。

牡羊星座と白羊宮　この神話に緣の深いのは、天文の方で、黃道十二座の首席にある牡羊座で、羊の名がつけられたのは、全く、此の『金毛の羊』から來てゐる、そして此の星座は昔から非常に崇拜されてゐたもので、太陽がこの座に入る時は盛な祭が行はれ、ペルシヤあたりでは『羊祭り』が行はれたといふ、この十二座に略々一致するやうに黃道十二宮があり、その第一座が白羊宮で、三月二十一日太陽が初めて白羊宮に入る、これが春分である、併し今日では、春分は金牛宮に入る時となつてゐる。

◇

『イソップ物語』の羊　寓話では矢張『イソップ物語』の中に、澤山羊に關するものがある、羊と狼、羊と狐、羊と犬といふやうに、他の動物との關係が面白く綴られてゐるのであるが、羊が弱い動物なので、大抵はひどい目にあつたり、欺かれたりする割の悪い役目を引受けてゐる、その中で二つ三つ羊の方が器量をあげてゐる物語がある。

その一つは、狼が羊の處へ出かけて行き、番犬をやめさせてしまつて、お互に手を握らうではないかといふ、多勢の仔羊達は、うつかりその手に乘らうとするのを、一頭の老いた羊が、それを遮り、狼に向つて

『狼さんと手を握ることなど、どうして出來るものですか、番犬が手近にゐてさへも時々あなた方にひどい目にあふのですもの……』

といふて、キツパリ斷つた。

その二は、狼が番犬に嚙みつかれて、ひどく弱り、漸く元氣を回復すると、傍に一頭の羊が居る、そこで狼は羊に向ひ

『羊さんお願があるが聞いてはくれいまか、咽喉が乾いてしかたがないのだ、川の水を汲んで來てくれ』

すると羊は即座に答へた。

『水を汲んであげたあとで、肉がほしいパクリなどは恐しいからネ……』

その三は、羊の子が狼に追ひつめられて、お寺の中へ逃げ込んだ、狼は何とかして、小羊を寺の外へ誘ひ

出さうと考へて、

『早く寺を出ないと、坊主に捕まつて祭壇の供物になるよ』

小羊は答へていつた。

『お前に喰はれて死ぬよりも、祭壇の供物になる方が、よつぽどましである』

◇

羊の夥しい種類　羊が野生の動物から、家畜に馴化され、その毛と皮と、美味なる肉を得る爲めに、人の力に依つていろ〳〵の種類が生れた、いま全世界に分布する羊の種類は、三十二種の多きに達してゐる、その中、リスター、リンコーン、メリノ、バーバリン、デインコレー、プロヴンス、ピカルデイ、レーセスターなどゝいふのが聞えてゐる、リンコーンは英國産として有名であり、メリノは西班牙の優種である、バーバリンはその牡に四本の角があるので四本角とも呼ばれてゐる、レーセスターは毛や皮よりも食用として多く飼養されてゐる。

緬羊の毛は刈つて織物とされることは今更いふまでもない、併し牧場にある羊の毛皮は隨分穢れてゐるので、これを淨化するのは中々骨が折れる、第一に羊の健康そのものも考慮に入れなければならない、そしてこれでよいと見定めた時、清い流れに伴つて行き、一頭づゝ水に入れて背中から水をかける、これを羊の背洗ひといふ。

それから刈り取つた毛は漂白して美しくしなければならぬ、それには密閉した室に入れて硫黄の煙に通すのである。

日本では、まだ盛んではないが、歐洲では盛に牧羊が行はれて、一つの牧場で、數千頭數萬頭を牧するものがある、メリノの如きは西斑牙の南部で牧養するのであるが、多は南の暖い方で放牧し、四月の初めになると北部の山地に移し、六ヶ月位を經過する、羊一萬頭に對し、五十人の牧夫と同じ數の犬がこれを護りながら、此の大群は、徐々として旅行を初めるのである、將に一幅の繪ではないか、歐洲の畫家はよくこれを畫いてゐる、佛蘭西の南部でもかうした牧羊群の移行が見られるといふ。

◇

正倉院の鶴繻屏風の羊　藝術に現はれた羊に就いては、歐洲の方の古い所は、既に羊の原種を記した項中に二三を擧げたが、東洋に於ては、光づ奈良正倉院の御物『鶴繻屏風』を擧げなければならない、これは『齋衡實錄』の中に『椽地象羊木屏風』とあるのがそれらしく、羊の圖の下に『天平勝寶三年』と記してある、一扇には象を描き、一扇には羊を配し、背景には各々喬木一株があり、これには猿が戲れてゐる、地上には草が萠え、更に下方には山水風の模樣がある、この羊の如きは、極端に姿が誇張され、角は螺旋形を爲し、胸から腹、背にかけては三角形の文樣を配した誠に面白い形である。

支那には李安忠と傳ふる『愛羊圖』(榛原家舊藏)がある、唐美人が數頭の白羊を撫育してゐる珍らしい構圖

のものである。

羊の繪で更に有名なのは、高山寺の傳鳥羽僧正筆、『鳥獸戯畫卷』であらう、この戯畫卷の主役は兎と猿であるが、羊も一寸顔を出す、親子六頭の羊が、實に美事に描かれてゐる、東福寺開山堂の、傳山樂筆の杉戸も有名で、單純なる繪であるが、よく羊を活かしてゐる。

狙仙の作　森狙仙は、動物畫をよくし、殊に猿をよく畫いたが、羊を畫いた作も上野の帝室博物館にある、扇面に描いたもので、よく出來てゐる、崋山にも、『羔羊』の作があり、これに

絕飲懲澆俗、行驅夢逸村、僊人擁石立、童子馭車來、夜貝含座動、晨氈映雪開、英言鴻漸力、長牧上林陰。

と賛してゐる。なほ春木南溟には『松下遊羊圖』があり、北齋の卍字落欵の作には、『樹下游羊』がある、彫刻には森川杜圓の作が聞えてゐる。

◇

ミレーの羊の繪　外國のものでは、ミレーがよく描いてゐる、『羊飼の女』とか、『羊飼と羊の群れ』といふやうな田園情趣に滿ちた作は、その得意とする所であつた、ターナーにも『群羊圖』があり、セガンチニーの作で、大原コレクションとして本邦人に馴染の深い『アルプスの眞畫』にも羊がゐる、ハンストーマの『春の野』、ムリルロの『聖なる羊』などは名畫として有名なものであるし、ホルマンハントの『贖罪の羊』は犯せる罪の爲めに、悄然として歩みつゝある羊の姿に、一種の悲哀をすら感ぜしめる印象の深い作品である。

◇

永き日を七面鳥と羊かな　冬草

春寒さ埒に人戀ふ羊の子　滴翠

兎（うさぎ）

等夜の野に兎窺はりをさをさも寢なへ兒故に母は嘖ばえ

これは『萬葉集』の第十四卷、相聞の中に收められた作者不詳の歌で、『萬葉集』には珍らしい兎が歌に現はれてゐる、兎が主となつてゐる歌ではないが、『兎ねらはり』とあり、『とやの野に』とあるのを見れば、當時、既に兎狩などが行はれてゐたのがわかる。

兎の分布と習性　この動物はオーストリアと、マダスカル島を渉つて、全地球上に分布してゐるといふ位に廣く棲息してゐる。

まだ野生のまゝで、山野に棲息してゐるものが大部分であるが、一部は既に家兎と呼ばれて、家畜として相當に永い歴史を有してゐる、だから、その種類を擧げると實に澤山の數になる。

元來此の兎屬……學術的にいへば野兎屬……はアジアから、アフリカ、歐洲、北米の各地に分布してゐる、山野の叢の中に棲息してはゐるが、殊更に孔を穿つてこれに入るといふやうなことはしない、幾分地の窪んだ處へ、枯草などを敷きこれに潜み、朝と夕方と、それから夜と、此の窪みを出て食物を漁り歩く、その食餌とする處は、總て植物性で、植物の嫩い芽とか、樹の皮のやうなものを食べる、人も知る通り、長い耳と愛らしい眼と、そして長短の四肢を有する、いふまでもなく後肢の方が發達して、これで跳躍することが出來る、だから勾配の急な處でも、よく跳躍しく極めて疾い、その代り坂道を下る時は非常に拙劣である、繁殖力は中々旺で、毎年數回仔を孕み、三十日位で産む、少くて一頭、多きは一時に十二頭に及ぶことがある、仔は生れながらにして眼が開いてゐて活動も活潑であり大抵半ヶ年位で立派に成熟し交尾するに至る、こんな風に繁殖力が非常に旺ではあるが、他の敵に對して防禦力には乏しいし、體も小さいので、多く他獸や猛禽類などに捕へられ、犧牲を出すこと夥しいから、その繁殖の力強い割に數は殖えぬといふ、同時にその壽命の如きも、八年を限度としてゐるもの丶、よくそれだけの齡を保つものは稀であるといふ。

○

兎の種類　本邦に産する兎は、普通の野兎の外に、樺太野兎、蝦夷野兎、越後野兎、隱岐野兎、朝鮮野兎などがある、特殊のものに奄美黑兎、奄美の野兎などがある、野兎は本州から四國九州に産し、褐色で冬になつても白色になるやうなことはない、蝦夷野兎は北海道特産で冬になると白色になるが、尾は夏の中でも白

い、樺太野兎は蝦夷野兎に似たもので專門家でなければその判別はつかない、越後野兎は夏は褐色であるが冬になると眞白になる、隱岐野兎も、本州普通の野兎に似てゐて、餘り目に立つ程の違ひもない。

奄美の黑兎　奄美の黑兎は九州の奄美大島及び德之島に産する、全身黑昧勝ちで、耳が極く少さい、本種は農學博士内田清之助氏に依りて、洽く世に紹介されたもので、氏の調査に依ると、この兎は普通の野兎よりは遙かに小さく、常に密林を好んで棲息し、晝間は樹木の空洞に深く潜み、夜は出で食を求める、その餌は多く草木の葉嫩芽莖などであるが、特に筍や甘藷の蔓などを好む、繁殖期になると土中又は崖等に五六尺の深さの横穴を穿ち、此の巣の中に二三頭の仔を生む、仔は生れた時はまる裸であるがだん〳〵と毛が生えて行く、兎も角も珍らしい動物だし、近年絶滅に近いといふので大正十年、天然記念物として保存の方法が講ぜられたのである。

◇

古事記の因幡の兎　兎はその姿が愛らしい爲め、昔からよく人に愛せられ、人の生活の上にも、藝術の方面にも相當に交渉をもつてゐる、先づ『古事記』を見ると、因幡の兎の傳說があつて、大國主命の仁慈を裏書する重要な役割を勤めてゐるし、童話の『かち〳〵山』は、今の日本國民で幼時何人の口からか、この童話を聞かされぬものはあるまい、復讐といふ觀念は、今日でこそ問題になつてゐるが、昔は立派な行爲の一つと見られてゐたので、此の話など殊に喜ばれたものである、『兎と龜』の話になると、少しく割が惡くなる。

月と兎　月の表面に現はれたる形狀が、兎に似て見えるといふことは、古く支那から傳へられたことであるが、月に『玉兎』といふ異名のあるやうに、月と兎とは、離るゝことの出來ぬやうな關係になつてしまつた、亦して兎はその下で齒を磨くべく木臼を折る、亦で月と兎と木臼とが、昔からよく繪などに描かれる。

日光の『御靈山緣起祕錄』には、兎に關する一つの傳說を載せてゐる、それは日光の奧白根に近い澤邊に何處から現はれたか、一疋の白兎が現はれて頻りに草の根を嘗めてゐる、通りかゝつた役小角が、これを眺めて、兎を招きそのわけを問ふと、兎の答には、我が老眞人病篤く、我を招いて藥を二荒山中に探し來れと命じ給うた、今試むるところの草がこの藥であると、其の草の根を摘み、忽ち白雲を分けて上天してしまつた、小角、その草を嘗めて見ると、その苦きこと龍の膽の如く、芳香ありて心氣俄かに淸々しくなつた、それからこの草を人の世へ傳へたが、これが今いふ當藥龍膽、俗に『せんぶり』と稱するものであるといふのである。

兎と龜の寓話　歐洲には『イソップ物語』があつて、兎に關する寓話を錄してゐる、『龜と兎』の驅けくらべの如きはその一つであるが、その他の話では皆弱い意久地のない動物になつてゐる、時に强がりをいふてゐても、それは捨て鉢の虛勢に過ぎない。その中に、一つ兎の耳に關する面白い話がある。

百獸王の獅子がある時、牡鹿の角で怪我をした、その怒りは非常なもので、これから角のある獸は總て此の森林に住居はならぬと布令を出した、牛や羚羊、山羊や羊、牡鹿は勿論のこと、兎までが色を失つて逃げ出した、中でも兎は臆病者なので、月の光に我と我が影を見て、私は角は持たぬが、並外れて大きい耳がある、これを角と見られたらどうしよう、するとそこへ蟋蟀がやつて來て、その體を見ながら、兎の耳の長いのは、今に始まつたことではないぞ—といふと、兎はいふ、あの分では中々耳では通らない、强ひて言張らうものなら、それこそ氣狂ひ扱ひにされるまでだ。……

◇

和歌の兎　文學方面の兎を見よう、『萬葉集』の兎の歌一首は珍らしいが、それ以後になると、幾分現はれて來る、

何となく通ふ兎もあはれなり片岡山の庵の垣根に

これは慈鎭和尙の作で、兎の歌といへば、よく此の歌が例に引かれる。

月みてもたのみをかけてまち渡るみちはしとなるうさき住けり　俊頼朝臣

まよふなり月のひかりの白うさぎ雪にはふかきみちも忘れて　藤原爲顯

露にふすうの毛のいかにしをるらん月のかつらの影をたのみて　定家卿

俳句の兎　俳句の方には、これを吟じたもの割合に少く、唯他の題の中にその名のよみ込まれた位に過ぎない。

雪の日に兎の皮のひげ作れ　芭蕉

雲に吠えぬ獸か月のしろ兎　季吟

明月や兎のわたる諏訪の湖　八四　燕村
天筆といふもや月の兎の毛　貞德
前に勝つ兎の足の長月や　羅人

支那の文學では、韓愈の『毛穎詩』に

其先明祝位、禹治東方土、養數物有功、因封放卯地、死爲十二神。

とあるをはじめ、李太白は

夜臥松下雲、朝餐石中髓。

といひ、其の他

玉杵成靈藥、瑤池薦壽杯　張田維

は、月の桂の玉兎であらう。

光搖玉斗三千大、氣傲金風五百霜。　揚雲翼
仙山昔慣餐瑤草、月殿今看舞羽衣。
毛穎多年禿未更、小窓題字苦難成。　瞿佑
何時會獵中山下、拔取霜毫對管城。

など、記してゐる、まだ探つたらいくらもあるであらう。　李祈

◇

その語源や稱呼　兎を『うさぎ』と訓むその語源に就いては、餘り詳かでない、『言海』には本名『う』にて、さぎは梵語、舍迦(兎)を合せたるものといふは、いかが。とまだ疑を存してゐる。

その兎の中の白毛のものに就いては、既に種類の中に記した通りであるが、冬日白化する越後野兎に就いては、既に『本朝食鑑』に

北國之兎十云八九、自秋末至春、悉變白毛、餘月每褐色也

と記して居り、その冬期白化することは普通のことのやうに見られて居た、唯、『三代實錄』の中に

元慶元年五月九日己酉大宰府肥後國獲白兎一

とあるのは、この種の白化でなく、全く白兎となつてゐたものらしい。

德川家の兎の吸物　それから、兎の肉が美味なので、料理法なども傳へられてゐるが、德川幕府では、每年正月元日の儀式には、兎の吸物を饗することゝなつてゐる、これには一つの傳說がある、それは家康から九代の祖、有親、其子親氏が應永年間に上野國新田から沒落して、信濃國林鄉に潛伏してゐた時、土地の豪族林孫十郎光政が懇ろに有親父子を遇し、十二月晦日、自から積雪を冒して兎狩を行ひ、その獲たる兎を吸物として元旦に父子の膳に供した、その歲より德川家の運が向いて來たので、其後に及んでも必らず元旦に

は兎の吸物を供することになつた、そして之に用ゐる兎は林光政の子孫にして上總國清西の領主たる林家から例年十二月末日將軍家に獻上する例になつてゐたといふ。

◇

兎の名作は鳥獸戲畫卷　兎の畫かれたる名作としては、先づ何を置いても高山寺の傳鳥羽覺猷の『鳥獸戲畫卷』を擧げねばならない、この繪卷に現はれて來る動物はいろ〳〵あるが、兎と猿と蛙とが、全卷に亙つて最も活躍してゐる、殊に狐との弓術くらべ、溪流の戲れ、蛙との相撲などの妙、筆致輕快にして暢達、その線條の諄雅にして而して勇勁なる、眞に國寶として其の價値を誇るものである。

天香玉兎　花鳥畫として兎の畫かるゝ場合は、多く秋草に兎が配せられる、薄を背景とするもの、萩を添景に畫くもの、その種類極めて多い、これは多く月との關係から來てゐる、月下の兎を畫いたもの、桂香を配して『天香玉兎』の畫題としたもの亦少くない、或時は紅葉に兎を添へたもの、白兎の背景に芭蕉を添へたものもあり、木賊も相當にある。

兎の名畫　兎の作の中で、目に殘つてゐるのは、武藤山治氏舊藏の『萩と兎』の屏風である、無落欵ではあるが、萩に戲るゝ兎の姿態を縱横に畫いて面白い作である、それから光悅の萩と兎の扇面、これは扇面の上半に箔を置き、月を現はし下に萩と兎とを畫いてゐる、『袖の上に』の賛が、例の光悅得意の筆で精彩を放つ。故九鬼男の所藏である。

西本願寺舊藏の『芭蕉下の兎』も名品である、應擧の巧みなる寫生もこゝまで來ると更に臭味がなくなる、應擧は兎をよく畫きこの外にも擧ぐべき作が少くない、神戸の田村氏舊藏の兎は蜩吊草が添へてあつた、應擧の周到な往意が見られる、秋暉には『秋草双兎』のよい作があり、文晁にも薄に兎の瀟洒な作がある、支那人では紀州德川家舊藏のものに、朱朴の『月兎桂』があり、藤井善助氏藏に徐崇嗣の『西瓜畑の兎』がある、これなどは取材から見ても極めて特色の豐かなものである、沈南蘋にも克明な密畫の兎がある、狩野家の人々の作など恐らく枚擧に遑もなく、土佐派の人々にも少からずある。

近代での名作　近代では雅邦翁に、淡墨の月と兎の高雅なものがあり、紙本で、墨色を見せてゐた、安田靫彦、小林古徑氏にも兎のかうした紙本の作がある、細密な筆を以て兎を描くのは堂本印象氏である、氏の兎を見ると、よくジュラーの素描の兎を思ひ起す、如何にも行屆いたものである、變つた構圖のものでは、十五回の日本美術院展に出た速水御舟氏の『綠芝』を擧げなければならぬ、兎に紫陽花を配したのが先づ異彩を放つ。

帝展では十一回に菊澤武江氏が『みやまの春』と題して兎を描いた、氏の出世作である、古くは、竹內栖鳳氏の『飼はれたる兎と猿』が矢張り忘れ難き印象をとゞめてゐる。

象（ぞう）

象は哺乳動物の中では、最も大きいものゝ一つである、今盛に棲息してゐるのは、印度、パーマ、暹羅邊と、アフリカ一帶である、印度地方の象は牝には牙がないが、アフリカ地方の象は、牝牡共に立派な牙を有し、且つ耳が大きいので、直ぐに區別がつく、東京上野の恩賜動物園の象は、印度產である。

陸棲哺乳動物の大なるもの　象の形態は、今更いふまでもなく、よく知れ渡つてゐるが、皮膚が厚くして他の獸類のやうに毛を生じてゐない、特長のあるのはあの鼻で、基が太く先が細く、自由自在に伸長し、その尖端は感覺が鋭敏で、その上巧みにものを搦め取る、四肢は太くまるで柱のやうな形である、全軀の大きさは、高さが九尺餘に達し、鼻の先から尾の端までは、二丈餘に達する、象牙といふものは門齒のことで、これも大きいのになると三尺餘に及ぶものがある。

印度や暹羅あたりでは、昔からよく飼ひ慣らして、いろ〳〵の勞作に使役し、時に軍用としての訓練もする、併しアフリカ象になると質が甚だ慓悍で、決して印度象のやうに從順でない。

◇

象の壽命　兎に角、陸上に棲息する動物の中では、最も大きなものなので、その壽命も從つて長い、普通

百五十年位で、時に二百年に達するものがある。上野の動物園の象すら、日本に渡來してから、既に五十年の歲月を閱してゐる。

因陀羅と普賢の象　印度では、其の生活上、非常に貴重なもので、その飼育の數の多い少いに依つて財產の程度が知られるといふ、尤もな話である、だから、印度の神話で、殊に重要な役をつとめてゐる、雷神因陀羅は、常に電霆を驅馳し阿修羅と戰ひ、最上の神と崇められてゐるが、この神は象に騎つてゐる、又、普賢菩薩は、菩薩の中最も優れた位置にあり、又常に白象の上にある、丁度、文殊が獅子に騎ると同じやうである、即ち、文殊は智慧を代表するものなるが故に、智力のよく迷を破ること獅子奮迅の如くといふので獅子を乘用とし、普賢は禪定を代表するものなので、定力のよく諸行を攝取すること、まさに白象の柔軟にして物に耐ふるが如くなるやう、白象を用ひてゐるのである、又、一方に普賢は延命の德を備へてゐるのであるから、動物の中で、最も長命な象に騎ることもよく理に合つてゐる。

普賢の名畫　普賢は、斯く菩薩中の首位にあるもので、その威容嚴然たるもの故、よく繪畫に畫かれる、帝室博物館所藏、鎌倉時代の作である普賢菩薩の如き、白象の上に蓮華の座があり、その上に菩薩の座してゐる極めて整うたる圖である、この外、京都眞如堂所藏、傳張思恭筆、妙心寺藏筆者不明の一幅、安樂壽院所藏の幅、因州豐乘寺所藏の如き、皆國寶に指定され更に京都東福寺には傳吳道子といふ名作がある、これは釋迦三尊の中である、著者はなほ、杉浦伯爵家舊藏の雪舟筆、文殊普賢の双幅を擧げる、實に立派なもの

である、構圖構想の共に變つてゐる作としては、昭和三年開かれた唐宋元明名畫展に陳列された、中國曾農髯氏所藏、唐尉遲乙僧筆の『普賢騎象圖』を擧げねばならぬ、此圖は普賢を老子の如き長髯の老翁に描き、西域風の服裝であり珍らしい圖である。

江口の君とその作　此の普賢菩薩から脫化したものに江口の君があり、遊女騎象の姿を描く、江口といふのは、山城の國、神崎川が尼ヶ崎に落つる河口で、西國に向ふ船付場に、往き來ふ客を迎へる遊君である、傳へいふ書寫山の性空上人、普賢を信仰すること厚く、何時か生身の普賢菩薩に見えたいと祈願した、ある夜、讀經に疲れてまどろんでゐると、夢に生身の普賢を見やうとなれば、神崎の遊君を見よと、幷で神崎に赴き、江口の君にあふ、女は鼓を打ち舞を舞ふ、上人その女を禮拜し目を閉づると遊君は宛ら普賢菩薩の姿となつて、六牙の白象に乘り目の前に現ずる、目を開くと忽ち元の遊女となる、上人一禮して立歸らうとすると江口の君はとゞめて、此のこと口外し給うなといふ、これが江口の君の故事である、圓山應擧に名作があり、吳春にもその作があり、浮世繪では勝川春章、五渡亭國貞これを描き歌麿も、『辰巳婦言』の口繪にこれを圖してゐる。

◇

印度に於ける傳說　象が印度に於て、貴重な動物となつてゐることは、普賢の騎乘するといふ一事を以ても知らるゝ處であり、佛典の中には、四牙、六牙の象が傳へられて居り、延いては幾多の傳說となつて殘つてゐる。

その一二を引くと、天竺の或る林に一頭の盲象が仔象と共に棲息してゐた、仔象は每日山林から果實を求めて來ては、母なる盲象を養つてゐた、このこと、何時か國王の耳に入つた、王は直ちに象狩を命じて此の仔象を捕へてしまつた、然るに捕はれたる仔象はその日から食物を食べない、そして悲しむが如き風情である、幷で王は仔象に向つて何故に嘆くかと聞くと、仔象は、盲しひたる母象定めし食を得ずして嘆き悲しんでゐるであらうと。

同じ天竺の話である、ある比丘尼が深山を行くと象に逢つた、恐しいので傍の木に攀ぢ登ると、象はその木の根元を堀り返して木を仆し、落ちた比丘尼を鼻で卷きあげ、その背にのせて山の奧に入り、大きな象の前に伴つて來た、見ると大象は足に踏拔きをして惱んでゐるので、比丘尼に拔いてくれと賴むが如く見える、比丘尼はこれを見、直ちに拔き取つてやると、象は大に喜び再び背にのせて、元の所に送つて來た、そこにはいろ〳〵の財寶があつて、此の比丘尼は一生を安らかに送つたといふ。

廿四孝の大舜と象　支那に象の渡來したのは、非常に古いことである、大舜、性至孝にして親の爲めとて耕作して勞を惜しまず、大象來つてその耕作を助けたといふ物語は、有名な『二十四孝』の最初のものであるが、これを見ても如何に古くから象が傳へられてゐたかを知ることが出來る、『畫譚雜肋』に

象は西天夷にありて、中國には畫像にて見おぼえ、それ故象と呼びたり、唐畫に脚を獅子の如く畫くは

眞象を見ぬ故なり、此方はさきに渡りし眞圖を寫し得たり、又佛書には四牙六牙なるものありといへり。

と記してゐるが、支那にも象の渡つたことは否まれない、その證としては宋の太祖永昌陵の石象や、明になつて成祖長陵や、太祖孝陵などの石獸中に、かなり寫生的な石象のあるのを見ても知られる、奈良正倉院御物の蘭纈屏風に象の模樣あるのを見ても、餘程古くから象は人々に知られてゐたらしい。

◇

日本に渡來した物語　日本に象が始めて渡つて來たのは、應永十五年六月であるといふ、南蠻國から黑象を獻上したのである、この時のことは、『大日本史』に一寸載つてゐる位で、餘りに詳に傳へられてゐない。

徳川時代になつて、享保十三年に象が支那の廣南から渡來した、その船が長崎に入港したのは六月十九日のことである、象は牝牡二頭で、牡は七歳、灰毛、但し爪五つ、前足の方で高さ五尺六寸、頭際から背通り尾まで長さ七尺四寸、牝は四歳で灰毛、爪五つ、前足の方で高さ四尺八寸、頭から背通り尾まで五尺三寸であつた、唐人屋敷で養ふ中、九月十一日牝の方は斃れてしまつた。

翌年三月十四日、牡は十三人の人々に守られて長崎を發し、東上の途に就いた、象使ひ二人がこれに從ふ、一日の行程は漸く五六里で、到る處、珍らしさうに眺める群衆を分けながら、四月二十六日に京都着、二十八日、中御門天皇の叡覽に供した、その時

ときしあらば人の國なるけだものもかく九重に見るぞうれしき

と御製があつた、翌二十九日京都を發し、五月二十五日に江戸に着、八山通りから芝の通りを經て本丸へ、沿道は人の山を築いて、長崎を出發してから、實に七十一日目であつた、將軍家では直ちに目付本多彌八郎以下數人を象係りとし、濱御殿に養ふことゝなり、八代將軍吉宗公の上覽に供した、それから十五年を經て寛保三年四月、中野村の百姓源助彌助の兩人に下渡されたが、三四年にして死んでしまつた、この時は隨分評判になつたもので『象傳來私集譜』だの、『舶來繪象志』などといふ出版物が現はれた、そればかりでなく、象は流行界を風靡して、象の箸が出來る、根付が現はれる、玩具も象のものが大流行であつた。

山王祭の象　その一つとして、日枝神社の祭禮には、麴町から、朝鮮人渡來の行列を作り、大きな象の細工物を引出して往來の人の目をそば立てたことは、『江戸名所圖會』や『東都歳事記』に殘つてゐる。

歌舞伎十八番の象引　又、一方劇の方にも、この流行が現はれて『象引』といふ狂言が出來た、これは二代目市川團十郎が、『暫』の趣向をかへて見せたものでその筋は、鈴鹿の王子と呼ぶ公卿惡が、寶刀詮議の爲め京より下り、山上源内左衞門といふ武士と大象を引合つて力を爭ひ、結局象の腹中から寶刀が現はれ出ると いふことになる、鳥居清信の筆になる漆繪に依ると、鈴鹿の王子は、隈取の工夫で有名な山中平九郎が扮してゐるし、源内左衞門は市川段十郎と記してある、素袍に三桝のついてゐるのも面白い。

飯塚友一郎氏の『歌舞伎細見』に依れば、象引の趣向は、なほ前に遡り、文祿十三年三月江戸山村座の『薄

雪今中將姫』の第一段目で、八劔王子が、唐から到來の大象を引裂くといふ場面があり、次いで之を改作した、同十四年正月中村座の『傾城王昭君』にも象引の趣向が加へられてゐたといふ、大正十二年、平木白星が新しく『象引』を書いて、市川左團治が上演したが、これはまるで筋の違ふものである、かうして『象引』は、錦繪などで殘り、歌舞伎十八番の一にも數へられてゐるのであるが、今では殆んど顧みられない。

崋山の象の寫生　象は、その後になつても渡來したことがある、渡邊崋山の象寫生圖といふものがあつてこれによると文化十年の話で、崋山は態々長崎まで出かけて行つてこれを寫生した、その圖の上に題して曰く

文化癸酉秋八月、蘭舟渡來處之像、牝一疋於長崎寫眞者也

按西書セイロン象尤多シ、能人語ヲ解、重ヲ負ヒ遠キニ致、其產他邦產に勝ル、一牙ノ重サ或ハ二百餘斤ト云

この象のことは、あまり詳しく傳へられてゐないやうである。

◇

一蝶の群盲圖　英一蝶の筆に、盲人象を見るの圖といふのがある、盲人數人に象を見せた處、太い足を撫でたものは、象は柔い柱のやうなものだといひ、腹を撫で廻したものは、壁のやうだといひ、鼻を捉へたものは、伸縮する帶のやうだといひ、尾に觸れたものは鞭のやうなものだといふ、これは有名な話で、トルストイの書いた寓話集の中にもあれば、日本にも古く傳へられ、落語の枕にも使はれてゐる、この寓話は恐らく佛典から出たものであらうが、象といふ動物の偉大さがよく解る面白い話である。

ルコンドリールの象の歌　泰西の詩の中に、象を歌つた傑作は、佛のルコンドリールの『象の歌』であらう、果しも知らぬ大沙漠の中を、一群の象の、老いたるを先達として悠々として進みゆく、その雄大さ莊嚴さ、犇々として身に迫るものがある、上田敏の『海潮音』からその一節を引く。

一天霽れてそが下にかゝる炎の野はあれど
物憐として寂寥のきはみを盡すをりしもあれ
皺だむ象の一群よ、太しき脚の練歩に
うまれの里の野を捨てゝ大沙原を横に行く。

地平のあたり一團の褐色なして列なりて
みれば砂塵を蹴立てゝつ路無き原を直道に
ゆくてのさきの障碍をもどかしとてや力足
蹈鞴しこふむ勢ひに遠の砂山崩れたり。

導にたてる年嵩のてだれの象の全身は
『時』が嚙みてし刻みてし老樹の幹のごとひわれ
巨巖の如き大頭脊骨の弓の太しきも
何の苦も無く自づから滑らかにこそ動くなれ。

歩遲むることもなく、急ぎもせずに悠然と
塵にまみれし群象をめあての國に導けば
沙の畦くろ穴に穿ち續いて歩むともがらは
雲突く修驗山伏か、先達の蹤蹈でゆく。

耳は扇とかざしたり鼻は象牙に介みたり
半眼にして辿りゆくその胴腹の波だちに
息のほてりや汗のほけ烟となつて散亂し
幾千萬の昆蟲がうなりて集ふ餌食かな。

失名

饑渴の攻や貪婪の羽蟲の群もなにかあらむ
黑皺皮の滿身の膚をこがす炎暑をや
かの故里をかしま立ちひとへに夢む道遠き
眼路のあなたに生ひ茂ける無花果の森、象の邦。

張以寧

何といふ措辭の莊嚴雄大さであらう。
支那の文學には餘り見ない、時に
脫牙如削木、運鼻似垂雲
と洒落れたり、又、
雪白双牙雲滿身、日南萬里貢來馴
といふたりしてゐるが、大したものではなく、日本の文學では一層貧弱で、『拾玉集』に
如法鐘かく道場の曉に白象天を見ぬはもぬかは
といふむつかしい歌が・たゞ一首收められてゐる。

慈圓法師

◇

若冲の象屏風　繪畫に現はれた象では、前に記した普賢菩薩のやうなもの、外、獨立して描かれたものは

餘り多くない、その中で、神戸の川崎家の舊藏であつた象と鯨の六曲一双は珍らしいものである、筆者は伊藤若冲で、その構圖の大膽奇拔なる、全く稀に見るところのものであつた、島津公爵家には、沈南蘋の『大平有象』の大幅があつた、亦珍らしいもの〻中に屬する、それから京都相國寺の原在中筆、杉戸の象は、筆勢勇勁にしてよくその態を現はしたもの、江戸城の本丸には狩野洞雲の筆になる象の圖があつたが、炎上の際燒けてしまつたと、野田九浦氏の『狩野探幽』に記されてゐる。

繪畫と彫刻の象　珍らしい作といへば、昭和三年の唐宋元明名畫展に、狄景明氏が出品した『文殊洗象圖』の如きも記憶に殘る、筆者は不明であつた、二十四孝の大舜と象を描いたものには、松浦伯爵家舊藏に狩野探幽の作があり、橋本雅邦にもあつて、その集に收められてゐる。

象の渡來に關するものでは、茲に擧げた渡邊崋山の寫生畫を唯一に數ふべく、永見德太郎氏編の『長崎版畫集』には、『唐人之圖』『和蘭陀人巡見之圖』等があつて、何れも象が描かれてゐる。

近頃では川口吳川氏が、帝展の七回に出品した『印度持來象圖』と、十九回の二科會に出た鈴木信太郎氏の『象を見物』が面白かつた、宗教畫には、荒井寛方氏が、第七回の院展に出品した『摩耶夫人の靈夢』の白象など、構圖が面白いので眼に殘つてゐる。

彫刻では、日光陽明門の前、神庫の外長押上、破風下に黑白の象が彩色で現はしてある、大きさ五尺ばかりで、これは探幽法印の下繪であるといふ。

それから變つた方面では、八重山群島の八重山權現向拜細部の突出しが、象になつてゐるのが面白い。

◇

傳說に虎と象と鬪ふ、虎竹林に入る、竹は象牙の大敵である、象の牙竹に觸るれば必らず碎くと、虎に竹を添ふ或は此の傳說に基くか、我國でも昔から象牙の箸を竹に添ふるな、牙箸に龜裂が出來るといふ、象牙の柄あるステツキなど心して竹の杖と共に置くべからず。

——遲塚麗水——浮碧樓雜記

駱駝（らくだ）

沙漠の舟　茫々と果しもないやうな沙漠の旅、それは日本內地などでは想像にもつかぬ困難なものであるといふ、併しかうした難儀な旅行も、駱駝といふ動物があればこそ出來るので、沙漠に近い國々では、牛馬以上に此の駱駝が大切である。自然はまたよくしたもので、此の駱駝の體質や構造、總てが沙漠の生活に適應するやうになつてゐるから妙である。

特長は肉瘤　先づその姿を見ると、第一に目につくのは背の山のやうな肉瘤である、この肉瘤の中には脂肪を貯へ、胃には亦多くの水泡があつて多量の水を入れて置くことが出來る、且、蹠（あしうら）には厚い柔かな肉質部

があつて、これが沙漠の上を歩くに適するやうに出來てゐるし、體全體に毛が多く、色は灰褐色である、背の肉瘤は、一つの種類もあれば、二つの種類もある、二つの種類は雙峰駝というて、亞細亞洲の中部に多く、一つの種類は單峰駝というて小亞細亞から埃及地方に居る、又南アメリカには此の肉瘤の全然ない一種の駱駝があるといふ。

その原種　トムソンが、その『科學大系』に記す所を見ると、此の二種の駱駝の中、アラビヤ駱駝、即ち單峰駝の方は、ずつと昔に野生のものが絶滅してしまつて、今は全く家畜としてのものばかりが殘つてゐると、從つて、單峰駝の先祖に就いては知る由もない。

双峰のバクトリアン種の方は、まだ少しばかり野生のものがトルキスタンの奥の方に見出されるといはれてゐる、かうした沙漠に近い國の人々が、その地勢に順應してゐる駱駝を飼ひ馴らして、これを『沙漠の舟』といふほど有要な動物にしてしまつたのは、全く今から想像だにつかぬほど古いことで、恐らく、馬や牛や、犬や猫が、野生から家畜となつたより古い年代を閲してゐるのであらう。

◇

駱駝の古い記錄　寺島良安の『和漢三才圖會』を見ると、『本草綱目』を引いて

駱駝、西北蕃界有之、有野駝家駝(人家畜養者名家駝)其頭似羊長、頂垂耳脚有三節、背有兩肉峰、如鞍形有蒼褐黄紫數色、其聲曰圖、其食亦齡、其性耐寒惡熱、故夏至退毛、至盡毛可爲氈、其糞烟直上如狼烟、其力能負重至千斤、日行二三百里、又能知泉源水脈風候、風伏流人所不知、駝知其泉脈以足跑地、掘之必有水。

流沙夏多熱風、行旅遇之卽死、風將至駝必聚鳴埋口鼻於抄中、人以爲驗也、其臥而腹不著地屈、是露明者、名明駝、最能行達。

大月氏國有一封駝、背上有一峰隆起若封土、于闐國有風脚駝、其疾如風日行千里。

と記してゐる、この時分としては、實によく調べてある、『有野駝有家駝』は少しく當を失してゐるが、駱駝が沙漠の旅行をして、その水脈を知つてゐることなど、隊商等の熟知する處、時に渴に苦しみ、駱駝の腹を割き、胃中の水を飲んで辛くも生を得た物語等も傳へられてゐる。

◇

奈良朝時代に舶來　駱駝は日本では比較的古くから知られてゐる、歴史を繰つて見ると、推古天皇の七年秋九月に、百濟から駱駝を獻じ來つたことなど最も古いものであらう、越えて同じ二十六年戊寅秋八月癸酉の朔、高麗貢調し、隋の俘及び駱駝器物を獻ずといふことが『大日本史』に記され、更に齋明天皇の三年、西海使小華下阿曇連頰垂、小山下津臣傴僂(つくま)、百濟より歸りて駱駝一、驢二を獻ずとある。

これらの駱駝は、その後宮中に於て飼はれたが、多少繁殖して後世まで遺つたか、但しは風土に合はずしてそのまゝ斃れてしまつたか、これに就いては、更に記す處がないやうである。

然しながら、駱駝が斯く、奈良朝時代に於て既に日本に渡來してゐることを考へると、支那に於て如何に重寶な動物となつてゐたか、或は、重要な點に於て牛馬以上であつたであらう、更に想像を廻らせば、支那中部に輸入せられたる西域の文明は、悉く駱駝の背を藉りて來たのではなからうか。

俑の駱駝　果然、支那に於いても駱駝は貴重なる動物として生活上重要なる位置を保つてゐたのである、それは今日俑などに駱駝が多くあり、それが各地から發掘せられるのを見ても知ることが出來る、上野の帝室博物館には、三彩窯の美しい駱駝があり、大倉男爵家には、駱駝の俑の素晴しい名作が祕藏されてゐる。

◇

文政時代に駱駝復來る　日本へは、奈良朝時代に屢々渡來した外、その後永らく中絶されてゐたが、文政年間に久し振りで渡來した、永見德太郎氏編の『續長崎版畫集』を見ると、文錦堂の版で、『阿蘭陀持渡駱駝二疋』といふのがあつて、その解說に

文政四年辛巳七月上旬、阿蘭陀人持渡、駱駝二疋牡四歳牝五歳、凡そ長さ一丈五尺、高さ九尺、此の駱駝は異國にて田家に飼ひ置き耕作の助とす、或は遠路巡覽の節に車を曳き一日百里の道もつかれず、又ものを負へば、おのが足を三つに折りはじめ膝を折り自由に荷をつけさせて、千餘斤の重りより立にいと安し、牝牡むつまじきものにて柔和なるけだものなり

とあるし、睦鐘成の『雲錦隨筆』には、此の駱駝が、大阪で見世物となつて、非常な評判となつたことを圖入で紹介してゐる、說明に依ると

文化四年辛巳六月、オランダより渡來、五年浪花新地にてみせ物とす、牡四歳牝五歳、高さ九尺長さ二間の大さなり

というてゐる、圖に依ると、その二頭は何れも單峰駝で、四人の阿蘭陀人が、チヤルメラを吹いたり、鐘を鳴らしたりして人を集めてゐる、そしてその贊に

首は鶴脊中は龜に似たりけり千歳らくだ萬歳らくだ

と狂歌一首を記し、更に

鳴駝生二西域一、衝尾足連々、漢驛凌雲去、胡兒踏草牽、當時識風候、過磧辨二沙泉一、老覺肉峯側、猶蒙二錦帕鮮一。

といふ宋の梅堯臣之詩を題してゐる。

『甲子夜話』の手記　この駱駝渡來に就いては、松浦靜山公の『甲子夜話』にもいろ〳〵記してゐる、八卷には

去年(文政六年)蘭船駱駝をのせて長崎に來る、夫より此獸東都に來るべしやなど人々云しが遂に來らず、先年某侯の邸に集合せしとき、畫工某その圖を予に示す今舊紙より見出したれば左に記す、圖に小記を添へて曰く、享和三癸亥七月、長崎沖へ渡來のアメリカ人十二人、ジヤワ人九十四人乘組の船積のみ

候、馬の圖なり、前足は三節のよし、爪までも毛の內になり、高さ九尺長さ三間といふ、その船交易を請たるが、禁制の國なればとて允されずして還されけり、正しく駱駝なるべし、此度にて再度の渡來なり。

それから、第九卷には

この三月兩國橋を渡らんとせし時、路傍に見せもの有り、看板を出す、駱駝の貌なり、又板刻して其狀を刷印して賣る、曰、亜剌比亜國中墨加之產にして丈九尺五寸、長さ一丈五尺、足三つに折るゝ、予乃ち人をもて問はしむるに、答ふ、これは去年長崎に渡來の駱駝の體にして眞物はやがて御當地に來るなりと言へたり、因て明る日人を遣し視せしむるに作り物にて有けるが、その狀を圖して歸る、圖を見るに恐く眞を模したるものならじ。

これによると、駱駝は大阪までは見世物として來たが、江戸へは來らず、長崎邊で賣り出した版畫と何等かの模造剝製の類が、江戸へ來たものと思はれる。

それから同書にはなほ、十七卷に、間宮筑前守が駱駝に就いての物語をも記してゐる。

頃日間宮筑前守(長崎奉行近頃御作事奉行に轉ず)が咄なりと聞く、駝は惡氣を能く知るものなりとぞ、如何なる烈風にも向ひて厭はず、微風にても邪氣ある時は四脚を屈し地に伏し鼻を土に押つけ、其風の吹き通りたる後起上り、元の如く歩くといふ、都て邪氣は鼻より入ることを防ぐことを知りしは靈妙なる獸なり、されば駝は人家に畜置きて天地間外邪の惡氣を人々能く知りたきものなり、間宮は近頃この獸の長崎に舶來せし故見てこれを云ふなり。

駱駝と藝術　駱駝が藝術に現はれたものは、日本では殆んどないといふてもよい位である、帝展第七回に出た川崎小虎氏の『西天求法』は、『西域記』からの取材で、玄奘三藏が西域に旅した所を圖したものであつたが、これには水墨で駱駝が手際よく描かれてゐた。

◇

探檢隊は眼前に深紅の太陽を掘り出した
新しい哉分桃斷袖——馬が歌つた
馬はその日の方向であつた。

探檢隊は背中に又黃銅の太陽を埋めた
處女帶を截るの新月——駱駝が又歌つた
駱駝はその夜の位置であつた。

◇

——佐藤惣之助——青海省——

駝蹄の羹　支那に『駝蹄の羹』の語がある、杜甫の詩にも『勸客駝蹄羹、霜橙厭香橘』とあつて、珍味中の珍味としてあり、陳思王は嘗てこれを製し、一甌に千金を費したことがある。

獅子（しし）

百獸王獅子　獅子は百獸の王というて、昔から藝術上には深い交渉がある、そしてこの動物を表現する形式なども、國々に依つて異り、時代によつて變化し、これを探究すればする程、興味が湧いて來る、先づ動物學の上から、一わたりこれを記して、その本題に入ることゝしやう。

形態と習性と　その形態、性質等は細かく記せば際限がないが、『日本動物圖鑑』の記す所が、簡にして要を得てゐる、曰く

しゝ、ねこ（猫）科

體の形態構造ねこと大差なけれど、他のねこ屬のものに比して胴稍〻短かく、腹部締り、全身には短かく滑かなる毛生じ、顏は廣く眼は稍〻小さく、瞳孔は圓形なり、長き尾の先端には叢毛あり、その中に隱れて一個の角質の爪狀物あり、成長せる牡獸には、頸部より前胸部にかけて長き鬣あり、體色は全身殆んど一樣にして淡褐色を普通とせど、甚だ黑味を帶びたるもの、或は殆んど白色に近きものなどあり、

仔獸には暗褐色の斑點あり、牝獸にも、時にこれを見る、老大なる牡獸にては、吻端より、尾端までの長さ殆んど三米に達し、尾はその中、約一米を占む、牝獸は稍〻小なり、有史以前には、南部歐羅巴より、亞弗利加、西南亞細亞に廣く分布し、印度には近年まで棲息したれども現今にては殆んど亞弗利加に限られ、亞剌比亞、ペルシヤ等には特殊の地方に纔かに殘存せるのみ。

最近阿弗利加地方に於ける、猛獸狩實況の映畫などが盛に製作され、それに依つて、獅子の棲息狀態なども略知られるやうになつたが、この動物は、日中は大抵岩窟などに潛み夜間に出て食を探す、その狙ふ處は多く鹿や羊のやうな獸類である、その體色は棲息する土地の色に似てゐるので、矢張一種の保護色となつてゐる、その力の强いことは、恐らくこの種の猛獸中第一であらう、先づ他の獸類を襲擊しやうとすると、一旦地に伏してよく狙ひ、猛然として飛びつき一擊にして仆してしまふ、鹿や羊などは、前脚で一つ擊たれゝばそのまゝ斃れるといふ、牛のやうな少し大きなものになると、先づ頭を狙つて嚙みつき頭蓋骨を碎いてしまふ、そしてこれを何の苦もなくその洞窟中に運んでしまふ、その吼哮する聲は、甚だ物凄く、これを聞くと百獸悉く、慴伏するといふが、それは多く食に飽きた時に發するのである、春先交尾するが、牝の懷姙期は百八日で、二頭乃至三頭の仔を產む、仔獅子は脊と尾とに黑い線があり、頭と足とに黑い斑點がある。

◇

獅子の母性愛　この仔獅子が、五年經つと立派に成長して牡は領毛が生えて來て、そろ〳〵交尾するやう

になる、それまでに親獅子は、いろ〳〵と仔獅子を教育するのである、その前脚で仔獅子の體を動かして力を試したり、歩き方を教へたり、食物なども親獅子が心盡しを見せるといふ、昔は獅子は仔を生み三日にして千仞の谷に落すといはれてゐる、『太平記』の楠公訣別の所にも

正成是を最期の合戰と思ひければ、嫡子正行が今年十一歳にて供したりけるを、思ふようありとて、櫻井の宿より河内へ返し遣はすとて、庭訓を殘しけるは、獅子子を産みて三日を經る時、數千丈の石壁より是を擲つ、其子獅子の機分あれば教へざるに中より跳返りて死することを得ずといへり、況や汝已に十歳に餘りぬ、一言耳に留らば、我が教誡に違ふ事なかれ

とある、長唄の『連獅子』などにも、此のことが節面白くつけられてゐる、併しこれは支那あたりでの拵らへ事で、事實ではないが、親獅子が、仔獅子を千仞の谷に擲つといふ姿が面白いので、これはよく畫かれる、殊に狩野派の作に多く、常信にもあれば安信にも見たことがあり、英一蝶またこれを畫き、近世の人では橋本雅邦にその大作がある、これは馬島杏雨翁の舊藏であつた。

◇

埃及のスフヰンクス　獅子が古く藝術の上に殘つてゐるのでは、矢張埃及から小亞細亞にかけてゞある、彼のギゼーの大スフヰンクスは、實に獅子に關する藝術の最も偉大なもので、且つ古く、實に紀元前二千九百年頃の作といはれてゐる、それから、ぐつと降つて、埃及二十王朝時代のラムセス六世とリビヤ人の石彫

群像を見ると、その下方には、立派に寫生風の獅子が彫られてゐる、大英博物館藏の埃及の古代戲畫といふものを見ると、まるで日本に於ける高山寺の『動物戲畫繪卷』でも見るやうに、種々の動物が戲畫の中に現はれてゐる、中にも、獅子は大層重要な役割を引受けて、中々面白いものである。

コンスタンチノーブル博物館に襲藏されてある、ビツテイト、獅子の石彫や、柱臺石彫はアツシリア藝術として有名なもので、前者は顔、首、姿態すべて寫生風であるが、唯全身には象形文字が一面に刻されてゐて、まだ何人にも讀まれてゐないといふ、後者はスフヰンクス風の人頭獅子で、その顔面の表情が中々に面白い、これは今から三千年ほど前の製作といはれてゐる。

アツシリア藝術と獅子　この外にアツシリア藝術としては、ロンドンの大英博物館に、有名なる『瀕死の獅子』『傷ける獅子』の浮彫がある、これらはよくその姿態を寫して眞に迫るものがあり、アツシリアより前ヒツチト文化を代表するボガツケウイの獅子門の如き、更にペルシヤのスサ王宮内壁面裝飾に現はれた獅子などは著しく寫生風になつてゐる。

免も角も、かうして獅子が、古代にあつていろ〳〵の藝術に現はれてゐることは、その百獸王としての威嚴が、當時の人々の崇拜の的となつてゐたからであらう。

獅子はかく、單に當時の人々の崇拜の的となつてゐたばかりでなく、愛玩動物として飼はれた事もある、古き妖婦クレオパトラの宮殿には獅子の飼はれてゐるところが描かれてゐる。

ネロと獅子　又時には刑罰に獅子やその他の猛獸類を使つたこともある、その代表的なのが、羅馬の暴帝ネロで、その飽くなき兇暴性から、無辜の基督教徒を殺戮する凄慘なる光景は、シエンキヴイツチの『クオヴデイス』の中に、精細に描き出され、血に餓ゑた獅子が、矢庭に子を抱いた信徒の一人に跳懸り、一擊にしてこれを餌食にしてしまふ凄慘さは、殆んど卒讀に堪へざらしめる。

◇

馬可の獅子像　西洋に於ける繪畫方面の獅子を見る、その中で、昔から著しいのは、『馬可の獅子像』である、これは基督の十二使徒の中、馬可を畫く時には、いつも傍に獅子を畫く習慣をいうたものである、それは、馬可が四福音を書くに當り、先づ基督に洗禮を與へた、バプテスマのヨハネから書き起してゐるのに依る、即ちバプテスマのヨハネは、幼い時から沙漠に入つて苦行を重ねた人なので、沙漠に住する獅子を畫いてこれを象徴したわけである。

ドラクロアの獅子　動物畫としてこれを畫く時、よくその眞を摑んでゐるのはドラクロアである、『素描大成花鳥畫卷』に收めてある豹との嚙合ひの作の如き、有名な作丈けに隨分引つけられる。

スワンにも複雜なる姿態を寫した作があり動物畫家として有名な、ロオザ・ボノオアルは閨秀の身でありながら、動物畫をよくし、フオンテヌブロウの森林中に大きなアトリエを建て、この森林を一つの動物園として、種々な野生の獸類から、手飼のものに至るまで得るに從つて畫き、見るに應じてこれを畫囊中のもの

としたので　その作中には、獅子の作の如きも相應に數があるとのことで、著者も一二の複製でこれを知つたわけである。

◇

佛教と獅子　東洋にあつても、印度や波斯では、矢張り昔は獅子が棲息してゐたことゝて、自然これを畏れ崇拜するやうになり、獅子座とか、獅子吼菩薩といふやうなものまで現はれて來た。

獅子座といふのは、佛の坐する處で、佛は人中の獅子王なるが故に、その座所を獅子座といふわけである、『法華經』に

於菩提樹下敷獅子座

とあるのはそれで、又『大知度論』に、

號獅子座非實也、佛爲人中獅子、凡佛所座、若牀若地皆獅子座也

とある、別に獅子床ともいふ、後世に、高僧の座に獅子を彫刻するのも、これから來てゐるのだといふ、獅子吼菩薩は、奈良唐招提寺にその像がある。

文殊と獅子　佛像のことを記せば、文殊菩薩は常に獅子に騎ると稱せられ、よくこれが畫かれる、文殊菩薩は文殊師利といひ、又、妙吉祥、妙德ともいひ、華嚴經に於ける三聖の一で、諸佛發心の師、そして普賢菩薩が慈悲門を司るに對して、常に智慧の門を司る、三人寄れば文殊の智慧といふやうな語諺はこれから出

てゐる、前に記したやうに、常に獅子に騎り、その淨土を淸凉五台山に置いた、その形相は、蓮花の中に住して、その色黃金の如く、頭に五髻を結び、右手に智慧の利劍を執り、左手に靑蓮の花を持つ、これが普通であるが、畫く人に依つていろ〳〵と形も變つてゐて、一樣ならず、その駕せる獅子にしても、立てるあり、伏せるあり、蹲踞るあり、走れるあり、雲中のものあり、渡海のものあり、その意匠を探究しても趣味盡くる所を知らぬ。

名畫の文殊　古來名畫として世に傳へらるゝもの、京都上品蓮台寺藏の一點、傳巨勢弘高山城寺所藏、奈良西大寺所藏筆者不明の一點、京都南禪寺所藏傳李龍眠の一點の如きは皆國寶に指定されてゐる、この外には京都東福寺所藏傳吳道子の一點、山城高台院所藏傳珍海、京都鹿苑院所藏の兆殿司筆、同大法院所藏の雪村筆、近衞公爵家所藏探幽筆、松浦伯爵家所藏僧豪信筆、同家舊藏の常信筆中文殊、左右孔雀金雞牡丹の三幅對、これらが記憶に殘る、雪舟の描く處の文殊の獅子は、所謂唐獅子風から、餘程寫生風に近づいてゐるが、明治になつて、春草や、觀山は、全く唐獅子から脫して、ライオンを描いてゐるのが注目される。

稚兒文殊　なほ此の文殊菩薩を童形に畫いたものがある、卽ち稚兒文殊と稱するもので、佛在世の折、梵德婆羅門のもとにあつた時の姿で、傳敎大師が將來したものといふ、それを初め土佐派の人々が純日本風の稚兒姿にして畫いた、童形可憐の稚兒文殊と、その座乘の獅子とが好個の對照を見せてゐるのである、古くは藤原信實にその作あり、土佐光茂筆にも名作あり、圓山派も描き、狩野派の人々もこれを圖す、明治の人では、雅邦、觀山、春草にその作あり、觀山、春草は、矢張ライオンを稚兒文殊に配した新しい試みを見せてゐる。

◇

謠曲『石橋』「如何に是なる山人に尋ぬべき事の候ふ、「何事を御尋ね候ふぞ、「是なるは承り及びたる石橋にて候ふか、「さん候ふ、是こそ石橋にて候ふ、向ひは文殊の淨土淸凉山よく〳〵御拜み候へ、「扨は石橋にて候ひけるぞや、さあらば身命の佛力にまかせて、此橋を渡らばやと思ひ候ふ、「暫く候ふ、其上名を得給ひし高僧達も、難行苦行捨身の行にて、こゝにて月日を送り給ひてこそ、橋をば渡り給ひしに、獅子は小蟲を食はんとても、先づ勢をなすとこそ聞け、我法力のあればとて、行く事難き石の橋を、たやすく思ひ渡らんとや、あら危しの御事や、「謂(いはれ)を聞けば有り難やたゞ世の常の行人は、左右なう渡らぬ橋よのう、「御覽候へ此の瀧波の雲より落ちて數千丈、瀧壺までは霧深うして、身の毛もよだつ谷深み、巖峨々たる岩石に、「わづかにかゝる石の橋、「苔は滑りて足もたまらず、渡れば目もくれ、「心もはや、うはの空なる石の橋、まづ御覽ぜよ橋もとに歩み望めば此橋の、面は尺にも足らずして、下は泥梨も白波の、虛空を渡る如くなり。

これは謠曲『石橋』の一節である、『石橋』は獅子に深い緣があるので、これを基礎としていろ〳〵の曲が生れてゐるほどである。

石橋は支那の衡州天台山にある、文殊菩薩の淨土で有名な靈境、その橋は自然の岩石にして廣さ尺に滿たず、長さ數歩、橋上苔滑かにして兩岸は數千仞の斷崖であり、このあたりに獅子住すと傳へらる、天台大師が始めて此の山に登つた時は、こゝで一宿し羅漢に會つたといふ、謠曲の『石橋』は寂昭大師が入唐して此の地に至り、この橋を渡らうとして獅子舞の奇特に會したことを綴つたもので、能では、後シテが此の獅子で、赤頭と白頭とあつて舞ひ狂ふ、結局が有名な

獅子團亂旋の舞樂のみぎり、牡丹の花房にほひ滿ち滿ち、たいきんりきんの獅子頭、うてやはやせや牡丹芳、牡丹芳、黃金の蕋顯はれて、花にたはむれ枝に臥しまろび、實にも上なき獅子王の勢ひ、なびかぬ草木もなき時なれや、萬歲千秋と舞ひをさめて獅子の座にこそ直りけれ。

である。この舞のところは、繪にもよく描かれるが、最近では、日本美術院第十六回展に橋本永邦氏が、六曲一双の大作を出品した。

◇

獅子舞と歌曲の獅子　この獅子、團亂旋は、共に舞樂の名で、獅子頭をつけて舞ふもの、こゝにまた獅子舞といふものが起つた、その初めは『陳氏樂書』に

唐太平樂、謂之五方獅子舞

とあるのがそれであらう、後になつて田樂や神事にも用ゐられ、今日でも祭禮に獅子頭を飾り、正月には獅子舞が家々に舞込む風が殘つてゐる。

かくして獅子はだん〳〵と、その領域を擴めて、此の石橋や獅子舞に緣のある歌曲や舞踊は、それからそれへと作られた、今、坊間に殘つてゐるものを擧げても、琴唄に『浪花獅子』『都獅子』『吾妻獅子』『八千代獅子』『有馬獅子』『吉野獅子』『薩摩獅子』『萬歲獅子』『越後獅子』がある、河東節には『神樂獅子』、荻江節には『童獅子』、常磐津には『角兵衞獅子』『勢獅子』、富本節には『鞍馬獅子』、長唄に『今樣石橋』『新石橋』『又童獅子』『連獅子』『扇獅子』『俄獅子』『英執着獅子』等がある、舞踊として瀨川菊之丞は『枕獅子』『相生獅子』に好評を博して家の藝とし、富十郎は『執着獅子』、訥升は『連獅子』をそれ〴〵に十八番とし、九世團十郎は福地櫻痴居士作の『鏡獅子』を『新歌舞伎十八番』に加へた、今の六世菊五郎が之を得意とする。

◇

謠歌の獅子　文學の方面を見る、兎にも角にも百獸王として、その威を振ふ獅子のことであるから、これが文學方面に現はれることも少からずありさうに思はれるが、唯斷片的のものゝみで纏つたものとしては極めて少い、中で永嘉大師の『證道歌』に

旃檀林無雜樹、鬱密深沈獅子住、境靜林間獨自遊、走獸飛禽皆遠去、獅子兒衆隨後、三歲便能大哮吼、若是于逐法王、百千妖怪虛開口。

とあるのは、獅子の威をよく叙してゐる。

霜牙輝陛戟、金毛颯庭茵

も立派な形容であり、夏吉は

金眸玉爪目照星、群獸聞知盡駭驚。

というてゐるが、これも素晴しい、俳句に

獅子の子は投げて辷らぬ氷哉　　貞佐

の一句がある、氷の句ではあるが、獅子の子落しに結びつけた點に興味がある。

和歌などには、殆んど見ることが出來ない、唯一首、慈圓の歌に

位山浮世にこそは下るとも獅子の座にのる身とはなりなん　　拾玉集

といふのがある、獅子を詠んだのでなく、獅子の座に上りたいといふのであるが、それにしても珍らしい。

新しい詩の中には、與謝野寛氏に『獅子つかひ』の小曲がある。

獅子つかひ

雄の獅子は眠りゐぬ

このひまに讀む、文一つ。

雄の獅子は寢返りぬ、

猶一つ讀む、別の文

雄の獅子は吼え出でぬ。

と、面白い見つけどころである、川路柳虹氏の『動物園』の中にも、獅子の一編がある。

獅子

暴王よ
おまへは今眠る
『怒』がおまへに與へられた
唯一の寶か。
慓悍なそのたてがみが
熱砂の中を驅けめぐり
球のやうな前足が
なにものをも摑むのは
暴力の是認をば
神は人に示すのか
しかし暴王よ、——
おまへは今眠る

眠つたおまへの前には
虹一匹すら安全だ。

なほ薄田泣菫氏の詩集『行く春』には『石彫獅子の賦』がある。

◇

獅子と傳說　獅子には昔からいろ〳〵の傳說がある、一つ二つを引く。

天竺のある國王、鹿狩を好み、一日娘を伴つて狩に出た、だん〳〵と奥深く進んで行くと、そこには獅子の棲む岩窟があつて、獅子は俄かに現はれた人の群れに驚き且つ怒り、頻りに哮吼して迫つて來た、王をはじめ人々驚き怖れ、皆散々に逃げてしまつたが、娘は一人殘されて怖れ戰いてゐると　獅子は娘を岩窟に伴ひ更に危害を加へる樣子もなく却つて娘に媚びるが如き風を見せた、娘も遂に僧からず思ふやうになり、遂に同棲して男子を生むに至つた、一方娘の母は、その行方を尋ね煩ひ、何とかして獅子の處から娘を奪ひ返さうと、明暮に心を碎いた、そして從者を遣はし、獅子の居らぬ間に娘とその子を奪ひ去つた、獅子窟に歸つて之を知り大に嘆き且つ怒り、忽ち王の城下に現はれて暴れ狂つた、國王大に怖れ、誰か獅子を退治するものはないか、首尾よく討取つたものには此の國の半ばを與へようと布令を出した、國々からはいろ〳〵の勇士が現はれたが、一人として獅子に双向ひが出來なかつた、そして最後に獅子を討つたのは、その獅子と娘との間に出來た一子だつた。

此の傳說は、『今昔物語』の載するところ、同書には、なほいま一つ獅子の俠氣を物語つた口碑を載せてゐる。

天竺のある山に二子を持つた親猿が居た、子の餌を探す爲めに外へ出なければならぬので、二子を親しい間柄の獅子に托した、獅子はこれを引受けて保護する中、眠くなつたので、暫くの間眠りかけた、するとその隙に乘じて一羽の大鷲が現はれて、矢庭に二匹の子猿を引攫み、虚空遥かに飛び去つた、獅子は目覺めて大に驚き、鷲に對つて曰ふ、預かつた二匹の子猿を返せ、さうすれば私の腿の肉を與へようと、遂に自からの肉を割いて鷲に與へ、二匹の子猿を取返した。

この物語は如何にも美しい話で、その出所は佛典からであらう、『イソップ物語』には、これに類する、報恩美談を載せてゐる。

昔ローマにアンドロクルスといふ奴隷があつた、主人の虐待に堪へず、逃げ出して山林に匿れた、するとその近くに一頭の獅子が居て、何か悲しい叫びをして訴へるやうである、アンドロクルスは恐る〳〵獅子に近くと、獅子は足の棘を見せて、これを拔いてくれと賴むやうである、アンドロクルスは、これを察して拔いてやると、獅子は喜んでそのまゝ林中深く匿れてしまつた、その後、アンドロクルスはまた捕はれてしまつた、然も主人の許を逃げ出したといふので、獅子の檻に入れられた、アンドロクルスも最早これまでと觀念して冥目してゐると、獅子は近づいて來て、耳を垂れ、尾を動かし、その手や足

を甜めて媚ぶるが如き姿を呈する、不審に思つてよく見ると、それは前に刺を拔いてやつた獅子であつた、王はこの有樣を見て不審に思ひ、アンドロクルスにそのわけを尋ねた、アンドロクルスは林の中で、足の棘をぬいてやつた一伍四什を語つた、王は深くこれに感じ、見物の群衆も、非常な感激を以て此の光景を見た、そして叫んだ、『奴隷を赦せ、獅子も放て―』と、やがてアンドロクルスは獅子と共に解放されて自由の身となつた。

イソップ物語には、この物語の外にまだ二十ほどの寓話が收められてゐる、一つ〳〵に何等かの意味を有してゐるのであるが、その大部分は百獸王の威を以て、他の狡猾な狐や狼の野心や慾望を取挫ぢくといふ筋のものである。

◇

寫生風の獅子と唐獅子　藝術方面から獅子を見ると、極めて興味の深いものがある、それは泰西藝術の獅子が、純寫生風であるのに、東洋藝術に現はれる獅子が、所謂唐獅子といふ獨特の型式を生み出してゐる一事を以てしても知られる。

元來此の唐獅子といふものは、東洋人が想像で作りあげた動物のやうにも思へるが、決してさうでなく、元は中央亞細亞から獅子が渡來したのを見、これを寫生したのであつたが、だん〳〵と時代の移るにつれてその寫生風の個所がなくなり、想像を加へた部分が多くなり、今のやうな鼻の大きい、額の廣い、そして領

毛や尾を螺旋形にした、一種の型を生み出すに至つたのである。

支那に獅子の渡來した始め　然らば、支那に獅子が渡來したのは何時ごろであるか、關野貞博士の說に依ると、漢の章帝の時、はじめて波斯から獅子を獻じたといふ、だから極く古い支那の獅子を見れば、やゝペルシヤ式の寫生風のものであつたらしい、曾て同博士が故大倉喜八郎男の依囑に依り、支那から將來された、傳銅雀台石刻の獅子の如きは、其形が如何にも寫生風で、これを後代の石獸中の獅子などに比較すると極めて面白い、そして、後に唐獅子といふ一つの型を生み出した徑路まで、はつきりと判るやうな氣がする。

純寫生風の獅子畫　繪畫の方で、純寫生風の獅子を見たのは、昭和六年の三月上野の美術館に開かれた朝鮮美術展覽會に、金瓚永氏が出品した無欵の獅子である、これは黑地の絖に金泥を以て描いたもので、別の絹地に、肅宗王が

高山深谷樹冥々、哮吼磨牙向日行、自矜威猛無當對、百獸從風太守驚。

と賛をしてゐるが、この賛と繪とは全然時代の違ふもので、繪の方は、更に古く六七百年前のものではないかといはれてゐる、して見ると、東洋でライオンをそのまゝ描いた作としては、此の圖の如きが最も古いものであらう。

工藝の方面で、やゝ寫生に近き獅子を擧ぐるならば、熊野の速玉神社の金銅獅子牡丹の飾板の如きそれであらう、毛の描寫の如きは唐獅子風であるが、前半身が大きく、後半身のやゝ痩せた形など、如何にも寫生